

十章 前進

(一)

闇の彼方に、青い恒星が輝いていた。

竜と一緒に、白磁の扉の前に立つ。開ければ、あるじ〈世界の主〉がいるはずなのだ。右の拳で、幾度か扉を叩いた。

「来ました。開けてください」

返事はない。

「僕は、ここにいます。
デユラコーン 竜と、僕は」

耳元で、小さな声がした。

「……だれ？」

男の声か、女の声か、それはわからない。ただそこには、まどろむような響きがあった。
「あなたは、だれ……？」

ジェノは息を吸いこみ、胸を張った。見上げれば、竜もそんな顔をしている。

「僕は、ジェノ。ジェノ＝カミロ」

自分の声に気づいて、ジェノは目を覚ました。

白い触手虫たちがうごめいていた。

「うわっ！」

ジェノは弾かれたように半身を起こして、転んだ。

竜はジェノの目の前で、身動きもせずに倒れていた。

無残に噛み破られた喉の周りには、白い虫どもが何匹も群がっている。

「畜生！」

少し離れた窪みに、銃が落ちていた。

革の紐は食い破られて、銃身が半分水に浸かっていた。

小虫たちを蹴散らしながら、ジェノは急いでそれを拾った。

「デュラコーン
竜！」

何かにつまづいて、ジェノはまた水の中に突っ伏した。

「くそっ！」

足を引っ掛けたのは、ぼろぼろになったデュラコミア竜の肋骨だった。

ばしゃばしゃと音を立て、肉をかじっていた虫どもが逃げていく。

縦穴の中は暗く、何もかもがおぼろげだった。岩壁の輝く青い筋は消えて、遠い青空の光だけが射しこんでいる。

「デュラコーン
竜！」

ジェノは浅い水の中を這った。

体が重い。ジェノ自身にも、大小の触手虫が取り付いているのだ。

「離れろ！」

ジェノは宙に向かって一発撃った。

クモの子を散らすように、小虫たちが水溜りへと逃げていった。

竜の傷口に触手を差しこんでいる奴らは、まだ意地汚く張り付いたままだ。

その脇腹に手を伸ばして、ジェノは触手虫の一匹を引きむしった。

「!?」

手ごたえが、やけに軽い。

ジェノの手の中で、白い外殻がからりと崩れた。

虫の肉は全てなくなっていた。殻の内側には黒い皮膚と腱だけが、汚れたぼろきれのようにくつついている。ジェノは恐る恐る、竜の傷口に手を触れた。

触手が差しこまれた跡は、そのままの形で不自然に隆起していて、その上に新しい皮膚が作られていた。ジェノは足元を見回した。

浅い水の中に、からつぽの白い殻がいくつも沈んでいるのが見えた。

さつき自分が倒れていた所にも、殻だけになった虫たちの死骸が散らばっていた。

（こいつら……）

ジェノは自分の右肩に触れた。

竜デュラミア擬に食い裂かれたはずの肩は、盛りあがった肉にしっかりと繋ぎとめられている。

そういえば、腹にも穴が開いていたはずなのだ。

ジェノが手を当てると、その部分は巨大なみみず腫れのような跡で覆われていた。

上着の布地がなくなっていた。

(こいつらが、僕らを助けた?)

大きな攻性生物が怪我をすると、その傷を治しに、集まってくる連中がいるのだという。

会ったばかりのころ、フォルストがそう教えてくれた。本当だろうか。

ズボンは左右それぞれ、太腿と向こう脛のところからちぎれていた。すその残りは、ブーツのくるぶしに引っかかっている。ジェノは膝をつく、竜の頭に手を当てた。

竜が、かすかに目を開いた。

ジェノは大きくため息をついて、その頬に顔をうずめた。

「デュラコーン
竜……」

小虫たちが遠巻きにして、かさかさと様子をうかがっている。

(主……)

呼び声にびくりとして、ジェノは辺りを見回した。

「！」

気がつけば縦穴の壁は、白い小虫たちでびっしりと覆われていた。

上から、下から、何百ものささやきが聞こえてくる。

(主、ジェノ)
ますたー

(ジェノ||カミロ)

じわじわと、白い群れが距離を詰めてくる。

(ニセモノ、^{ましたー}主、死ンダ)

(ジェノ、ホンモノ、^{ましたー}主……)

竜がよろよろと立ち上がった。

怯えた、低いうなり声を立てている。喉の傷のせいで、叫ぶことができないのだ。

必死に首を振って、光の矢を撃ち出そうとする。だが、それもできない。

^{デュラゴン}
「竜……」

ジェノは銃を構え、後ずさった。

突然、竜が翼を広げて、ジェノを覆った。

「！」

いくつもの水音と、鈍い骨の音が響いた。

^{ましたー}
(主！)

^{ましたー}
(主！)

竜が激しく翼を振って、小虫たちを吹き飛ばした。

ジェノはその下を走り抜けて、すばやく竜の背に駆け上った。忘れていた吐き気が甦る。

「逃げよう、僕らを〈主人〉にする気だ！」

大崩落で全てを失った後も、彼らは代わりを探していたのだ。

どこか遠くの戦場から地下水流に乗って流れ着いた、あの変わり果てた〈乗り手〉たちを捕らえ、
そして……。

「……うわっ！」

白い触手が、目の前を塞いだ。

ジェノは銃の握りで、小虫を叩き落した。

デュラコーン

「竜、平気か？ 飛べるか!?」

竜は一息で喉を鳴らすと、尻尾を壁に叩きつけた。

飛び散る体液の臭い、碎ける甲殻のきしみ。中身の潰れる音がする。

ますたー

（主！）

虫たちが、次々に飛びかかってきた。

（イカナイデ）

（置イテイカナイデ）

（コワイ）

（何デモスルカラ）

（逃ゲナイデ）

（オネガイ）

ジェノは目をつぶって、滅茶苦茶に撃った。

焼け焦げた生き物の臭いがする。

竜が壁を蹴る。水と闇の全てが揺れる。

小虫たちの悲鳴が、頭にかんがんと響いた。

ますたー

(主)

ますたー

(主、タスケテ)

(イタイ)

(タスケテ、イヤダ)

(イタイ)

(イタイ)

(クルシイ)

(イタイ)

突然、足をつかまれた。

ジェノは無我夢中で、その白い塊を撃った。

なおも、すがりついてくる虫どもを蹴飛ばす。触手がちぎれ、四方に吹き飛ばす。壁や水底から伸びた無数の触手が、竜とジェノとを捕らえようとする。

「うわああああっ！」

ジェノは絶叫した。

竜が床を蹴った。

ふらついてはいるが、力強い羽ばたきが空気を打った。

「どけええっ！」

降ってくる影を、ジェノは端から碎いていった。

見上げる先には、小さく青い丸窓がある。

「……道を、開けろっ！」

その切り取られた青空の中に、ジェノは無数の星を見たように思った。

(二)

深い穴の底から空を見上げると、昼でも星が見えるのだという。

飛び出したその青空の下には、延々と続く、黒い溶岩台地が広がっていた。

岩の塊に沿って生えたわずかな地衣類が、太陽に灼かれていた。

竜はその上に、ふらふらと着地した。

よろけた脚がバランスを崩し、ジェノは棘の生えた灌木の茂みに転がり落ちた。

竜の倒れる音がした。

「デュラッ！
竜！」

ジェノも竜も、すぐには起き上がることができなかった。

ジェノが足を引きずって茂みから抜け出すと、竜は岩の上に伏せて、荒い息を吐いていた。翼の

付け根から、また血が流れ出している。ジェノは泣き笑いのような顔になった。

「逃げ出せたよ」

竜がわずかに首をもたげて、ジェノを見つめた。

「また、空の下に戻ってこれたんだ」

竜の傷口に手を伸ばして、ジェノは汚れた血のりや、触手のかすを取り除いた。

「君のおかげだ。……だいじょうぶ、僕たちはまだ、生きてる」

竜は満足そうに喉を鳴らすと、柔らかな地衣の上に頭を置いて、うとうととまどろみはじめた。

ジェノも、そのそばに座りこんだ。

そして岩のふちの地衣をやや大きめにはがすと、ゴミを取って竜の頭に乘せた。

もう一つ、小さい地衣の帽子を作って、自分の頭に乘せた。

ナイフも、食料も、水袋もない。帽子も、鞆もなくしてしまった。

胴と袖の裂けた上着を脱ぐと、破れかけたズボンの腰に巻いた。ベルトの代わりにはなるだろう。竜が片目を開けて、ぱたぱたと翼のふちを動かした。

ジェノは竜の脇腹にもぐりこみ、彼の傷口を背中で塞いだ。そこに座ると少しだけ、風と日差しが和らいだ。これなら肩に火ぶくれを起こさずにすみそうだ。

「ありがとう」

ジェノが胸に視線を落とすと、銀の指輪が光っていた。

首にかけていた紐は、千切れずに残っていたのだ。

(そうだ)

ジェノはブーツを脱いだ。

触手の取りついた跡が、右ひざから脛にかけて、むくむくと充血していた。

ジェノはその部分から目をそらして、靴底近くの革の縫い目を爪でこすった。

(よし)

手ごたえを感じる。銀の小粒と白銅貨を、両方の靴に縫いこんでおいたのだ。

(とにかく、街か村を見つけて、水を買おう)

まだ、旅を終わらせるわけにはいかない。

(それまでは……、僕は死なない)

あの男は、ジェノを使徒と呼んだ。

彼は何を、どこまで知っていたのだろうか？

何も知らなかったのかもしれない。

ただ瀕死の意識の中で、彼の信じる神々と、愛しい人の幻を見ただけなのかもしれない。

それは、ジェノにはわからない。

ただ……。

何となく、ジェノは感じていた。

これはきつと、何かの約束なのだ。

遠い昔から、竜と人との間に、何度も繰り返されてきたはずの。

ジェノは再びぼろぼろの靴を履くと、溶岩台地を見渡した。

頭の中の地図に、こんな場所は描かれていない。どこまで流されたのか、考えるのも嫌だった。

(南……)

地平線よりもやや近く、数千リオン先に、小高い溶岩の丘があった。

竜が目覚ましたら、今日はあそこまで一緒に歩こう。

焦らずに、体力を考えて。

ジェノは竜の温かい脇腹に手を触れた。ひきつった傷と、触手の跡が生々しい。

彼の驚異的な回復力を考えても、今日のうちは、光の矢を撃つのは難しいだろう。

ジェノは銃を抱え、いつでも構えられるよう、膝に置いた。

はるか上空を飛んでいるのは、鳥たちだろうか？ それとも、餌探しの変異種だろうか？

ゆるやかに上下する竜の脇腹を撫でながら、聞こえない程度に、ジェノはつぶやいた。

「僕が、君を守る。今度は、必ず……」

(三)

竜の怪我は、それから二日経っても治らなかった。

あの遺跡で、力が吸い取られてしまったかのようにだった。

半時間も飛ばないうちに、疲れきって地面にへたりこんでしまう。

竜はそれでもなお、前に進もうとするので、ジェノは必死でやめさせなければならなかった。翼の付け根から血を流しながら、また、竜が空を見上げた。

「だめだ」

ジェノは風避けにできそうな、大きな岩の陰を指差した。

「今日は、ここで休もう」

何よりも怖いのは、疲労の蓄積だ。砂漠に生まれた人間ならば、誰もがそれを知っている。

竜が首を振って、いやいやをした。

「頼む。僕の言うことを聞いてくれ。寝て、休まなきゃ駄目なんだ」

ジェノは灌木の茎を折って、何本か集めた。

竜が岩陰に寝そべり、尻尾でジェノの体を巻きこんだ。

「ありがとう」

喉の傷跡はまだ生々しく、あちこちから血が滲んでいる。

ジェノの体も、調子が狂っていた。脚や肩の腫れが引かない。

右ひざの裏に手をやると、べつとりと黄色い膿がくつついてきた。

（どうすればいい……）

このままでは町や村にたどりつく前に、野垂れ死にするような気がしないでもない。

無理をしても竜に飛んでもらって、最寄りの村を探すべきなのだろうか。

しかし、今にも千切れてしまいそうな竜のぼろぼろの羽を見ると、いったいどうしたらいいのか、ジェノにはまたわからなくなってしまうのだ。

村が見つかったとして、竜を診てくれる医者はどこにいるのだろうか？

ジェノはため息をついて、さっき集めた灌木の茎を縦に裂いた。髓の中には、何匹か、まるまるとした白い芋虫が入りこんでいた。ジェノはそれをつまんで嚙んだ。一日ぶりに、喉が潤う。

ふと、自分を見つめる気配を感じた。

足元に目を落とすと、小さな赤い甲虫が、じつとこちらをうかがっていた。

ジェノはひざの裏の膿をすくって、そいつの目の前に塗りつけた。

彼はちよつとびっくりしたようだったが、すぐに膿の固まりに飛びついて、舐めはじめた。

「旨いか？」

虫は嬉しそうに、触角を細かく震わせている。

(四)

「クロン！」

灰色の翼の影に、友の背中を見つけた。

彼は工具箱を地面に広げて、機体の側面から手を入れていた。

クロンが、びっくりと振り返った。

目の周りは、まだ心もち腫れぼったい。

「ジェノ……」

しゃがんで、ジェノは工具箱からネジをつまみあげた。

「おい、錆びてるよ、これ」

「えっ！」

クロンはあちこちからガラクタを集めるのが好きだ。壊れた船や死んだ遺跡から、細かい部品を集めてきては、箱の中にしまいこんでいる。

そしていざ、整備の人手が足りなくなると、うまく合いそうな部品をはめこんで、なんとなく飛べるようにしてしまうのだ。

「ありがとう、ジェノ」

クロンは気恥ずかしそうにネジを受け取って、工具箱を閉じた。

「みんな、心配しているからさ」

クロンはまた、目をゴシゴシとこすった。いつものことだ。

「うん、今片付けたら行く。もう、平気さ」

それを聞くとジェノはちよつと困ったような顔になって、クロンの目を見つめた。

「だいじょうぶ、もう泣かない。昨日は、本当にごめん」

「気にするなっば」

「でも……、いいんだ。僕も決められたから」

ジェノは黙って、クロンに干しカクチを渡した。

クロンはそれを受け取ると、少し笑って、ポケットに突っこんだ。

「だけどね、誤解しないで。僕はもう、死ぬのは怖くないんだ」

「クロン」

「ただ、母さんに会いたかった。僕は……」

「わかるさ」

「ずっと、なんて冷たい人なんだろうって思ってた。メッカニア全体の正義よりも、キュプロさえ無事なら、それでいいのかって。父さんが、死んだときも」

クロンは工具箱をしまい、砂埃で曇った翼を拭きはじめた。

「でも違ったんだ。僕はバカだ、いちばん大事なことに気づかないままでさ」

いつものクロンとは違って、信じられないほど口数が多かった。

「母さんに会って……。会うだけでいい。僕を、許して欲しかったんだ」

「そっか」

「後で、きちんとみんなに謝るよ。先に行つてて」

「わかった」

ジェノは手を振って、もと来た道を戻りかけた。

「ジェノ！」

後ろから、クロンが呼びかけてきた。

「なに？」

「……本当に、ごめんね」

「だから、もう気にするなよ」

そう言つて、ジェノは笑つた。

クロンも笑つた。

目の周りは腫れぼったくても、その顔はいつもの子供っぽい彼より、ずっと大人に見えた。
(覚悟を決めた奴は、顔つきからして変わるもんだ……)

前に、隊長がそんなことを言っていたっけか。

ジェノは岩陰をつたつて歩いていった。

風に乗つて、歌声が聞こえてきた。

オドスの声だ。いつ聞いても、まるで本職の歌うたいみたいだ。

外国の歌だろう。歌詞の一部を、きれぎれにしか聞き取ることができない。

立ち止まつて聞きほれていると、頭の上から声が降つてきた。

「いい声だよな。さすが、置屋の息子だぜ」

「シエロ！」

ジェノはきつと頭を上げた。

「そんなこと、言うもんじゃない」

シエロの笑い声が響いた。

岩を登ろうと手をかけると、上から彼の腕が伸びてきて、ジェノを引き上げた。

「よっと」

シエロは裸足だった。

ブーツの縫い目に挿した煙草を抜いて、彼はその場に胡坐をかいた。

「泣き虫に会ってきたな」

「うん。思ったより、平気そうだった」

「まあな。あいつは意外にしぶとい」

シエロは背中をかがめると、足の裏に煙草の火を押し付けた。

陶器のつばから、軟膏を取って塗る。

「痒くて、たまらないんだよ」

シエロの足の裏は、ぼろぼろに角質化して、ところどころに赤い斑点が浮いていた。

「お前も塗るか？」

ジェノは首を振った。

「僕は、もう治った」

「いいなあ。おれ、皮膚が弱いのかな」

「僕は、靴のせいだと思うな。革が駄目になるの覚悟で、いっぺん日なたに置けば？」

「もう、時間がない」

「そりゃそうか」

二人は声を合わせて笑った。

「お前が本当のところ、どう考えているのかわかんないけどさ」

足の親指に軟膏を摺りこみながら、シエロが言った。

「おれはここに来て、幸せだったと思ってる」

「ふうん？」

ジェノはカクチの実をほおばった。

「あ、おれにも」

「手を拭いてからね」

「……それでさ、まあ、どうせ死ぬわけなんだけれども。かえって風通しがいいだろう？　ありえないぜ。お互いまっとうに思ったままのことを、思ったままに言える世界なんて。クロンみたいな王子様も、おれみたいな犬ところも、ごちゃごちゃいるのにさ」

シエロは煙草の煙にむせながら、足の裏の皮を焼く。そして、言葉を続けた。

「おれたちがもといた世界では、どいつもこいつも嘘つきばかりだった。くだらない人間に、思ってもいないようなおべんちゃんらを並べて。そいつらの命令で、大して嫌いじゃない連中にも意地悪をして。自分のせいじゃないとか何とか、適当に言い訳をつけて」

ジェノは黙って、カクチを嚙んでいた。どうしてだろう、あまり味がしない。

「だろ？」

「あ、ああ……。そうだね」

帝国兵の威張りくさった顔が、村の家々を見回しながら歩くとき……。継父は不自由な脚を引きずりながら、その後ろをついていくのだった。

「それが現実なんだって、おれもずっとそう思ってきたし、実際にそうしてきた。塹壕にいたときもさ」

「現実、か……」

「でも、いざ連中の世界を抜け出してみると、わかるだろ、嘘っぱちだったってことが」

「そうだね。ここなら、みんな本当のことを言い合えるもの」

外部の人間なら、意外に思うのかもしれないが……。

この隊には狂信者など、一人もない。

大メッカニア主義は理想の一つではあったけれども、そのうさんくささも、よく話題に上がった。総司令部の人間が来たときにだって、彼の臆病者っぷりは、面と向かってあざ笑われたものだ。

自由だった。何でも言えたり、お互いの話も、真面目に聞いた。

階級章など、なんの役にも立たないことは、誰もがよくわかっていた。

みんなを繋いでいるものは、ただ義勇兵の誇りだけだ。

「おれはもう、イヤなんだよ。ニセモノの世界に戻るなんて」

「……シエロ」

「もう少し早ければ、逃げ出せたのかもしれない。で、それからどうする？ オドスは街に戻って、

また〈妹〉たちに帝国兵相手の歌を仕込んで。おれはただの犬っころになって、振りたくもない尻尾を振ってまわって」

「なら、僕は徴税人になって、貧乏人から搾り取るわけだね」

「最低だな」

「最低だね」

シエロが立ち上がって、ブーツを履いた。

「じゃ、おれはもう行くよ」

「え？ だって出発は、まだだろう」

「お前も、行けよ。相棒が待ってるだろ」

「相棒？ クロンは後から来るって……」

シエロがくつくつと笑った。

「だめだなあ。相変わらずお前は、田舎の坊ちゃんなんだから」

「シエロ？」

「お前だって、わかってないじゃないか」

「……どうしたんだ？」

「思い出せ。お前は確かに見たはずだ」

岩場が溶けて消えると、ジェノとシエロの目の前に、黒い砂漠が広がった。

月が、二つ出ている。

シエロはうつとりと黒い砂漠を見つめた。

柔らかな砂が、まるで水が流れるように、数秒ごとに新しい砂丘をつくっている。そのまま沈んでいきたくなくなるような、妖しい美しさがあった。

ジェノは急に不安になって、シエロの手をつかんだ。

「シエロ、そっちに行くな。僕と戻ろう」

「……できない。言っただろ、おれはもう、ニセモノの世界はうんざりだって」

「駄目だ！」

ジェノはシエロの手を引っ張った。

「行かせてくれ」

シエロは恐ろしい力で、ジェノの腕をひねり上げ、振りほどいた。

「気づけよ……。おれだって、もう、こんな姿ではいられないんだぜ？」

そう言ったシエロの体が、ばらりと崩れた。

飛行帽の中からも、袖の中からも、無数の砂葬虫スナシムシが湧き出してきた。

「シエロ！」

ジェノは必死で、残った指をつかんだ。

指の腱は解け、ジェノの手の中には小さな骨だけが残された。

数千の砂葬虫スナシムシたちが、砂漠の上を走り去っていく。

「シエローッ！」

砂漠の夜空が剥がれた。

それは数万枚の紙でできていた。

「何なんだ！ この世界が何だつていうんだ！」

足元も、月も星も、ジェノを残した風景の全てが、紙となって舞い散っていく。

「ふざけるな、戻って来い、シエロ、クロン！」

ジェノはみんなの名前を叫び続けた。

「いないのか、オドス！ フォルスト！ ニムラ！ 隊長！ ゼンさん！」

そして、ジェノは目を覚ました。

びっしりと、冷や汗をかいていた。

右手は、銀の指輪を固く握りしめていた。

(五)

ザアルの瓶詰めの香りが、部屋の中に漂っている。

ジェノがはるか遠くで目を覚ました午後、その男もまた、昼寝の最中であつた。部屋の机の上には、途中で放り出された、大量の書き物が積み重ねられていた。

「……バカだなあ、お前は……」

男が寝言をつぶやいた。

聞いているものは、誰もいない。

彼は寝返りを打ち、背を丸めて喉を鳴らした。夢の中で笑っているのだ。
(お前ほど突き抜けたバカは、見ていて気持ちがいい……)

……どたり。

音がして、また、子供が床に落ちる。

十^{とお}を少し過ぎたぐらいの少女だ。両腕に、金属の手枷が嵌められている。
男の声を鉄格子ごしに聞いたのか、彼女はくると振り向いた。

「デレク！」

少女は眉をしかめ、舌打ちをすると、再び起き上がって寝台にのぼった。
壁のひとときわ高いところに、白い銃が掛けられていた。

少女は、今日で何十回目かの跳躍を試みる。

「無駄さ」

跳んだ。寝台と彼女の脚を繋ぐ鎖が、やかましい音を立てた。

両腕が宙を掻き、また床に落ちた。

「言っただろう、無駄だって」

男は組んでいた腕をほどくと、少女を閉じこめている鉄格子に近寄った。

「なんで、そんなに銃が欲しい？ 手に入れて、それからどうする？」

少女は男の目を見ずに、吐き出すようにつぶやいた。

「敵を殺す」

「頼もしいな」

「それから、おまえも殺す」

「頼もしいな」

少女はいらいらとして、手枷をじゃらじゃらと鳴らした。

「おまえは嫌いだ」

「どうして」

「長老みたいに、優しくないから」

男は音もなく笑った。

それがまた、彼女の気に障ったらしかった。

「敵が攻めてきてくれたら、こんなところ、すぐに燃やしてやる」

「それは楽しみだ」

「くたばれ、デレク」

「女の子が、そんな言葉を使うものじゃない。それから舌打ちもやめろ」

「どうして？ いつものおまえの、マネをしただけじゃない」

少女が立ち上がって、檻の境に近づいてきた。

男は鉄格子の隙間から、中へと手を伸ばした。

「危ない！」

後ろから、怯えた声が飛ぶ。

給仕係の少年だ。

彼は、片目に眼帯をしていた。左の指先にも、真新しい包帯が巻かれている。

「デレク様、そいつに触らないで……」

男は忠告を聞き流した。

少女の頭に手を置いて、短い銀髪をくしゃくしゃと撫でる。

彼女は子猫のように目を細めて、されるがままにしていた。

少年が食事の盆を持ったまま、ぽかんと口を開けて、その様子を見ている。

「被り布はどうした」

「ちぎった。織りが下手なんだもの」

「困ったお洒落さんだな」

「長老が、もっといいのをくれるって言ってたよ」

男が呆れたように、舌打ちをした。

「あのエロ爺い」

「？」

少女はきょとんと首をかしげた。

「それは悪口の種類か」

「女の子は、真似するな」

給仕の少年は、軽く目礼をすると、盆を格子の下に押しこんで去った。

塔の螺旋階段を下りていく足音が聞こえた。

デレクは格子に顔を挟むと、少女の頭を引き寄せてささやいた。

「鍛錬はしているか？」

少女は足で盆を引き寄せながら、黙ってうなずいた。

「ナイフがあるつもり、銃があるつもり。毎晩やってる」

「よし。……誰にも、気づかせるなよ」

少女はニヤリと笑った。

木の椀の中から煮豆を四粒つかむと、軽やかに数歩下がって、目にも止まらぬ速さで、男に向かって投げつけた。

額・鼻筋・唇・喉。

煮豆は一粒ずつ、精確に命中した。少女は嬉しそうに言った。

「デレク。これが鉄の玉なら、おまえは死んでる」

男は足元に落ちた一粒を拾い上げると、塵を払って、それを食った。

「長老が口を出さなきゃ、うちの連中と一緒に、もっと仕込んでやれたんだが」

「女の子は、そんなことをしなくてもいいんだって言ってたよ」

「ぬけぬけと、スケベ爺いが」

デレクは少女の額を、指で軽くはねた。

「研ぎ続ければ、その技が、いつかお前を助けてくれる……、忘れるな」

「でも、いい人たちだよ。ザアルのケーキも、好きだけくれるし」

デレクは気が抜けたようにため息をつく、首を振った。

「バカだ……。お前は、底なしの大バカだ」

「長老は、バカっていう奴がバカなんだって言ってたよ」

「アホか！ 頼むから、もっと頭を使って生きてみる！」

デレクは両手で鉄の格子をつかみ、皿からスープをすすっている少女に怒鳴った。

響かない程度に声を低めて、言葉を続ける。

「お前は魔女でも、外術使いでもない。素質はあるが、鍛えなければただのガキ、しかも女ときてる」

「女はだめか？」

「駄目じゃないが、駄目だ。長老が期待するほどの力は、今のお前にはない」

「？」

「いざとなったら、魔法で街が守れるとも思ってたやがるのか……。こんな、手枷なんか嵌めやがつて」

少女は腕を広げて、男に鎖を見せた。銀の浮き彫りが、窓からの光で輝く。

「動きにくいけど、きれいだから許してるんだ」

男はまた、げっそりとため息をついた。

「このままだと、いずれ、牢から出られずに、俺たちや街と心中する羽目になるぞ」
少女が、びくりと腕を下ろした。

「……イヤだ」

「じゃあ、聞け」

デレクは少女の耳をつかんで、小声で言った。

「自分を姫様だと思うな。お前は刃の切っ先だ。俺たちは、お前がシーカーの刃として戦うことを期待しているし、帝国はお前を兵器として考えている」

「私が、兵器？ さっきは、ただのガキだって言ったのに」

「それこそが、『諸事情による認識の相違』というヤツだ。わめいたってどうにもならん。この機会にしつかりと学習しろ」

『諸、事情による認識の……相違』か、むつかしい言葉だな」

「生きたければ、切っ先を研いでおけ。そして俺が置いた銃は、その教訓だ」

デレクは少女の耳から手を離すと、彼女の頭を小突いて、格子から一步下がった。

少女は食べ終わった盆を蹴飛ばすと、寝台の上に座りこんで頬杖をついた。

「やっぱり、おまえは大嫌いだ。銃を手に入れたら、まっさきに殺してやる」

「まことに光栄のみぎりです、姫」

そう言うと、男は木の扉に手をかけて、少女に背を向けた。

少女が寝転がる音がした。

「……嘘つきだらけだ、お前もみんなも。いつか……」

男は振り返らずに、軽く返した。

「いつか？」

「みんな燃やしてやる」

「まったくだ」

デレクは扉を閉じた。唇の端に、わずかに苦笑が浮かぶ。

次の寝返りで、彼は床へと転がり落ちた。

「うおっ！」

目をこすると、窓からの白い光で、部屋の埃が踊っているのが見えた。

「さて……」

何の夢だったのだろう。

大人になって随分経つから、見た夢はすぐに忘れてしまうのが習いだ。

けれど、悪い夢ではなかったような気がする。

隣の部屋から、壁を叩く音がした。

「モモスです。どうなさいました？」

「悪いな、転げちまった。久しぶりにいいベッドで寝たもんだから、落ち着かないぜ」
壁の向こうから、小さな笑い声が聞こえた。

デレク……、スキアド、オラス〈影の目デレク〉は、服の埃を払うと、机から眼鏡を取った。
あくびを一つ。インク壺を掻き回す。

急いで、一仕事しなければなるまい……。夜からはまた、頭の痛い会議だ。

(六)

ぼろぼろの服を着て、白い銃を提げた少年が、往來を行く。

全身から血の腐った臭いを漂わせて、肩には攻性生物の死骸をかついでいた。上半身は破れた汚いシャツだけで、ほとんど裸同然だ。ズボンも、脛から千切れている。

同じように着のみのままのはずの避難民たちでさえ、彼の異様な格好には、思わず道を開けた。
少年は革屋の前に立った。

中から主人が出てきて、少年と一言二言交わした。

革屋はぶつぶつと何か言いながら、死骸を受け取って奥へと消えた。

おかみが出てきて、何枚かの硬貨を握らせた。

そして、扉は音を立てて閉まった。

少年はほっと息を吐くと、硬貨を握りしめて、道の端へと座った。

砂埃が、空を黄色く染めている。

その様子を見ていた隊商の一人が、ひそひそと隣の男にささやいた。

（……死にぞこないだ）

耳打ちされた男が、シツと唇に指を当てる。

（……みろ、どこで拾ったんだろうな、あの銃は）

（特攻くずれのガキか。村じゃ、おちおち、女たちを水汲みにもやれねえってよ）

（おい、気をつけろ……。こつちを見たぜ）

ジェノはぼんやりと往來を眺めていた。

人がある。

みんな、生きていた。

誰もが、忙しそうに目の前を通り過ぎていった。

それはとても不思議なことだ、そう思った。

人の流れは、南からが多かった。

破壊された故郷を一時逃れて、キュプロかその西へと抜けるのだろうか。

人波の中には、帝国兵もいた。厚手の黒いコートを羽織っていた。二、三人が大股で歩いていく。

その間を抜けて、ウーブ師団の腕章をつけた自警団が走っていった。

彼らは、互いに無関心なようだった。

フネの出現以来、戦況は混乱に混乱を極めていた。いったいどちらが優勢なのか、誰にもわからなくなっていたのだ。

往来でじつと耳を澄ましていると、飛び交う噂や憶測が、きれぎれに聞こえた。

キュプロとカルモが帝国と手を組んで、旧勢力の粛清に乗り出すらしいとか……。

ラドーが帝国内の反乱分子と手を組んだものの、フネに艦隊を全滅させられたとか。

弾む笑い声がした。

男の子が二人、犬ころのようにじゃれあつて、走り回っていた。

一人は粗末な薄い服を着て、一人は手織りの上下に、色帯を締めている。どちらも避難民の子には違いなかったが、色帯のほうは、明らかに開拓村の帝国人の子だ。

片方が、もう一人の子の名を呼んだ。

呼ばれたほうは地面に転げて、けらけらと笑っている。

ジェノは頭を垂れ、両手で顔を覆った。

意味もなく、泣きたいような気分だった。

僕たちは、全てを奪われなければ、何かを止めることさえできないのだろうか……。

町は平和だった。

だがその平和は、人々が自ら望んで争いを止めたためではなかった。

結局のところ、誰にもどうしようもないのだ。もし、どちらかが優勢だという情報が入れば、この町でもまた、何かが起こるに違いない。

生きている人間の世界は、本当に不思議だった。

そして、ある日ふらっと風向きが変われば、何もかも無かったことになるのだろうか。

消え去った村のことも、全滅した艦隊のことも、ジェノたちがこの世にいたことも。

ジェノは深いため息をついた。

疲れが体中に溜まっていた。腰を下ろしてしまったのが運の尽きで、しばらく立ち上がれそうにない。

砂漠の岩陰で待っている、彼の姿を思った。

攻性生物に襲われていないだろうか。傷が熱を持って、苦しんでいないだろうか。

(早く、戻らなきゃ……)

まだ、やることは山ほどあった。

滅菌した脱脂綿と消毒液を探して、ナイフと上着を手に入れて。

そうだ、それから水も必要だ。

さっきの攻性生物は、大した金にはならなかったけど、ビスケットぐらいは買えるだろう。

ふと、風の動きが止まった。甘い匂いがする。

ジェノは頭を上げた。

「……だいじょうぶ？」

三十くらいの女が、ジェノを心配そうに見下ろしていた。

女は両手に、粗い目の籠を抱えていた。

籠の中から、焼きたての薄パンの香りが漂った。

「ほら、元氣を出して」

女がジェノの手に、それを握らせた。

「あ……」

ありがとう、と言おうとして、喉の奥が詰まった。

ジェノは照れ隠しに、猛然とパンにかぶりついた。

中には、香辛料を振ったひき肉が挟まっている。何の肉かわかったものではないが、むやみにおいしかった。

「あそこで配ってるんだよ」

女は往來の向こうの十字路を指さした。

「今は、みんな大変だけどね。でも腹が埋まれば、人間、何とかなるからさ」

ジェノは女に頭を下げた。

飲み下すと、奥歯が震える。どうしてこんなに何も言えなくなるのか、よくわからない。

「具はないんだけど、汁物もあるんだよ。少し並ぶけど」

そう言つて、集まってくる埃だらけの人々に、女は端からパンを配った。

「爺さん、あんた何回目だと思ってるんだい。しょうがないねえ」

籠の中身は、みるみるうちに減つていった。

「最後はほら、兵隊さん、あんたにあげるよ」

ジェノは立ち上がって、また、女に頭を下げた。

今度は、ちゃんと言える。

「どうも、ありがとう……。助かります」

「ねえさん！」

頭の上から、大きな声が飛んだ。

「なんだい？」

バルコニーには、若い娘が立っていた。

ジェノが彼女を見上げると、その娘はひよいと手すりによりかかった。

しどけない薄物をまとい、焼きごてで縮らせた髪を紅金色に染めている。

そうして、後れ毛をちよつとかき上げてみせた。

ジェノはどきりとして、気まずそうに目をそらした。

娘のほうはそんなことには構わず、赤く塗った唇に銀の煙管をくわえながら、ジェノの上から下までをじろじろと見る。

「へえ、弟さんに似てるじゃない」

ジェノの隣で、籠を抱えた女が肩をすくめた。

煙管の娘が、言葉を続けた。

「おいしいでしょ？ それね、早起きしてあたしが粉をこねたんだから」

そう言うと、彼女は朱色のつけ爪を、ぽきりと折り取ってみせた。

「そんな格好で外に出るんじゃないよ、ばか」

「ふふん」

娘は手すりに肘をついて、煙を吹かした。

「あのねえ、ムーリカ姉さんがいないの。どこに行ったか知らない？」

「ありゃ、聞いていなかったの、あんだ」

女が驚いたように言った。

「あの子なら、今朝方、例のいいひとが迎えに来たよ」

「ええっ！」

娘は手すりから身を乗り出して、煙管を取り落としそうになった。

「なんか、随分な額の小切手を出してねえ。男なんて勝手なもんだよ、何年も音沙汰が無かったくせに、急に『俺と来てくれ』だもの。婆さんが商会を叩き起こしてさ、印章が本物かどうかを、確かめさせて……。大変だったんだから」

「じゃあ、姉さん行っちゃうんだ！ いま、どこ？」

「旅支度をしてるから、そこらへんのどこかにいるんじゃないか？」

「あたし、借りてた紅を返してないのよ……。行ってくる」

どたどたと足音を立てて、娘が二階へ引っこんだ。

ジェノはあつけにとられて、ぽかんと突っ立っていた。

はっと気がついて、手の中のパンをほおぼった。

暖かくて、塩味がした。

上等の粉ではないが、こね方が上手いのだろう。ちょうどいい歯ごたえがあった。

今の煙管の女の人が、化粧つけのない顔で粉まみれになっている姿を想像して、ジェノはくすりと笑った。

「そうだ、どこかに井戸はありますか？　なるべく、きれいな水を買いたいんです」

女はうなずくと、通りの奥まった路地を指さした。

「薬屋の裏に行きな。表でみんなの使つてるところは、よくない。でも、ちつと高いよ」

「ありがとう」

女が、ジェノの肩を叩いた。

「じゃ、頑張りな。スープが欲しけりや、あとで十字路に並ぶんだ、いいね」

女が立ち去ると、集まっていた避難民たちも、潮が引くように消えていった。

ジェノはパンを平らげると、ポケットに手をつこんで、まっすぐ路地へと向かった。

(七)

店の場所を確かめてから、ジェノは馬洗いで、シャツを絞って体を拭いた。垢と埃が、ぼろぼろと落ちた。

膿んだかさぶたには、なるべく触らないようにした。はがしたら、あとで、どんな黴菌が入るかわからない。それでも顔ぐらい拭いておかなければ、店に入れてはもらえないだろう。

洗い場の共用桶を借りて、頭も洗った。伸びてきた髪の毛が気になる。今はきつと、ウーブの衛星都市のどこかだろう。だとすると、ずいぶん北西の方まで流されたことになる。目指す南がさらに遠くなったのは、確かなことだった。

この井戸の下も、〈黒いレーテ〉の支流の一つに当たるのだろうか。

節々が痛む。腕もよく上がらない。

竜^{デムラミ}擬の体液がかかった場所には、赤茶けたシミができていた。

「おおい」

後ろから、声を掛けられた。

異国の隊商の一人だった。帝国領内から山脈の縁を回って、ウーブにたどり着いたのだろう。彼らはたいてい、ハンターをも兼ねている。

血の気の多い連中だが、この人々は砂や攻性生物を恐れない。戦争中でも、細々とした物資の流れが途絶えないのはそういうことだ。

「あんだ、おれ。得物を交換しよう」

ジェノは首を振って、また、シャツを絞った。

「飯もある。服も、剣も、いい弓もある。みんなやる」

男の熱っぽい視線が、ジェノの銃に注がれていた。

「駄目だ」

「どうして？ 普通の銃で充分。あんた、そのほうが得」

ジェノは手を振って、男を追い払おうとした。

「それ、おれのひいじいさんも持ってた。でも親父の代に、憲兵に取られた。だから欲しい」
ジェノは男に近寄った。

「あなたは、ナイフを扱ってないか」

「なら、すぐ、やる」

男は帯ごと、自分の腰からそれを外した。

握りに布の巻かれた、簡素なつくりの、大きめのナイフだ。

ジェノはそれを革の鞘から抜いて、刃の状態を確かめた。

「帯もやる。あんた、得した」

「ありがとう」

腰のベルト通しに帯を巻くと、軽く握手をして、ジェノは男に銀貨を握らせた。

男が、残念そうな顔でジェノを見ている。

「やっぱり、それは駄目か」

「駄目だね」

男は非難がましく、ナイフを指さした。

「それ、普通はこんな値じゃ売らない……。いいな、おれはここにいる。気が変わったら、いつで

も来い」

ジェノは再びぼろぼろのシャツを着て、洗い場を離れた。

体といえば、絶不調だ。微熱が続いているし、膿みも腫れも引かない。

本当のところ、どうしたらいいのか、不安でしようがない。

さつきもブリーダーたちに、それとなく怪我の治し方を聞いてみたけれど……。

「脚をやられたクーリア？ そりゃ、種馬用に残すつもりなら、世話もするけどさ。今の様子を見てもろよ、人間の葉さえ足りないんだぜ。諦めて、食ってやるのが供養つてもんだ」

誰に聞いても、答えは同じだった。

(何とか、しなくちな)

少年の目に、ようやく力が戻ってきていた。

どのみち、答えがないものならば、ジェノが一人で考えるしかない。

童を助けられるのは、自分しかないのだから。

ジェノは砂埃の舞う往来に目を据えて、しっかりと背筋を伸ばした。

水は葉屋の裏口だ。さつき、《煮沸済》の看板が出ていた。

その前に消毒液の値段を確かめようと思つて、ジェノは店の表口へと近づいた。

入り口には、二頭立ての馬車が繋がれていた。袋菓子一つで見張り番を言いつかつたらしい避難民の子が、クーリアに寄りかかりながら、ぽりぽりとそれをかじっている。

ウーブ部は盆地の中にあるせいか、小王朝時代から部内の結束が強い。各都市間の街道も、比較

的よく整備されている。小さな衛星都市とはいえ、集まってくるキャラバンのは数は、ジェノの田舎とは比べ物にならない。さつきも馬洗い場で、馴れ馴れしい駅飼いのクーリアどもの大群に辟易してきたところだ。

馬車に繋がれたクーリアが、鼻先をふんふんとうごめかして、ジェノの体の臭いを嗅いだ。そうして、隣のもう一頭と顔を見合わせた。

「こら、なんだよ」

ジェノはくつついてくるクーリアの顔を撫でて、軽くどけた。

店の中には、すでに先客がいるようだ。

女の、怒ったような声が聞こえてきた。

「だいたい、お前はいつもそうだよ、ガキの頃からさ。あたしには何の相談もないんだ。お前がいつ、そんなに小金持ちになったっていうの？ 理由が教えられないぐらい、後ろめたいってわけ？」

声の女が、入り口の布をかきあげて、外に出てきた。

瘦せた若い女だ。肩に大きな水袋をかついでいる。連れの男は、まだ店の中で買物物を続けているらしい。馬車に水を積もうとして、女の足がふらついた。

ジェノはひょいと手を貸した。

「あら、どうも」

礼を言う声が、妙に艶めかしい。

(この人がさっきの、何とか姉さんかな)

街道沿いに、どこかの町か村へ行くのだろう。もしかしたら、故郷に帰る旅なのかもしれない。何の気なしに横を向いて、ジェノは彼女に笑いかけた。そして、はっと息を呑んだ。

「なに？」

女が、困惑した顔で笑みを浮かべる。

「あなたは……」

彼女に会うのは、初めてだった。

だが、ジェノは彼女を知っていた。

詩集に挟まれた写真の中で、優しく笑っていた、その人だ。

写真の中の彼女よりも、いくぶん吊り目で唇が赤く、その端に小さな皺ができていた。

「なんなの？」

女は首をかしげると、ジェノの格好と銃を見て、一歩後ろに下がった。

ジェノはあわてて、腕を大きく振った。

「あ、あの……、何でも、ないんです」

「そう、ありがとう」

女はちよつと警戒するような目つきで、ジェノに軽く一礼をした。

見張り番の子に小銭を握らせて、頭を撫でる。子供は手を振って、道の向こうへ走っていった。

「あんた、まだ？」

女が店の奥へ叫んだ。

「おう」

男の声でした。

ジェノは凍りついたように、その場に動けなくなつた。

ゆつくりと、息を止めて振り向く。

店から出てきた男の腕から、酒の瓶が転がって、割れた。

「隊長……？」

(八)

「生きて、おられたんですか」

ジェノの目が一瞬潤んだ。

勇気を奮い起こすときにはいつも、この人の言葉を思い出して切り抜けてきたのだ。

ジェノは隊長に向かって、まっすぐに体を直した。

右手が、自然に額へと当てられた。

男は足元に酒瓶を転がしたまま、手をぶらりと垂らして、何も言わずにジェノを見ていた。

敬礼から腕を戻したジェノを見て、〈ムーリカ姉さん〉がほっとした顔になった。

「知り合い？」

男の口から、ああ、とも、うん、ともつかない声が這い出た。

「あたしたち、これから仕事を貰いに行くの。通信艇の整備士のクチが空いててね。見習いの一人ぐらい、余裕があると思うけど。あなた身寄りがいないなら、ついてきなよ？」

女はジェノの腕をぼんと叩いて、男を見やった。

「ね？ さっき助手が欲しいって言ってたろ。ほら解決した」

男は立ったまま、じっとジェノを見ている。

どうして、この人は何も言ってくれないのだろう……。

そして、彼はようやく口を開いた。

「クロンは」

「死にました。でも、苦しまなかったと思います」

「……」

男は表情を変えなかった。ただ、その目の中に明らかな落胆の色が浮かんできたのを、ジェノは見逃さなかった。

胸の中に、嫌な感じのものが湧き出してくる。

どうして、僕が生きていたことについては、さほど驚かないんだろう……。

小切手？ 印章？

この馬車の金は、どこから？

ジェノは自分の唇が、すつと乾いたのに気がついた。

「隊長、クロンが生きていると、何かいいことでもあるんですか」

男はゆつくりと横歩きをして、馬車のほうに近づいた。

「ほら……、あいつは機械いじりの素質があったから、お前と一緒にいるんじゃないかと」

「あなたは、クロンがもしかしたら、生き残るかもしれないと思っていたんですか」

隊長の機体、エンジントラブル。

まさか、そんなわけがない。

「あんたたち、どうしたってのよ……」

女が不安そうな声を出した。

「ムーリカ、先に乗れ」

男がびしりと言った。

「ムーリカ姉さん」は、男の荷物を受け取ると、馬車へと乗せた。

「小切手って、何なんです」

ジェノは一歩踏み出した。

「あなたは、自分が生き残ることを、知っていたんですか」

男が、一歩後ろへ下がった。

「なに、なんなの」

背中に女をかばい、隊長はクーリアの手綱を取った。

「みんな死にました」

ジェノはまた、前へと踏み出した。

「どうして、あなたは生きているんです」

隊長の目が泳いで、ジェノの背中から覗く、白い銃の上で止まった。

彼が体をこわばらせるのがわかった。

「！」

隊長が、腰から拳銃を抜いた。

無機質な銃口が、ジェノの胸に突きつけられた。

ジェノはとまどった。

（そんな……）

かすれた声が、ようやくつながって出てくる。

「僕が……、僕が撃つと……、思っているんですか、あなたを……」

男の喉から、うめくような低い声が漏れた。

「死にたい奴が、死ねばよかった」

「隊長！」

次の瞬間、隊長は御者席に飛び乗り、大きな音を立ててクーリアに鞭をくれた。

往來に、馬車が飛び出す。

何人かが尻餅をつき、腕を振るつてのしつた。

「待て！」

ジェノは走った。

腫れて突つ張つた脚は、言うことをきかない。

もうもうと砂煙を立てて、馬車が通りを疾走する。

ジェノの脚は、もつれて地面に転がった。

睨み付ける馬車の影は埃にかすんで、遠く走り去っていく。

ジェノは両の拳を、地面に叩きつけた。

「裏切り者——ッ!!」

(九)

足を引きずり、背中が外壁の裂け目へと消えていく。

傷だらけの少年は、水袋と、腕に大きな荷物を抱えていた。

「馬を頼む」

男は仲間にそう言い置くと、背囊と銃をつかんで歩き出した。

砲撃の跡も生々しい、詰所の前を通り過ぎる。

ほんの数ヶ月前までは、異国の訪問者をいちいち選別していた町の門も、いまではただの瓦礫になって、無残な姿をさらしていた。わずかに残された土台の上には、避難先や人探しの連絡を書いた石の板が、いくつも積み重ねられている。

自警団たちが飛び回ってはいるが、これだけの避難民がいるのだ。

町に奇妙な少年が紛れこんだからといって、その行き先を気にする者はいない。少年は破壊された壁の隙間から、街の外へと歩き出た。

男の目が輝きを増した。

荒野には、土埃が立ちこめている。

(……)

丘を登りながら、ジェノは舌打ちをした。

あの男だ。尾けられている。

立ち止まってちよつと振り返ると、黒い人影がさつと灌木の後ろに隠れた。

(くそっ……)

ジェノは水袋を下ろし、銃を茂みに向けた。

「帰ってくれ。でなければ、次は撃つ」

返事はなかった。

完全に人の目のない場所まで出たら、後ろから撃つ気だろうか。

いかに荒くれ者のハンターと言えども、そこまで乱暴な者はそうそういない。が、気に入りの武器のことになる、彼らが目の色を変えることは、ジェノもよく知っていた。

「僕に構うな。さっさと消えろ」

ジェノはいらいらした。今夜は両新月なのだ。

日が暮れる前までには、竜に薬を塗ってやりたいのに……。

まともなライトを買えるほどの金は、もう残っていないかった。

宙に向けて一発撃つと、どたどたと丘を駆け下りる音が聞こえた。

水袋をかつぎ、ジェノは再び歩きはじめた。

丘を越えて、目の前に広い砂地が開けた。

あちこちに隆起した巨大な溶岩の壁が、数十年前の激しい噴火の面影を伝えている。

砕けた細かい砂が、それらを覆い隠すように吹きこもっていた。

ジェノは後ろを振り向いた。人影はない。

棘だらけの大きな多肉植物の幹をくぐって、岩の隙間へ入りこむ。

「^{デューコーン}竜、いるかい？」

はたはたと、翼の音がした。

ジェノはほつと表情を緩めると、奥へと進んだ。

竜は座りこんでいた。

溶岩が砕けてできたこの砂は、ざらざらとして、ブーツの穴から入ると、とても痛い。

ジェノは竜に駆け寄った。

頭上を覆う岩の間から、明るい太陽が覗いている。

町のほうから飛んでくる砂埃のおかげで、その苛烈な光はいくぶん和らげられていた。

「待ってて」

ジェノは水袋を置き、小さな皮袋に少し注いだ。

舌打ちをする。朝全部取ったばかりなのに、また新しい蛆が生みつけられているのだ。

布を持つていないほうの指をアルコールでよく拭いてから、ジェノは蛆どもをほじくりだした。

取っては捨てて、足で潰す。

それから柔らかい滅菌布で膿を取り去ると、皮袋から水を出して、よく洗った。

竜の皮膚や肉を傷つけないように注意しながら、ジェノは両手に力を込めた。

とにかく、傷口の周りを清潔にするのが先だ。

脇腹や喉、翼、化膿した所はすべて見逃さないようにした。

竜が、首を曲げてジェノの臭いをかぐ。ジェノの膝の裏や腹の傷を鼻先でつつくので、ジェノは

その度に体をひねって、竜の角を上下に避けなければならなかった。

「いいから、じっとしているんだ」

竜が首をかしげる。

そして一声、低くうなった。

「？」

ジェノは振り返って、竜の視線の先を見た。

さっきの髭面の男が立っていた。

「畜生！」

ジェノはすばやく銃を引き寄せて、構えた。

男が後ずさった。

「出て行け」

ジェノは言った。

だが男は両腕を大きく振って、背囊を地面に下ろすと、その場に座りこんでしまった。

日よけ帽の下にあるのは、木の実のようにぐりぐりとした目だ。驚きに見開かれて、ジェノと竜とをかわるがわるに見ている。

「デュラコーン 竜？」

男が口を開いた。

ジェノは黙って、まだ銃を向けていた。

「デュラコーン 竜！」

そう小さく叫ぶと、男はジェノが止める間もなく、背囊の口を逆さに開いた。

「動くな！」

ジェノが怒鳴った。

男が拾い上げたのは、油紙に包まれた一巻の布だった。

「ほれ、デニラコーン 竜」

男はそれを広げた。

毛織の、上等の布地らしい。黒っぽい紫を基調にして、何かの模様が織りこんであつた。布の中には小さな竜が、何頭もつながって飛んでいる。

ジェノは目を凝らした。

竜の甲皮には白色が、その肌には灰青色が使われていた。

織物を巻き直すと、男は再びそれを背囊へ突っこんだ。

「本物か。初めて、見た」

男の声がうわずっている。

腰の銃を少し遠くに置くと、彼はそのまま、じろじろと竜を眺めだした。

竜がきまり悪そうに、鼻息を吐く。

ジェノは銃を下ろして、また消毒にとりかかった。脱脂綿を出して、エルメ液を塗る。

傷口はあらかた触手虫どもが塞いでしまったので、そう大きくはないのだが、深い。その数たるや、相当のものがあつた。

ハンターの視線がうるさい。

わくわくと、今まさに何かが起こることを待ち望むように、男はじつと座っている。

「もう、構わないでくれないか」

ジェノは機嫌の悪い声で言った。

聞こえなかったふりか、男はまだ、竜を見つめていた。ジェノは舌打ちをした。翼の骨が折れている。

ジェノは買ってきた添え木を当てると、包帯を取り出した。

心が、ふつと弱くなる。

曲がったまま、固定してしまうかもしれない……。

竜が二度と飛べなくなってしまうたら、どうしたらいいのだろう。

ジェノに手術はできない。

いや、どの町へ行ったって、今はそんな医者連れてくることさえできないのだ。

しかし、とりあえず怪我を治すことだけを考えるならば、このまま何もせずにいるよりも、ずつとましなことだけはわかる。

〈骨と皮が、くつついてさえくれたら……〉

いつもの竜の不思議な力が、戻ってくるかもしれない。

包帯を巻きはじめた。

すると、ざくざくと砂を踏んで、男がそばに寄ってきた。

「放つといってくれ、頼むから！」

ジェノは腕を振り上げた。

男が、その手をさつとつかんだ。

「あんた、へたくそ」

男はジェノから包帯を取り上げると、上着を脱ぎ捨て、慣れた手つきで仕事をはじめた。添え木を組み合わせ、破れた翼を胴体に固定する。

ジェノはしばらく、口を開けてそれを見ていたが、すぐに男の隣に立って、添え木の端を持った。固定の間、男とジェノは軽く合図を送りあうだけで、互いに一言も喋らなかつた。

包帯が足りなくなつた。

男は背囊の所に戻ると、綿布を出してきて、それを使った。

ジェノは男に頭を下げた。

男は何も言わなかつた。

眉間にしわの刻まれた、髭だらけの顔が、少年のように上気している。

薄闇が、あたりに忍び寄つてきた。

やるべきことが、全て終わった。

男はジェノを振り返つて、口を横に広げ、にいつと笑つてみせた。

金歯が一本、きらりと光つた。

ジェノもその真似をして、歯を見せて笑つた。

「……すみません」

そうして、ジェノは少し上を向いて、目尻を腕でこすつた。

竜はいえ、もうすっかり疲れきつて、うとうとと首を振っている。

男は背囊の中身を元に戻すと、また、ほれぼれと竜を見て、言つた。

「あんた、本当に得した。おれがもう少し若ければ、決闘でみんな貰っていたはずだ」

「決闘？」

ぶつそうな話が出てきた。

男は上着を拾い、ジェノに投げた。

「着ていけ」

「ありがとう」

ジェノは素直に受け取った。

「タダじゃない。次に会ったら、金を貰う」

ジェノはうなずいた。

（この人、竜を怖がらないのか……）

そんなことを思ったが、それは疑問でも、なんでもなかった。

ジェノも、怖くはなかったからだ。

あの砂漠で、彼と初めて出会ったときも。

聖堂の板絵に描かれていた、東へ去った一頭の竜。

きつとこの世の子供たちは皆、多かれ少なかれ、同じような憧れを抱くのだろう。

そして、かつてその憧れを心に抱いた者も、また……。

男が、竜の首に髭面をうずめた。

竜はなんとなく迷惑そうに、それでも少し誇らしげに、薄目を開けて彼を見ている。

男が、竜の白い外殻を撫でた。

竜が、うるさそうに首を振る。

男は飛びのいて、右手をさすり、ため息をついた。

ジェノが後ろから声をかけた。

「いろんな連中に追われて、大変だったんだ。他の人には言わないでお願いか」

男がつぶやいた。

「デセ・ボヌきれいだ」

「え？」

「言うもんか、よ」

男が鼻をすすった。

「あんた、幸せだ」

「うん」

ジェノはうなずいた。

「僕もそう思う」

(十)

前進は続く。

新月はやがて明け、太陽が空を巡った。

やがて再び、一つ目の細い月が昇ると、その下を彼らは進んだ。

竜は何度も空を見上げて、添え木を当てた翼を不満げに振ってみせた。

「駄目だよ」

ジェノはぴしゃりと言った。

「大事なものは、進むことだ。焦ったってしょうがないじゃないか」

まだ、ジェノの微熱は引かない。

時折、艦隊の光が空を行くたびに、ジェノたちは岩陰に隠れた。

あの人の言葉が、今でも耳の底から離れない。

（……でも、俺たちにだって、守るべきものはあるだろう？）

ジェノは歯を喰いしばって、大地を進んだ。

（……俺たちはまぎれもなく〈当事者〉だ。安全な場所で、くだらん御託を並べている連中よりも

ずっと、真実が何であるかを知ってる……）

真実？

あなたの真実は、何だったのですか、隊長。

あなたの言葉を聞いて、彼らは死んでいきました。

いったい、機体に何をしたのですか？

補給路は、物資は、本当に全てが絶たれていたのでしょうか……？

総司令部から、特別攻撃命令が出されたのは確かなことです。

あの半月間、あなたは何を考えていたのですか？

確かめるすべは、どこにもない。

見上げても、空には誰もいない。

誰の姿も、浮かびはしない。

あのとき詩集に挟まれていた彼女の写真は、幸せそうに微笑んでいた。

あの男は、確かにあのひとを守ったのだ。

そう思った。

また、日が昇った。

岩陰の枯れ草に半分埋もれて、ジェノと竜は眠った。

ジェノが何かをつぶやいた。

竜がぴくりと瞼を開けた。

「継父さん」

ぶつぶつと、ジェノは不機嫌そうだ。

「なんだよ……、心配して、損した」
少年はまた、寝息をたてはじめた。
竜も再び、瞼を閉じた。

十一章 庵

(一)

草原が続いている。

男たちが三人、クーリアたちに草を食ませていた。

見慣れない少年がやってきた。

痩せこけ、ぼろぼろのズボンとブーツを履いて、奇妙な白い銃を背負っている。

クーリアたちが、いつせいに頭をもたげた。

「なんだ？」

ブリーダーたちの顔に、緊張が走った。

(義勇兵崩れかな)

(わからん。俺の銃はどこだっけ)

そんな男たちのささやきをよそに、クーリアたちはふんふんと鼻を鳴らして、少年の後を追いかける。群れが、ゆつくりと移動する。

「こら！」

若い男が叫び、追い棒を振りたてた。

クーリアたちはきよとした顔で立ち止まり、それからきまり悪そうに、元の場所へ戻った。
「何の用かな」

年かきの男が、少年に問いかけた。

右手は、腰の短剣の柄に添えられている。

「レーテまで、どのくらいですか」

少年の声には、かすかに南の訛りがあった。

「レーテ？」

少年がうなずいた。

「河まで出て、どうするんだい」

「水に沿って、南へ抜けます」

リーダーはぴくりと眉を動かした。

「おまえさん、どっから来た？」

「くにざかい国境からです」

少年が、もと来た道を指さした。

「帰るのかい、南に」

「はい」

リーダーはじろじろと少年を見た。

小さな皮袋を提げてはいるが、旅に必要な一式が入っているとは思われない。追いはぎでもして、

日銭を稼いでいるのかもしれない。

一度戦場に出て、銃と剣の威力を知ってしまった若者ほど、やっかいなものはない。

中途半端に戦功を挙げていたりすれば、なおさらのことだ。

日常に戻っても、彼らは自分たちに、戦場での自分と同じ力があると思いこんでしまう。大人の下で使いつわりをしながら生きていくより、もっと別の方法で、手っ取り早く解決しようとするようになるのだ。村からいなくなってしまった昔の友人の顛末を含めて、そのことは嫌というほど、この男の心に刻みこまれていた。

関わらないほうが、身のためだ。

それでも、男は一応、注意だけはしておくことにした。

「レーテは、駄目だ。今は獣どもが、虫みたいに湧きだしているって話だからね」

「どうせ、みんなもう下に潜ります。上に残った奴も、じきに死ぬでしょう」

男の背筋に、ぞくりと冷たいものが走った。

(こいつ、まるで見てきたかのように……)

男は諭すように言葉をつなげた。

「白いフネが出たって話を知らないのか？ 帝国の艦隊がいくつもやられたんだよ」

「ええ」

「悪いことは言わないから、西か北に逃げなさい。キュプロが警備隊を募集しているらしいから、飯の口には困らないだろう」

少年が首を振った。

「帰らなければ、いけないんです」

帰ったところで……と、リーダーは思った。

この幼さで戦場に志願したのだとしたら、どうせ南部の痩せ地生まれで、次男か三男よりも下だろう。君に、耕す畑が残されているとは思えないね。

とはいえ、リーダーはそんな考えをおくびにも出さない。

少年がまた、男に尋ねた。

「レエテまで、歩いて何日かかりますか？」

死ぬ気か。

まあ、それも人の好き好きだ。

リーダーはすつと追い棒を立て、東南の方角を指した。

巨大な台形の岩山が、遠くに、いくつも突き立っている。

「男の足で、だいたい三日つてとこかな」

「ありがとう」

「だが俺たちでも、めったには行かない。途中には霧が出るし、攻性生物だらけの場所があるんだ。通り抜けられなくなって、食われるのが落ちだよ」

「霧？」

「死にたくなければ、このまま原っぱを横切つて、それから回るほうがいい」

「……」

少年が、草原を見回した。身を隠せるような岩一つなく、どこまでもただっ広く続いている。青空を黒い点が横切った。

「おっと、帝国艦隊のお出ましときた。今日はこれで二度目だな」

「……」

艦隊の装備は、ぼろぼろだった。

旗艦の動きが、よろよろと頼りない。エンジン出力が低下しているのだろう。

「本国へ帰るんだろうな、いい気味だ」

「帰る……」

「帰国の指令が出はじめているらしい。あつちはあつちでお家騒動があつたみたいだから、俺たちに構ってばかりもいらなくなつたんだろう」

「そうですか……」

「これからが大変さ。さて、あんたはどうする？」

「……ありがとう」

少年は男たちに頭を下げると、もと来た道を引き返して、丘の影へと消えた。

全員の顔に、ほっとした表情が浮かんだ。

「……ああ、ひやっとした。俺、今日は弾を家に忘れちゃっててよ」

「なんか、戻って行つたが。どうする気なんだ？」

「ごつい銃だった」

三人の男は、顔を見合わせた。

「早いがそろそろ、村に戻るか？」

「しばらくは、見張りが必要だな。お前、納屋から散弾銃を出しておけよ」
「ぎつと、またああいうのが来るぜ」

「たまらんなあ」

(二)

艦隊の目を避けて、岩沿いに歩き続けていたら、案の定道に迷った。
いや、迷った、という言い方は適切でない。

方向は正しいはずなのだが、湖に突き当たったのだ。

厚い霧が、湖面から湧き出していた。

ジェノは岩山を見上げた。

台形の上辺に降った雨が、流れ下ってこの湖を作ったのだろうか。

どこかで、コナナが鳴いている。

人の気配はなかった。

湖面を揺らす、ちゃぷちゃぷという波の音だけが、耳に心地よい。

薄青い太陽の明かりの下で、ジェノは水面を覗きこんだ。

頬のこけた、目だけをぎよるぎよるとさせた浅黒い少年が、こちらを見ていた。

(伸びたな、髪……)

このところ、目に入ってうるさい。ジェノはその場に座りこんでナイフを抜いた。

肩の上から、竜が覗きこんだ。

岸辺の砂には、白い骨のかけらが無数に混じっていた。

あらかた、余分な髪を落とすと、ジェノは再び立ち上がった。

五〇〇リオンほど離れた岸辺に、何やら栈橋のようなものが突き出していた。

湖は思いのほか広く、いくつもの小島が浮いている。

台形の岩山の天井は、小さな草原になっていて、コナナたちがその上にとまっていた。

ジェノと竜は栈橋まで歩いた。

「見てごらん。魚がいる」

栈橋は、白い外殻で覆われていた。

旧世紀の遺跡の一部が、水に倒れて沈んだものだろう。

ジェノと竜が突端まで歩くと、突然、栈橋が揺れだした。

「何だ？」

ジェノは銃を握って、竜の前へと走り出た。

攻性生物は出てこない。

栈橋は低い音と振動をたて、湖の中ほどへと移動していく。

「！」

そして、とある島の崖の前で、静かに止まった。

崖の腹がえぐれて、大きな口を開けていた。

「これは……」

遺跡の入り口のようなだ。白い岩肌の周囲を、細く黒いひび割れが取り巻いている。

ジェノと竜は中に入った。ブーンという、羽虫のうなるような音が聞こえてきた。

岩の中の道は、ひんやりと冷たかった。壁や床のあちこちから、白い骨のようなものが浮き出していた。

竜が、きよろきよろとあたりを見回した。

「あつ、あれ」

少し先で、小型の旧世紀エンジンが二基、壁に埋めこまれて光っていた。

行ってみると、そこはもう突き当たりだ。

見慣れた隔壁がジェノの目の前を塞いでいた。真ん中には、黒い繋ぎ目がある。

（山脈の下、遺跡と同じだ）

周りをめぐる何本もの配管や金属線から見ても、エンジンがこまめに手入れされているのがわかった。隔壁の開け閉めに、このエンジンを使っているとすれば、ここにもシーカーたちがいるのだ

ろうか？

「人があるね」

ジェノは竜にささやいた。

竜が鼻先で、ジェノをつついた。

「なに？」

その視線の先を追う。

「……」

エンジンの向かい側の壁の少しくぼんだ場所に、粗末な梯子がかけてあった。

攻性生物の殻や骨を、縄で編んだ梯子だ。

手でつかんでみると、からからと乾いた音がした。

「ちよつと、待って」

竜に一声かけると、ジェノは梯子を上った。

縦穴の天井は、これまた何かの白い甲羅がふさいでいた。

手で押すと、それは難なく開いた。

ジェノが首を突き出したのは、薄暗く丸い部屋だった。

周囲はぐらりと岩で囲まれて、隣の部屋らしき場所へ続く通路が、二つある。

一つの通路から、わずかな外の光が射して、部屋の中をおぼろに浮かび上がらせていた。

もう一つの通路の直径は、人が通る大きさよりも、何回りか大きめに作られている。こちらは肩

をすばめれば、竜が通れそうだ。ジェノは部屋の中に上がった。

赤い敷物が引いてあった。

壁にはさまざまな大きさの穴がえぐられ、中身は棚になっていた。

薬草や硝煙の臭いが、つんと鼻をついた。

壁際に、くしゃくしゃになった毛布が丸めてあった。

その頭上には、赤黒の格子模様の入った毛織物が掛けられている。

「シーカー……」

間違いない。この布の織りと色は、まさにシーカーたちのものだ。

（黒は死を悼み……、赤は、……血と、炎と、よみがえる命とを表しているんだ……）

格子模様の毛織物には、薄く埃が積もっていた。

布の上で、何かが光った。

「あれ？」

金細工の耳飾りが、布に引っ掛けてあった。

目を凝らすと、耳飾りはそれだけではなかった。色石を嵌めこんだもの、銀の渦巻き状のもの、

奇妙な偶像をかたどったようなもの、攻性生物の翅の一部を埋めこんであって、見る角度によって

きらきらと色の変わるもの。

ジェノは驚いた。

（なんなんだ？）

どうやらこの部屋の主人は、だいぶん、お洒落がお好きなようだ。

耳飾りが吊り下がる裏にも、棚が造つてあつた。ジェノはその布をそつとめくつた。

小さな棚の中に、黒いものがいまいこまれていた。

人の秘密を覗いているようで、うしろめたさに胸がどきどきしたが、好奇心には勝てなかつた。
(かつらだ)

引き出してみると濃い灰褐色の、長いかつらだつた。

悪いものを見てしまったようで、ジェノはすぐにそれを棚に戻した。

「動くな」

(え?)

後ろから鋭い声が飛んだ。

少年のような、やや高い声だつた。

いつの間に、間合いを詰められたのだろう。さつきまで、人の気配も感じなかつたのに。

ジェノはゆっくりと手を上げた。

「銃を床に置け」

ジェノはそうした。手から離すのは不安だつたが、敵意があると誤解されるよりはいい。

ケラドの名前を出せば、もしかしたら、力になってくれるかもしれない。

「やっぱり、お前か」

ジェノは手を上げたまま、ゆっくりと振り向いた。

「君は……」

顔の上半分までを覆う、異教の魔物のようなゴーグル。黄色く丸い両眼が、薄闇の中で光っていた。

(三)

ばちん、と音がした。

目の前の人物が、ゴーグルの留め金はずしたのだ。

仮面が開いて、素顔があらわになった。

ジェノは息を呑んだ。

(女……?)

逆光で、よく見えない。

背格好はジェノと同じぐらいだが、そのわりに肩が細い。

ズボンの腰はやや丸みを帯びていて、足には編み上げのブーツを履いていた。

「アルボ！」

その女が、床の穴に向かって叫んだ。

すると、ふいに壁のランプがついた。黄色く暖かい光が、薄暗かった部屋を照らす。

女の顔が、はつきりと見えた。

若い女だ。肌が紙のように白い。端正な造作は、見世物の生き人形によく似ていた。

生き人形は蠟でできていて、帝国の特別な工房でしか作ることができないのだそうだ。女はまばたきもせず、じつとジェノを見つめた。

その様子もやはり、作り物のようで気味が悪かった。

知りたいことはたくさんあった。なぜ、彼女はあの廃村にいたのか。どうして、ジェノたちを助けてくれたのか。光の道を通れるのはなぜか。いつたい、彼女は何者なのか。

十数年前に帝国と戦ったという〈竜^{デュラゴン}〉のこと、大崩落のこと、それからもつと、いろいろなこと……。けれども、うまく言葉が出てこない。

「挨拶もなしか」

そう言うと、女は銃を下ろして、頭からゴーグルと飛行帽を取った。

「他人の家に、勝手に踏みこんで」

少年のように短く、ざくざくと切った髪は、つやのある銀色をしていた。

髪を掻く音は、しゃらしゃらと、やけに金属的だ。

ジェノはどきりとした。

(この人、本当に人間、なのか……?)

ケラドが話していた〈竜の魔女〉も、こんな感じの女だったのだろうか。

魔女……。そうなのかもしれない。こんな人里離れた、攻性生物だらけの場所に、女が暮らして

いるなんて。

女は壁の釘に自分の銃とゴーグルをかけて、ジェノに「銃をよこせ」という仕草をした。

ジェノが銃を渡すと、女はその革紐を壁にかけた。

ジェノの足元に目を落として、言う。

「ひどい格好だ。何度、ヘマをやらかした？」

「……」

何だか、腹が立った。そういえばこの女を追って、帝国軍に半殺しにされたのだ。

その前に命を助けてもらっていたし、彼女を追ったのはジェノの勝手に過ぎないが、それにしても言いようというものがあるだろう。

黙りこんだジェノを放っておいて、女はすたすたと目の前を通り過ぎた。

壁に埋めこまれたレバーを握って、強く下に引く。

音を立てて、隣の部屋への入り口が開いた。

そうして、魔女はジェノを見て手招きした。

「来い」

中を見て、ジェノは思わず一步下がった。

暗く広い部屋の中には、得体の知れない装置が並んでいた。

その他にもいろいろな物が、あちこちにひしめいている。

ぶらさがった何本もの長いチューブ、人ひとりが横になれるくらいの寝台、床に口を開けた大き

な穴、流しに広げられた防水シート。きわめつけには、巨大な鋸と鉋を含んだ刃物一式が、並べて壁にかけてあった。

床には、不気味な色の染みがいくつも広がっている。

(……なんなんだ、ここ)

部屋の空気は、妙に澄んでいた。空氣の塵が少ないのかもしれない。

「アルボ！」

また、女が叫んだ。

部屋の明かりがついて、奥の隔壁が音を立てて開いた。ブーンという旧世紀エンジンの音が、そこから流れこんできた。

「デュラコーン 竜！」

向こうの入り口から、ジェノの竜がひよいと首を出した。さっき竜を待たせてきた通路の先は、ここに繋がっていたのだ。

それに少し遅れて、白い肌の〈竜〉が現れた。

彼はジェノの竜の脇をするりと通り抜けて、部屋の中央へと座った。

ジェノは自分の竜に駆け寄った。

そのジェノの後ろ頭へ、魔女がばさりと何かを投げてよこした。

水で濡らしたボロ布だった。

「拭いてやれ」

ジェノはさっきの通路側に出た。

旧世紀エンジンがチカチカと青白い光を発して、さらに大きく震えた。

部屋の中を振り返ると、床の四角い穴から、何かがせりあがってくる場所だった。

(あっ……)

白い外殻が見える。中型の純血種だ。

すると床の穴は、運搬用の昇降機に違いない。でも、いったいなんのための？

女がシャツ一枚になって、流しで腕を洗った。ツンと臭うアルコールで、両腕をこする。

部屋の中央に据えた奇妙な装置をいじりはじめたかと思うと、流しの横で、鍋のようなものの蓋を開けて、中から針とチューブとを取った。

ジェノは竜の首に手をかけたまま、彼女の動作を見つめていた。

女が攻性生物に手を触れると、その脚がびくりと震えた。

「あぶない！」

ジェノが飛び出した。

丸い部屋まで戻り、壁の白い銃を取った。

「いちいち、さわぐな」

女の叱声が飛んだ。

「神経球を潰してある。もう暴れない」

それでも、ジェノは自分の銃を抱えて、竜のところに戻った。

魔女は、そんなジェノを横目で冷ややかに見つめると、再び仕事にとりかかった。

二本のチューブの端を装置に固定すると、一方の針を白い〈竜〉の首に、ちくりと刺した。
(……?)

そしてもう一方の針は、純血種の外殻の隙間に勢いよく突き刺した。

攻性生物が、また、びくりと痙攣をする。

女が、装置のつまみを回した。何かを吸いこみ、掻き回すような音が響きだした。

白い〈竜〉は眼をつぶったまま、じつとうずくまっている。

ジェノは好奇心が押さえられなくなった。

「何を、しているんですか？」

魔女は、折りたたみの椅子をどこから出して、それに腰かけている。前に、ケラドが使っていたような椅子だ。

チューブの中を通っているのは、攻性生物の体液のようだった。

「入れ替えさ」

女が答えた。

「……入れ替え？」

「ときどき、血を浄化してやらないといけない」

ジェノは彼女の白い〈竜〉を見た。たまごみたいに丸っこくて、顔つきが子供っぽい。

ジェノの竜のような角はなくて、尻尾が少し太かった。

「浄化しないと、どうなるんですか？」

女がうるさそうに、ジェノを睨んだ。

「発作が起きて、死ぬ」

「……」

ジェノは急に不安になった。

（彼は、どうなんだろう）

隣を見ると、翼に添え木を当てられたぼろぼろの竜が、ジェノを見て首をかしげた。

傷がずっと治らないのは、もしかして、そのせい？

僕が、そうしなかったから……。

「余計な心配をするな」

ジェノの心を見透かしたかのように、魔女が言った。

「デュラコーン 竜 には、こんなことは必要ないんだよ」

「えっ？」

ジェノが、不審そうな顔をした。

「アルボは、デュラコーン 竜 じゃない」

女の声が、少しきつくなった。

（何を怒っているんだ、この人）

ジェノは不思議だった。

目の前の生き物は、どうしたって竜そのものだ。

じゃあ、この白い生き物を何と呼んだらいいのだろう。〈純血種〉、それとも〈攻性生物〉？
なら、この女はそもそも〈竜つかい〉でさえないのか？

難しいな顔つきになったジェノを見て、魔女がぽつりと言った。

「アルボは、アルボだ。他の何でもない」

ケラドの話が、ふと頭に甦ってきた。

(まあ……、竜の一種ではあるかもしれない。……でも、あいつはお前の竜とは違う)

(竜つかいも、前は、別の竜に乗っていたんだよ……、お前のように)

ジェノの好奇心が、またむくむくと湧き上がってきた。

「前は、別の デュラコーン 竜に乗っていたって聞きました」

女が振り向いた。

すさまじい目つきで、ジェノを睨みつける。

(しまった)

まずいことを聞いた、そう思った。

そういえば、ケラドの話だと彼女の デュラコーン 竜は……、死んだのだ。

乗り手のために死んだ、確かに彼はそう言っていた。

ジェノはあわてて、話題を戻した。

「デュラコーン 竜 じゃないって……。言葉だけの違いでしょう？ この子はとても強かったし」

女はジェノを睨むのをやめた。

「言葉？」

向き直って、装置のつまみをあれこれ微調整しながら、吐き捨てるようにつぶやいた。

「言葉は世界を縛る。よくも、わるくも」

ジェノはそれ以上、何も言えなくなってしまった。

(四)

女が舌打ちをした。

「遺跡^{した}に下りたな」

傷だらけの竜の首をなぞり、添え木を当てた翼に触れて、顔をしかめる。

ジェノは魔女の背中を見つめていた。

あの後、女がもう一度昇降機を動かすと、すっかり体液を抜かれた攻性生物の死骸は穴の闇の中に消えた。白い〈竜〉こと、アルボは隔壁の向こうに行つて、今はもういない。

シャツをまくつた女の腕には、何本も赤い筋が走っていた。

はじめは銃創か刀傷だろうと思つたのだが、どうもそれだけではないようだ。左腕の静脈に沿つて、赤く丸い針の跡のようなものが、無数に残されていた。

「傷が、治らないんだ」

ジェノは言った。

「遺跡に落ちて……、変な連中にやられた後、力が吸い取られたみたいになって」

できるだけ平静に話そうとしても、声の震えが止まらない。

情けなさすぎる。もしここで泣いたりしたら、竜を不安がらせてしまうかもしれないのに。

この女は僕をどう思うだろう。腰抜けだと馬鹿にするかもしれない。

「腑抜けが」

女がぼそりと言った。ジェノは奥歯を噛みしめた。

「生きているだけ、ありがたいと思え。……〈竜馬^{デュラコミア}〉に会っただろう」

「！」

ジェノは目を見開いた。女は何も言わず、少し目を宙に泳がせた。

流しのそばのコンテナまですたと歩いていったかと思うと、かんぬきを外し、扉を開いた。中から、奇妙な色の液体が入ったガラスのアンブルを取り出す。

そしてそれを、滅菌済みの注射器に取り付けた。

「おい」

ジェノは注射器を見た。人間用のものと較べると、信じられないぐらい針が太かった。

「こいつを説得してくれ。でないと私が殺される」

ジェノは竜の首のかたわらに立った。

落ち着かせるために、ゆっくり角を撫でた。

「連中の体液には、自己修復を遅らせる毒が入っているんだ」

ジェノは顔を上げて、魔女を見た。

「前に、戦ったことが？」

女は何も言わなかった。

「中和剤を打つ。時間が経っているから、効くのも遅くなるだろうけど」

竜が注射針を見て、いやいやをした。

ジェノはじつと女の手元を見ていた。

（信用して、いいのだろうか）

彼女には、前にも助けられていた。しかしどうにも、この女には得体の知れないところがある。無駄な殺生をするなど言いながら、溪谷で商人を狙って撃った。

帝国軍と戦ったという話だけれど、お気に入りらしいコートは帝国のものだ。

まだある。シーカーとは仲が悪いらしいのだが、隣の丸部屋に掛かっている毛織物は、まぎれもなく、赤黒の格子模様で……。

あちこち、謎だらけなのだ。

ジェノの迷いを読み取ったように、竜が低くうなった。

女が舌打ちをした。

「嫌なら、いい」

「あ……」

すると急に、隔壁が開いた。

ジェノたちと竜は、いつせいにそちらを振り返った。顔を覗かせたのは、アルボだ。一声、高く鳴いた。ジェノの竜が、喉を鳴らした。

アルボはジェノの顔を覗きこんだ。赤みを帯びた、明るい茶色の瞳だ。

そうして、ジェノと竜に向かつて、小さく首をかしげてみせた。

心配ない、と言ってくれているかのようだった。

なんとなくでも、この生き物がジェノたちを騙そうとしているようには見えなかった。

「うん」

意を決して、ジェノはうなずいた。

えぐれた傷口を覆う包帯を取り、柔らかな布にアルコールを浸して、よく拭いた。

「動いちゃ、駄目だよ」

竜はおとなしく、その言葉を守った。

一通り、注射が終わった。

竜がため息をついた。

それを聞くと、女は苦虫を噛み潰したような顔で、竜を小突いた。

アルボが、とがめるように首を振った。

女が言った。

「さて……、あとは虫どもの始末だな。添え木を当てたのは、褒めてやる」

ジェノは首を振った。

「助けてもらったんだ。僕一人では、できなかった」

「そうか」

女は、少し驚いたようだった。

「手伝え」

さつき、アルボが座っていた場所に、滅菌したシートを引く。

流しの隣に、いくつか並んでいるものは、どうやら蒸気滅菌器のようだ。

してみると、この女はしょっちゅう、医者 of 真似事をしているのかもしれない。

アルボの血液浄化装置しかり、中和剤しかり。シーカーか帝国でもない限り持っていないような器具や薬を、この女はどうやって、一人で集めているのだろうか。心強いような、どうにも上手い話すぎるような、落ち着かない気分だ。

ジェノは意を決して、女に聞いた。

「みんな、あの子を助けるために集めたんですか？」

女は何も言わなかった。

「あの村で僕たちを助けてくれたときに、彼に無理をさせてしまったのだとしたら、謝ります」

「おかげでしばらく、仕事の計画がパアだ」

「すみません」

「相棒を連れてこい。悪いが、尻尾と脚を縛るぞ」

添え木と包帯が外された。

女が白い前掛けをした。口と髪も布で包むと、裸足を拭いてシートの上に乗った。竜の脇腹に何本も浮かんだ触手の膨らみを見て、女は顔をしかめた。

ジェノが、心配そうにそれを覗きこんだ。

「お前は動くな。埃が落ちる」

ジェノはまた怒られてしまった。

「頭を撫でてやれ」

麻酔が回ってから、女が刃物を動かした。

竜の皮一枚下から、何本もの触手が抜き取られた。

麻酔が効いてはいても、ときどき痛みが走るのだろう。竜が押し殺した息を吐く。触手がびちびちとのたうち、暴れ回ったので、ジェノはそれらを全て踏み潰した。

自分の肩や腹の皮の下にもこの触手が入りこんでいるのだと思うと、軽い吐き気を覚えた。「奴らなりに、お前たちを助けようとしたんだらうよ。だから無理してくつつけた」

「主人」に、なってほしかったから？」

「自己犠牲の精神を、発揮する場が欲しかったのさ。それが連中の快樂なんだ」

その言い回しには、どうにも棘があるとジェノは思った。

そして、奇妙なことに気がついた。

以前、友人の腹から破片を抜いたとき、ジェノは軍医の汗拭き役を受け持ったことがある。ところが女の額には、これだけの作業をこなして一滴の汗も浮かんでいない。

（本当に、人間なのか……、この人は）

女が顔を上げた。

「よし……」

アルボが、フウツと息を漏らす。

竜の縫合が終わった。

女が血に染まった手を拭きながら、言った。

「中和剤が効けば、あとは勝手に治る。……次はお前だ。どうする？」

ジェノは言葉に詰まった。

「放っておけば、触手と組織の癒着が進んで、動けなくなるぞ」

不安だった。

この得体の知れない、人形みたいな顔の女にメスを入れられるのかと思うと、今からでも逃げ出したいくらいだった。

竜は、うとうととまどろみはじめていた。

ジェノの痛む肩を、アルボがとんとつついた。

「いたた……」

ほらね、という顔で、アルボがジェノを見つめる。

(口は悪いけど……、この子が信じている人なら、きっと根は優しいんだろう) そう思いたい。

アルボの目も、きれいに澄んでいて、ジェノの心の奥までを見通すようだ。言いたいことはわかつている。確かに、この体のままでは、南まで持たない。今はがむしゃらに、誰かに助けを求めるべきだと思った。

廃村でジェノたちを助けてくれたのは、まぎれもなく彼らなのだから。

「図々しいことはわかつています。でも……」

ジェノは女に頭を下げた。

「お願いします」

女がうなずいた。

「いいさ、だけど一つ問題がある」

「？」

白い布に覆われた口元が、ニタリと動くのが見えた。

目が笑っている。

「……今ので、麻酔の買い置きを使い切ってしまったんだよ」

ジェノの顔から、血の気が引いていった。

「どうする？」

女の声には、さも楽しそうな響きがあった。

アルボが翼を軽く垂らし、ため息をついた。

(五)

いい人間、というのはいったい何だろうか。

優しく、人畜無害な人のことだろうか。他人を助けられる人のことだろうか。

それとも、自分の信念と正義を貫くことができる人のことだろうか。

(魔女め……)

とんでもない。

痛みで死ぬ、というのが本当にあるのだとしたら、さっきまでの地獄のことだとジェノは思った。突撃の後、同じように麻酔なしで、銃弾の摘出を受けたこともある。

しかし、廃村で機雷にかすられたときも、遺跡の奥で機銃に撃たれたときも、いや〈デュラコニア竜擬〉に食われかけたときさえ、これほどの痛みを感じたことはなかった。

魔女がメスを入れた途端に、それまでおとなしかった触手たちがいつせいに皮膚の下を這いまわりはじめ、あちこちから肉を破って飛び出してきたのだ。

女はワイヤーの先を輪っかにしたもので、それらをからめると、有無を言わず引つ張った。内臓が一緒に引きずり出されるような苦痛に、ジェノが体をひねると、拳が飛んだ。

アルボときたら、すまなさそうな顔をして見ているだけで、止めようときえしないのだ。女は生き生きとして、実にいい仕事をこなした。嗜虐趣味もいいところだ。

ジェノはぐったりと寝台に横たわっていた。体は包帯だらけだ。腕には変な装置からのチューブと、栄養剤の点滴が刺さっている。

魔女はいえ、酒瓶からちびりちびりとやりながら、部屋の中を片付けている。ひとときわ長くて立派な触手を拾うたびに、嬉々として見せに来るので、ジェノはすっかり参ってしまった。

(根が優しいって？ 冗談じゃない。僕をなぶって楽しんでたんだ、こいつは)

麻酔がないなら、今彼女が飲んでいるアルコールでもよかった。それをしなかったということは、よっぽど酒を人に飲ませるのが嫌か、いたぶるのが好きか、どちらか一方しか考えられない。

「ほら見ろ、こんなにでかいのが潜んでいたんだ。最高記録かな」

ジェノはそちらを見ないようにした。

よくわかった。やつぱり、いたぶるのが好きなのだ、この女は。

イワオイノ
岩狼がその爪で、獲物を転がしては楽しむように。

あんな乱暴な手当てでは、たいていの人間はきつと死ぬ。ジェノがまだ生きているのは、竜の力で何とかなっているのに違いない。

首を横にして見ると、竜は、すやすやと眠っていた。体中、ぼんやりと青い光に包まれていた。ジェノはほっと息をついた。

女の性格には大いに問題があったが、とにかく、彼は治りそうだ……。

ジェノは首を元に戻して、天井を向いた。

いきなり、天井が滲んだ。

熱いものが、喉の近くまでこみ上げてきた。

(……)

自分たちは、確かに助かったのだ。

涙を拭こうとしても、両腕を動かすことができなかった。

女が、ひよいとジェノの顔を覗きこんだ。潤んだ目を見たのだろう、ぷつと笑った。

笑われる筋合いはない。

助けてもらったことを感謝する気持ちよりもっと強く、ジェノの心には、言いようのない反発が沸き起こってきた。

「なんで、民間人を撃った」

女がげんなりした顔をした。

「何をだ？」

「あの谷で、あの人を撃っただろう」

「ああ、あれか？ 別に、撃ってない」

「でも、クーリアを狙った。馬なしで、あの商人が山を越えられたと思ってるのか」

女はシートを滅菌器に放りこむと、こちらを向いた。

「お前、あれがただの商人だったと、そう思っているんだな」

女は呆れたようにジェノを見つめた。

「救いようのないバカとは、お前のことだ」

「……」

どういふことだ？

「あいつは人殺しだ。それも砂漠じゅうの艦隊を潰させた張本人だよ」

「！」

ジェノの頭で、パズルのピースのどこかがはまった。

「シーカー……、まさか」

「偶然なんかじゃない。後で、手下に銃を貰っただろう」

女は折りたたみの椅子に座ると、床に砥石を置いて、刃物の手入れを始めた。

「見事に嵌められた。奴らがちよろちよろしているのには気がついていたんだが。いつも使う道に帝国軍がいたんで、通路を変えたのが運の尽きだ、読まれていたのさ」

「僕たちに、艦隊を……」

「気づかなかったのか。おめでたい子だ」

ケラドの顔が頭に浮かんだ。

そうか、という思いと、一抹の寂しさが、ジェノの心を突き抜けた。

「クーリアには、可哀想なことをしたと思ってる。でも、無電と足をそのままにしておけば、またどんなことを企むかわからないからな」

ジェノは天井を見つめた。

あのとき、コナナの口笛でケラドに合図していたのは、あの男たちだったのか。

「いつだって、あのド派手な衣装でいるとでも？ まあ、そこが奴らの狙いだ」

「……」

「仲間とはぐれたんだろうが、リーダー一人で無防備もいいところだったな。手加減せずに撃ち殺しておけばよかった。さぞかし胸が透いたろう」

どうも、穏やかでない。リーダー？

「私が、連中のところにいた時は……、まだ〈影の目〉スキアド・オブスじゃなかった」

「スキア……、何？」

女は、その質問には答えなかった。独り言のようにつぶやく。

「汚い仕事が、大好きな奴だった。そりゃ出世もするだろうよ」

「シーカーのところにいたって、どういうことなんだ」

ジェノは女に尋ねた。

「あんたも、もともとはシーカーだったのか？」

ケラドはそんなこと、一言も……。

魔女は目を細めて、手元のメスの砥ぎ具合を確かめた。眉間に皺が寄っている。声には、どこかいらいらとした雰囲気があった。

「飼われていたのさ、十三の歳までね」

「飼われ、て？」

「私はシーカーに育てられたんだ」

ジェノの胸の奥で、腑に落ちるものがあつた。棘のある口調、頬に浮かべた皮肉っぽい笑い、思わせぶりの秘密主義。それはジェノが幼い頃から知っている、シーカーたちの気性そのままで。

いや、シーカーといえども、普通はここまでひどくはあるまい。

さらに煮詰めて蒸留しきつたとき、こんな性格の女ができあがるのだろうかと思った。

「もしかして……」

竜デュラミテ 擬に見せられた、あの燃え上がる夜の夢。

(……回収するのは、脳ユニットだけで構わん！)

武装都市の中心にそびえていた、自然岩の塔……。

「あのとき、〈騎兵隊〉が狙っていたのは、あんただったのか？」

女が、ジェノを睨んだ。

「なぜ、知っている」

自分で言いかけたくせに、ジェノはぞくりとした。

夢と、現実が重なった。そのときに感じる気持ちは、恐怖そのものだ。

魔女が、再び強い調子で尋ねてきた。

「なぜ、知っているんだ。メッカニア人のお前が」

「……知っているから、だ」

つとめて、威厳を保つ。

怯えているのがばれたら、嗜虐趣味のこの女に、いい餌を与えるだけだろう。

「……フン」

女が鼻を鳴らして、冷たく笑った。

「そうか、知っているのか。それはよかった」

「竜の魔女」の子供か、孫か何かなんだ、そうだろう」

女は答えなかった。視線を手元に落として、今度はピンセットを磨いている。

「その人は、大崩落を起こした後に、シーカーのところに戻ってきたって」

女は何も言わず、手だけを動かしていた。

ジェノは言葉が続けた。

「いなくなったものを、呼び戻すために。身勝手だよ、まるであのフネたちみたいだ」

「それだけ喋れるんなら、充分だ。すっかり元気じゃないか」

魔女の声は、ひどく乾いているようだった。彼女は磨き終わった道具を滅菌器にかけると、ジェノのいる寝台へ、つかつかと近寄ってきた。

ジェノは女を睨みすえた。

「あんたの母さんは、大飢饉で、どれだけの人が死んだか知っていたのか？」

女が指を広げ、ジェノの肩をつかんだ。万力のような力で、傷口が締め上げられる。

ジェノは奥歯を噛んだ。悲鳴を上げるまいと思った。

「痛いかな」

「ちつとも」

「それはよかった」

加わる力が、さらに増した。

みしみしという音が、骨を伝わってきた。右肩が砕けそうだった。

「……やめてくれ。銃が撃てなくなる」

ジェノは無理にでも、落ち着いた声を出そうとした。額に脂汗が浮くのがわかった。

魔女の両目は、灰色がかった琥珀色をしていて、まるつきり、ガラス玉のようだった。

無機質な色だ。そして、その瞳孔の奥には、何の表情も浮かんでいない。

(殺される……)

この力で喉を絞められたら、ひとたまりもない。

「銃？ 銃がどうした。あれは人殺しの道具だ」

女の声が、不気味なほどに柔らかくなった。

「うん、いい気分だ。人の命を握るのは。それだけで優しい気持ちになれる」

「あんたは……、僕をいたぶるのが……、そんなに、楽しいってのか」

息が苦しい。ジェノは目を閉じて、痛みに耐えた。

女が低い声で笑った。

アルボはどこにいろのだろう。外に遊びに出てしまったのだろうか。

頼む。誰でもいい。この痛みを止めてくれ……。

「私にはね、お前たちがどうして、骨を折ったくらいで気絶したり、びいびい泣いたりするのか、どうしてもわからないんだよ。だから純粹に、興味があるね」

「痛みを、……感じない？」

「感じるさ。だから少しは、麻酔だって必要だ。でも、傷口は自分で縫える。きっと違うんだろう、そういうところの仕組みが」

魔女は指の力を抜いて、ジェノの肩から手を離れた。

ジェノは、静かに息を吐いた。

「誰にもわかりやしない。他人の痛みなんて知ったこっちゃない。お前もそうだろう。現に、私と一緒にって艦隊を沈めたわけだしな」

ジェノは答えなかった。

「奴らは私に言ったよ。いい子にして、敵が来たら殺しなさい。そしたら普通の子供みたいに、本物の家族に会わせてあげる、って」

抑揚のない声だ。

ジェノの心に、それはぐざりと刺さった。

「私は待った。敵が来るのを。けど、いつまでたっても、誰も来やしなかった」

「……」

「十二の頃だ。私はついに待ちくたびれて、ある男に聞いてみた。いつになったら、敵が襲いに来でくゐるのかと」

「……」

「男は答えずに笑っていた。だから、私は耳をむしってやった」

ジェノは嫌悪の表情で、口を歪めた。

「なんのために」

「人の話をよく聴くように。そうした方がいいんじゃないかと思ったからだ」

「狂ってる」

「次の日から、手枷を嵌められた。それから一年の間、ずっと」

「当然だ」

「裏切られた気分だった。私が、何をしたら言うんだ」

「何をしたのか、自分で、わからなかったのか？」

「誰も、私に言わなかった、それまでは。『ヒトの耳をもうではいけない』ってね」

「言うわけないだろ。いちいち」

「でも、私にヒトを殺せと教えた」

「それは帝国が、シーカーの敵だからだ」

「シーカーは私に、ヒトは生まれつき平等だと教えた」

「……」

「敵って何だ？ 味方って何だ？ 人間が本当に平等なら、どうしてそんなものがある？」

「……そんなの」

「奴らはヒトを殺させるために私を育てた。そして、ヒトは平等だと教えた。ならば、自分がそうされても文句は言えない。ましてや、むしろられた程度で。そうだろう」

ジェノは言葉に詰まった。

この女はどこか、おかしい。

おかしいのだが、どこがおかしいのか、ジェノにはよくわからないのだ。

ただ、あまり愉快な人物でないことは、確かだった。

「あんた、無政府主義者アナキストなのか？」

「そんなこじやれたものと、一緒にするなよ」

(六)

あんたはかわいいそんな人だ、と言うと、魔女は喉を鳴らして笑った。

とはいえ、ジェノは皮肉でそう言ったわけではない。

あの夜が本当に存在していたのだとすると、やりきれなかったからだ。

ケラドには、確かに妹がいたのだろう。騎兵隊の若い父親にだって、同じぐらいの娘がいた。

岩の塔の中では、やつぱりそう変わらない年頃の少女が、手枷を嵌められていた。みんな、かわいそうだ。ジェノはそう思った。

ジェノの寝台の脇で、変な装置の調整をしながら、女は軽く首を振った。

「世の中には、もっと惨めな人間がいる。例えば、お前みたいな」

「惨め？ ……惨めだって、僕が？」

思ったこともなかったし、また、いくぶん腹が立った。

「惨めじゃないとでも言うのか？ 特攻隊の生き残りが」

「僕には、^{デュラゴン} 竜がいる。彼と一緒にいてくれる」

「そう、可哀想に」

魔女がこちらを向いて、にんまりと笑う。毒のある笑いだ。

「……」

「お前、歳はいくつだ」

「じゅう……十八だ」

「嘘つけ、もっと若いはずだ」

「……」

「ばか。軍隊に入るときに、ごまかしたろ」

「どうして、わかるんだ」

「私は、お前みたいな子供をね、今までに山ほど見てきたんだよ」

「僕は子供じゃない」

「好きにしろ」

魔女の顔が、生き生きと輝きはじめた。しまった、とジェノは思った。

「ククク、それにしてもご苦労なことだ」

「何だって？」

「知らないのか？ ガキどもが塹壕で吹き飛んでいころ、メッカニア連合の偉いさんたちが、どこで命の洗濯をしていたかっていう話をさ」

「……やめろ」

「ウーブとか、カルモの〈鳥籠〉へ、お忍びでねえ。クククク」

「茶化すな！」

「でも、本当の話だ。市に寄ったとき、この目で見たんだから」

魔女は装置の調整を終えると、流しへ行って布を洗い、それから煮はじめた。手術前に、汚れと膿を拭いたものだ。何枚もある。

「確かに、そういう連中もいたってことは知ってる。でも連合にいたほとんどの人は、そんなんじゃない、なかった。一緒にするな」

「ふうん。見上げたご奉仕の精神だ。帝国軍人にも負けてない」

「からかうな。僕たちは帝国軍とは違う。『皇帝陛下万歳！』なんて……。そんなふうに、偉い人のことを頭から信じて、無邪気に戦えるほど、メッカニア人は馬鹿じゃあないよ」

「なら、何のために？」

「みんなを、守るために。ごく普通の人たちが、自由に、平和に暮らせるように」

「アハハハ」

女がけたたましい笑い声をあげた。

「あんた……」

「は、は、は。『みんな』って、誰のことさ。え？」

「メッカニアの、みんなだ。言わなければ、わからないか？」

「だから、お前はガキなんだよ。よくも、見も知らない人間どものために死のうなんて考えられるもんだ。『ごく普通の人たち』？ ハッ、連中の本性がどういいうものか、命を拾ったのなら、この先、じつくりと見てみるのが、いい」

「この……」

「守るなんて、おこがましい。奴らこそが一番強いんだ。どっかの王様が死刑になろうが、どこかで革命が起きようが、結局、連中はボコボコと子供を作り、暮らしを続けていく。潰しても潰しても湧いてくる、パンの粉の虫みたいに」

魔女は早口でまくしたてた。単語と単語の間を短く切って、びしびしと吐き出す。

「守る？ 奴らを？ 馬鹿。メッカニアにはお前たちが必要だったんじゃない。逆さ。お前たちは、最初から必要とされていなかったんだよ」

ジェノの目の下が、ぴくりと引きつった。

「……何が言いたい？」

聖堂に張られたアジビラは、強い調子で、義勇兵の参戦を訴えていた。

祖国の危機を想え。いまこそ、若き力の結束が必要なのだ。

唾棄すべき隷属を断ち切り、自由メッカニアを取り戻すために。

だからジェノは家を出た。貨物船の底に隠れ、秘密の募集所へと向かった。

自分たちが必要とされている場所で、誰かのために、生きていきたいと思ったから……。

「大崩落の後、遺跡から、随分な量のエンジンが出た。守護者たちが少なくなったからな、とんだことをしてくれたものさ。シーカーも、うちの〈母〉も」

沸きたつ音が、ことごと響いている。

女は長い箸で、布を浸した鍋の湯を掻き回していた。

「帝国もシーカーも、先を争って発掘し、そして売った。連中が憎みあう理由は、ただの怨恨じゃない。要は商売敵だからだ……。似たものどうしなんだよ」

「それと今の話と、何の関係がある」

ジェノは上半身を起こそうとしたが、まだ無理だった。

「ある程度だが、攻性生物に殺される人間は減った。帝国がアカデミーの再建と、民間への技術還元をはじめたんで、いい機械や薬が出回るようになった」

ジェノはまだ、げげんな顔で女の後姿を見ていた。

相変わらず、若い女の喋り方にしては、少々理屈っぽい。叩きこまれたクセが抜けていないのだ

ろう。シーカーは知識を好むのだ、探索者である誇りとともに。

それが他の民族からどう思われているかは、言わずもがなのことではあるが……。

ジェノの継父も、彼らとの交渉には苦勞させられていたようだ。

食卓で、彼がボソボソとつぶやいていたのを覚えてる。

(どうも、こちらの程度を読まれているな。足元を見られた)

(連中は、苦手だ。……外術つかいどもめ)

継父だって、いっぱしのがめつい徴税人だ。取引で損をしているわけではなかったろう。それでも、なんとなく割に合わない感情が残るらしかった。

女が手を伸ばし、隣の部屋を指さした。

「私のコートを見たらう？ あれはアカデミー直属工房の、最後の手織製品なんだ。今は同じ型紙でも、みんな機械織の布地に変わった」

例の上着の話が出た。

いったい、この女は何が言いたいのだろう。

そういえば、彼女と帝国との関係も、よくわからない。

「人は増えても、農地は広がらなかった。大崩落の後の天変地異で、荘園の収穫も減った」

「あんだ、本当に何者だ？ 詳しいな、やたらと」

「調べたんだよ」

「なんのために？もしかして、スパイか何かなのか？」

「帝国が、浮遊機雷兵……、すなわち自殺部隊を実戦配備したのが二十年前だ。それは十年前に廃止されて、今じゃ、本国でも触れてはいけないタブーになってる」

「……？」

「その廃止には、私も随分と貢献させてもらったよ」

女は床に置かれたジェノの銃を取り、少しもてあそんで、照準を合わせる格好をつけた。それから乾いた布で銃の表面を拭うと、ジェノの枕元に置いて鍋の所に戻った。

「大崩落の始まりは半世紀前、機雷兵の配備が二十年前」

「？」

何が、何年前だって？

頭がぐるぐるする。

「占領地メッカニアへの移住と、大規模開拓が始まったのは、それと同じ頃……。つまり、お前ぐらの歳のガギが生まれる、少し前だな。帝国の技術は空路を通じて、どんなト田舎にでも持ちこまれていった」

女は淡々と喋り続ける。

「シーカーたちの商売繁盛と、時を同じくして。……で、イエリコだ」

「だから、あんたは何が言いたいんだ」

ジェノはいらいらした。

「悪いけど、僕はあんたたちほど、頭が良くないんだから」

「わからないのか、こんなに簡単なことなのに」

女が布をすくいあげ、鍋の湯をあけた。蒸気が立ち昇る。

「……帝国と同じことが、ここでも繰り返された」

魔女は振り返って、ジェノをじつと見た。

「生産過剰品を、社会全体がどう処分するかって話さ」

ジェノはぼかんとしていた。

意味がわからない。

「飢饉が終わったんで気持ちが緩んだのか、みんな、ちよいと励みすぎた」

「はあ？」

「若い人間の数自体は増えても、仕事と食い物の量は変わらない。おまけに技術革新で、工房でも農場でも、それほど人間が必要なくなってきた……」

女が、歌うようにつぶやいた。

「男の子は、戦場へ。女の子は〈鳥籠〉へ」

熱湯に浸された布を素手で絞って、部屋の隅に渡された紐へ干していく。

「お前たちは必要とされていなかったんだよ、誰からも」

やっと、女が何を言いたいのか、ジェノにも呑みこめてきた。

寝台に横たえられた体が、ぶるぶると震えはじめた。

「……ふざけるな」

嘘だ。

枕元には、白い銃が置いてある。

首を曲げてその存在を確認すると、また激痛が走った。

「惨めなもんだ、まるで救いようがない」

「うるさい。あんたに、何がわかる」

女はニヤニヤとこちらを見ている。

「なぜ憎まない、奴らを。なぜ、『守る』だなんて寝言で、自分たちを騙す」

怒りで、言葉が出なかった。ジェノは震えた。

「連中が寄ってたかって、お前たちを捨てた。他に与える仕事もなく、まともな教育も受けさせることができそうにない。だから邪魔だったのさ、意識してもしなくても」

ジェノが、拳で寝台を叩いた。

「嘘をつくな！」

「嘘なもんか。忘れるな、お前の友達を殺したのは、〈メッカニア〉だ！」

女が怒鳴った。続いて細いため息をつくと、今度はまた、柔らかな声に変わった。

あざ笑うような、いたぶるような、あの嫌らしい調子だ。

魔女はジェノの寝台に近づき、木の椅子に深く腰かけた。悠々と、脚を組む。

「憎めよ、無理しなくていいから。なぜ憎まない、このくそつたれた世界を」

「……」

「大メッカニアの戦士さまも平時に戻れば、うだつの上がない仕事に逆戻りさ。酒場でクダを巻
きながら、殺した敵の数を水増しして自慢しあうのが関の山だな」

「黙れ」

「娘は死んだ恋人を忘れる。ガキどもは孤児みなしごをこづきまわす」

「黙れ……」

「忘れ形見を抱えた未亡人も、じきに金持ちの爺いを探し回るようになるだろうよ。うぶ毛をきれいに抜いて、胸の開いた服を着……」

「もういい、だまれっ！」

ジェノは寝台から転げ落ちて、軽くうめいた。

「アハハハハハハ」

椅子から立ち上がって、彼を見下ろし、魔女はけらけらと笑い続けた。

張り飛ばしてやりたかったのに、脚が動かない。

次の瞬間、隔壁が開いて、アルボが飛びこんできた。

「なに、どうしたの」

アルボは女をいさめるように頭を振って、その肩をつついた。

魔女はふんと鼻で笑うと、膝について、石の床に転がったジェノの肩と腰をつかんだ。

「さわるな」

「ガタガタ動くからだ。点滴が外れたぞ」

軽々と抱え上げられて、寝台に転がされた。女とは思えないほどの力だ。

「血の量が戻るまで、おとなしくしてろ」

「お前が怒らせるからだ」

「おやおや」

腕の静脈に、再び針が刺さった。

ジェノは彼女を強く睨みつけたが、次の瞬間、ぞっとして息を呑んだ。

魔女はもう、あのにやにや笑いを浮かべてはいなかった。

ジェノの腕から手を離して、女はまっすぐ壁を見ていた。白い端正な顔は、仮面のような、まったくの無表情に変わっていた。彼女が見つめる岩壁には……、もともと、何も、ない。

「あんた、どこを、見て……」

アルボが、かすかに鳴いた。

「ああ、……うん」

その声で我に返ったらしく、魔女は回れ右をして、アルボの頭を撫でた。

そのまま、一緒に部屋の外へ歩いていく。ジェノは首を曲げて、声をかけた。

「あんたは、そんなふうにか、人間を見ることができないのか？」

魔女はジェノを振り返ると、また、鼻で笑って、一言つぶやいた。

「性分なもの」

「寂しい人だ、あんたは」

「そう思うなら、そういうことにしておけばいい」
隔壁が音を立てて閉まった。

ジェノは天井を見た。

心臓はまだ、怒りで激しく脈打っていた。

ああ、この気持ちは……。

あのとくと、同じだ。

「誰に、食わせてもらってると思っているんだ！」

継父の平手が、ジェノの頬を打った。

ジェノはテーブルを叩いて、怒りに任せて叫んだ。

「肺の弱い人を、こんな砂埃だらけの村に連れてきて！ あなたは母さんから、仕事と、歌を……、
取り上げてしまったじゃないか！」

食後のお茶を運んできたアルダ小母さんが、悲鳴を上げて盆を取り落とした。

ジェノは構わずに怒鳴った。頭が怒りで割れてしまいそうだった。

「あなたが、僕の母さんを殺したんだ！」

「黙れ！」

二発目の平手は、空を切った。

ジェノは素早く体をかがめると、部屋を飛び出した。

「坊ちゃん！」

ジェノは庭を抜け、離れへと走った。

クーリア小屋のわらの中には、すでに荷物が隠してあった。

（出て行くさ。出て行けばいいんだろう！）

自分には、もともと何もない。金も土地も、馬も、商売の知識も、頼れる親類も。だけど自分の力で、自分にしかできないことをして、まっとうに食べていきたかった。村のみんなから寄生虫みたいに憎まれて、食い膨れていくよりも、ずっと……。

唯一の心当たりは、連合の義勇兵に志願することだ。わずかだが給料も出るらしい。雑囊を提げて、ジェノは闇を走った。胸がドキドキと脈打っていた。

今までの口論とは、はつきり違うことがわかっていた。

彼はもう、僕を許さないだろう。あんなことまで言えたのは、生まれて初めてだ。

（あのまま……、村に残って、どう生きられたっていうんだ）

ジェノは天井を睨み続けた。

徴税人を継いで？

しかめっつらで愚痴をこぼして、帝国人にぺこべこと頭を下げて。

どこか遠くの貧しい村から、花嫁を金で買ってきて。

イヤだ。

白磁の花瓶のようにほっそりとした、母の首筋。

砕け散ったかけらを黙って拾い集めていた、あの寂しげな横顔。

(僕には、できない)

大人になったら、自分はどんな男になるのだろうか、と漠然と思ってきた。

あの男が母に対してしたのと同じように、僕もどこかの女の人を傷つけるのか。

細い首を砕き、床に落ちた花を踏みにじるくらいなら、死ねばいい。

そうなってしまった僕など、死ねばいいのだ。

それが、あの魔女の言う『憎しみ』ならば……。

僕はいくらでも、好きなだけ憎んだだろう、あのくそつたれた日々を。

(七)

……細い道が、平原を貫いている。

風が冷たい。魔女はマントの襟を掻き寄せた。振り返っても、アルボは後ろにいない。

道は、緑の丘の上まで続いていた。見慣れた景色だ。

知っている、あの女はいつも〈境界〉で獲物を待っているから。

魔女は丘に登り、森の前に立った。

そこは果樹園だった。甘い匂いが、緑の木立を満たしていた。

木漏れ日の下を抜けて、明るい広場まで歩くと、やはり、いた。

見事なぶどう棚の蔭に、荒織りの布を敷いて、片膝を立てた〈彼女〉が座っていた。手前に置かれた大きなガラスの鉢には、色とりどりの果物が盛られている。

〈彼女〉……、ベールの女が、顔を上げた。

魔女は立ったまま、女を見下ろして、言った。

「やあ、胴元」

「久しぶりね……。もう、来てくれないかと思った」

「来なくて来たわけじゃない。さあ、私は何を選べばいい？」

魔女は敷物の前に膝をつき、ガラスの鉢に手を伸ばした。

「それは、あなたが決めるのよ」

布の隙間から、緑の瞳が覗く。

魔女はその目を見つめ返して、言った。

「冗談だろう？ 親がイカサマをするのがわかっていて、博打^{ゲーム}を始めるバカはいない」

「今回は、わたしの干渉外です」

「保証はない」

「知っているでしょう。わたしが嘘をつけないことを」

「かもしれないな。あなたには魂がないもの」

「そうね」

「物語に偶然はない。そうだな？」

「わからないわ」

《彼女》の瞳が、一瞬だけ悲しそうに曇った。

魔女は鉢の中をかき回した。

「知恵の木の実はどれ？ 破滅の種子は？」

《彼女》が、首を振った。

「わからない。わたしにも、わからないの」

「あなたにもわからないものを、私や、あのガキに選ばせようってわけか」

「……ええ」

ペールの女は目を伏せて、黙りこんでしまった。

魔女は鉢から、ザアルの実を一つ手に取って、言った。

「そろそろ、決着をつけたいんだ、母さん」

目を伏せたまま、《彼女》が応えた。

「なんの？」

「私はもう、十三歳の子供じゃない。いつまでも、あなたの人形ではないの」

ペールの女が首を振り、魔女の琥珀色の瞳を見すえた。

「思っ、ない。人形だなんて」

魔女は敷物に腰を下ろし、ナイフを抜いた。

「どうだかね」

手に取ったザアルの実の皮を、器用に剥いていく。女とは目を合わせずに、ときおり刃と指にしたたる果汁を舐めながら、魔女は言葉を続けた。

「だってあなたには、私が私でなくても、よかったのでしょうか？ 大切な人たちの欠片を埋めこんだ、つぎはぎだらけの複製でありさえすれば。だから、同じことなんだよ」

ナイフの汁をズボンでぬぐい、皮を草の間に投げ捨てて、魔女は果肉をほおばった。

「境界を決めてほしい。どこまでが私で、どこまでがあなたなのか」

「あなたは……、あなた自身よ。他の誰でもないわ」

魔女は振り向いて、いきなりガラスの鉢を引っくり返した。

転がり出た無数の木の実が、あちこちに散らばった。

「ごまかすな。私は騙されない。どこまでが、あなたの仕組んだ博打？」

伏せた鉢の上に置かれた魔女の右手に、〈彼女〉がそつと手を重ねた。

女はぴったりとした黒い手袋をしている。

いや、それは本当に手袋なのか？

手の平の感触は柔らかくて、よくなめされた革のようだ。

そして陽だまりの石のように、ほんのりと暖かい。

〈彼女〉が、梢を見上げた。

魔女も釣られて、首を伸ばした。

何かが舞い落ちてくる。

……枯れ葉だ。

いつのまにか、ぶどう棚の隙間から青空が覗くようになっていた。

みずみずしかったぶどうの実が黒く干からびて、房を離れはじめた。

数えきれないぶどうの雨が二人の上に降り注ぎ、ぱらぱらと地面に弾んだ。

風が強くなってきた。

枯れ木の梢が、ざわざわと揺れている。

二人の女は視線を戻して、互いに互いの目の奥を見た。

魔女が、静かに口を開いた。

「ペールの下に隠れているのは、私の母さん？」

「……オルタ」

ため息が聞こえた。向かい合う女が、目を閉じた。

緑の瞳が隠れると、布の奥は暗闇に変わった。

「それとも、もしかしたら、その中には誰もいないの？」

暗闇の中から、小さなささやきが聞こえた。

「いきなさい、あなたの道を」

また、強い風が吹いた。

敷物の端が、ふわりと浮き上がった。

ベールが崩れて、形をなくした。中身の消えた白い布が、風に飛ばされていく。

風は嵐へと変わり、雷鳴が近づいてきた。

魔女はザアルの種を握って、マントのあわせを押さえた。

「クソッ！」

地面に膝をつき、飛ばされないように踏ん張る。

目を閉じて頭を垂れた。何かが引き裂かれるような、大きな音がした。

やがて、暴風が止まった。

魔女は立ち上がった。まだ、丘の上にいる。果樹園は落雷で焼け焦げて、ただ木々の幹が、棒杭のようにそこらに突っ立っていた。

敷物も、ベールの女も、ガラスの鉢も、全てが消え去っていた。

草だけがまるで何事もなかったかのように、さらさらと風に揺れていた。

魔女はマントから左手を出した。

こわばった指を一本一本開けると、ザアルの種が残されていた。

魔女は眉を寄せて、軽く首をかしげた。一瞬、その種が青く光ったように見えたからだ。

数歩踏み出して、倒れた幹の根元にひざまずく。ナイフで灰の奥へ、深く穴を掘った。

そうだ……。

この世から失われた魂には、世界回路を通じてさえ、もはや触れようがないのならば。

（ならば、なぜ、あの最深部は、わざわざ〈魂の座〉と呼ばれていたのだろうか？）

あの場所が存在するための、何か、他の理由があったのではないだろうか。

旧世紀の人間たちさえも、まったく意図していなかった、何か、他の理由が……。

(わからない……)

現し身では、決して辿りつくことのできない、輪廻の最涯円。

その、さいはての風景。

(……青い恒星?)

女は指を伸ばして、青白く輝く種を土の中へと埋めた。消し炭と灰で、穴の上を覆う。

そして魔女は目を開けた。

心地よい風が、目の前の霧を開いていくところだった。

(また、逃げられたな)

今から追いかけても、もう無駄だ。

岩に寄りかかっていた昼寝の半身を起こすと、湖の上で、アルボが遊んでいた。

ちようど難しめの風が出る時刻で、それに乗るのはとても楽しい。

アルボが大きく輪を描いた。一緒に遊んでいるのは、トビクマ鳶霊の子供たちだ。

巣立ちが終わって、ずいぶん羽が強くなってきた。

じきに彼女たちも新しい巣を探して、北へ移動しなければなるまい。

「おいで!」

魔女はアルボを呼んだ。

「そろそろ、飯にしよう」

(八)

ジェノが次に目を覚ますと、竜はまだ眠っていた。

薄暗く、広い部屋の中はさむざむとして、ジェノは震えた。

腕の点滴は、いつの間にか片付けられていた。

起き上がって、寝台から転げ落ちた。

「うっ……」

まだ、足が思うように動かない。

点滴の支柱に寄りかかって、ジェノは一步一步進みはじめた。血はほとんど固く乾いてしまつて、もう、胴体を裂かれるような痛みは消えていた。

よく眠っている竜の顔をそっと覗きこんでから、ジェノは枕元を振り返った。

ジェノの上着はきれいに汚れを落としてあつて、その上には真新しい肌着が重ねてあつた。その下に、着古してはあるが、破れのない清潔なズボンが畳まれている。

寝台の脇には、革でつぎを当てた、ジェノのブーツが揃えてあつた。つぎ当てに使われている革には、妙な形の小さい鱗の跡がある。何の革かは、よくわからない。

肌着を手にとって、寝台に腰を下ろし、しばらくジェノは黙りこんでいた。

それから急に、ぐしゃぐしゃと黒い髪の毛を搔くと、猛然と服を着はじめた。

「いたた、た……」

動かすと、やはり痛む。

這うように岩屋を出た。

外は昼間だった。目の前は平らな草地になっていて、すぐ先から崖がはじまっている。

下には、霧に包まれた広い湖面があった。

風に混じった、なまぐさい臭いが、ジェノの鼻の底を打った。

(なんだ？ これ)

ジェノは思わず鼻をこすった。血の臭いだ。けれど、人間の血ではない。白い道の始まりで嗅いだ、純血種の体液と内臓の臭いだった。

平らな草地は、ぐると岩屋を取り巻いていた。ジェノはその南の端まで歩いた。

崖の縁には、アルボと魔女がいた。

(……！)

臭いは、そこから漂ってくるのだった。

ジェノは足を止めた。

さっき、血を抜かれていた中型の純血種が、草の上に四肢を広げていた。

頭部の甲殻は、大きなハンマーのようなもので碎かれていて、アルボがその中身をすすっている。

こちらを振り向いた口に、鋭い牙が並んでいるのが見えた。
剥き出された歯茎が、純血種の体液で染まっていた。

（食ってる……）

竜はこの世の食事を受け付けけない。ケラドから、ジェノは確かにそう聞いた。
魔女が、アルボに何やら声をかけた。

牙に引っかかった肉のかけらを、指で取ってやる。

そうして汚れを取ってやると、魔女は肉のかけらをそのまま自分の口に入れた。
ジェノは思わず、自分の口を押さえた。

「起きたか」

口をもぐもぐと動かしながら、女が振り向いて言った。

ジェノは毒気を抜かれて、そこに立ち尽くしていた。

「部屋の棚に、瓶詰と乾パンが少しある」

魔女はだぶだぶの前掛けをして、がっしりとした作りの鉈を右手に持っていた。
折り畳みの椅子の足元には、鋸と大きなナイフが置いてある。

ジェノはやつとの思いで言った。

「平気だ……、点滴のおかげで、別に腹は空いてないから……」

「そうか」

女はナイフに持ち替えると、皮の隙間に挿しこんで、外殻を剥ぎにかかった。

(生……、いま、確かに生で食った、よな……)

辺境の蛮族だって、攻性生物を生で食べたりはしない。生血は、加熱しなければ毒になる。それに、どんな有毒の微生物に汚染されているか、わかったものではないというのに。

驚愕が薄れると、ジェノは好奇心に誘われた。足を引きずりながら、ゆっくりと近づいていく。

「うまいのか」

ジェノは尋ねた。

剥がした外殻の裏には、ごっそりと肉がついていた。

女はそれを、ナイフの刃で薄くそいだ。

何切れかをアルボにやって、残りは自分で食う。したたる体液が、前掛けに散った。

「乾パンよりかは、な」

食うか、と尋ねられるかと思ったが、そんなことはなかった。

魔女とアルボは、黙々と食事に集中している。

ジェノはしぶきがかからない程度の所で立ち止まって、草の上に腰を下ろした。

そして、ジェノは言った。

「……さっきは、すまなかった」

「なにが」

魔女が、横目でジェノを見た。

「あんたの言ったことは、たぶん、間違っちゃいない」

「……」

女は白い犬歯を立てて、硬い筋肉を引きちぎった。そして、がつがつと嚙む。

「だけど、僕はそれが正しいとも思わない。僕たちは自分で戦うことを決めて、自分の手で人を殺してきた」

ジェノはできるだけ穏やかな声で話した。

彼女は肉の塊をぐくりと飲み下すと、小指の先で、齒に絡まったものをせせった。

「いまさら、騙されていたことにしたり、間違いを世界のせいにしたりして……。言い逃れようとは思わないだよ」

魔女の小指の動きが止まった。

ますます、哀れな生き物でも眺めるように、ジェノを見つめる。

ふっとため息をつく、それは少女のように細い声だった。

「……頭の悪いやつだ」

ジェノは黙ってうなずいた。

魔女の目が強い光を帯びた。人形の目ではなかった。心の底まで射抜くような視線だ。

瞳の奥には、軽蔑も嘲笑もない。あるのはただ、何かへの深い憤りだけだ。

「おまえの言っていることは、たぶん間違っちゃいない」

もの言いたげに目を細めると、女はナイフの刃を親指でぬぐって体液を舐めた。

「でも、正しいとは思わない、私も」

「助けてくれて、ありがとう」

それを聞くと女は面白くなさそうな顔をして、また、食事が続けだした。

「便所は北の端だ。階段を降りて水の上」

「今は、いい」

ジェノは膝の間に顎をはさんで、なんとなく、彼らの食事風景を眺めた。

「なあ、その子……、アルボは、あなたの何なんだ？」

デュラゴン

竜 ではない、魔女はそう言った。

じゃあ、この白い翼の生き物は、いったいどこから湧いてきたというのか。

「私の子だ」

女は鋸を取った。

「私が見つけて、私が育てた。……私の子にしたら、いけない？」

「見つけた？ どこから？」

言ってから、ジェノは一瞬後悔をした。

そこまで聞いたりしたら、また、魔女は機嫌を悪くするだろうか……。

しかし、女は何も言わなかった。

手に持った鋸で、攻性生物の腹をざくりと裂いた。

青白くほの光る内臓が、その裂け目からこぼれだす。

アルボが首を近づけて、それを引きずり出した。むさぼるように食う。好物なのだろう。

「殺せなかったんだ」

女が、ぼつりと言った。

「私も、シーカーの保育器で育った、弱い子だったから」

「……」

「代謝が安定していなかった頃には、私の骨髄や組織をたくさん移植した。そのせいか、あのひととは違った姿になってしまったけれど」

魔女はまた手を伸ばして、アルボの牙に引かかった臓器を取ってやっていた。

ジェノは彼女の腕を見た。

這い回る無数の赤い傷跡、そして、丸い採血の跡……。きつと、その跡は全身にあるのだ。

「だからこそ、私の血も流れてると思ってる。そう思ったって、いいだろ？ 私の子に、なってもらったんだから」

それきり、もう一言も喋らずに、女とアルボは食事続けた。

しばらく、ジェノはずっとそれを見ていた。

ジェノをいたぶって喜んでいた女と、これが同一人物なのか、よくわからない。たぶん、もともとムラの多い性質なのだろう。

心の上下に二本の弦が張ってあって、その間を忙しく行ったり来たりしている。

また、そういう人間は、さして珍しいものではない。

食事が終わった。

女がナイフを投げてよこした。

「腕が動くなら、働け」

そう言うとは自分は鉋を構えて、食べきれなかった肉や骨のくずを叩き割りはじめた。

「細切れで頼む」

なんのためかは、よくわからない。けれどもジェノは黙ってうなずいた。

アルボが、大きな顎で軟骨を砕く。

さほど時間もかからず、一山の骨と肉ができあがった。

大きなシャベルでそれをすくうと、魔女は断崖の端から湖へと撒いた。

「！」

水面が、激しく泡立った。

ジェノは腹這いになって、湖を覗きこんだ。小さな変異種や魚たちが無数に集まってきて、いつせいに口をばくばくと動かしていた。

(おすそわけ、つてわけだ)

ジェノは手のひらに肉片をつかんで、湖へと投げた。

魚たちは、後から後から泳ぎ寄ってくる。光る背びれが、とてもきれいだ。

ジェノは目を細めた。

「いつも、食べ終わったら、こうやって片付けているのか？」

「片付ける？」

女が、聞きとがめるように声を上げた。

「ちがう。〔葬送〕だ」

「葬送……？」

ジェノは軽く笑った。

「また、言葉の問題なんだな、あんたの」

「言葉は、世界を縛る」

「ほら、また」

「お前は、自分が食らってきたものたちの死を、悼むということがないのか？」

ジェノは魔女を振り返って、ちよつと皮肉に首をかしげた。

「食われるものにとつちや、関係ないだろ」

どうするか、と魔女の顔色を確かめてみたが、別にどうということもない。ジェノは少し強気になつて、からかうように言葉が続けた。

「そんなの、ただの自己満足だ」

女は熊手を取って、草地に散らばった甲殻と肉のくずを、崖の下へと掃き出した。

「……そうとも言う」

(九)

部屋に戻ってからが、また大変だった。

目を覚ました竜が丸部屋に入って、棚の中の物を全部引きずり出していたからだ。

「こら！」

魔女が手を振り上げて、竜を小突いた。

竜は尻尾を振って、うなった。

「いくら退屈したからって、限度ってものがあるだろ」

ジェノは黙って、片付けをはじめた。

女はじろりとジェノを睨むと、壁際にもたれかかって、何やら作業をしだした。

地図か、覚え書きのようなものをしたためているようだ。

ときどき頭を起こして、ジェノに指図をする。

「それはそこだ。違う、その上にしまえと言っただろう」

竜はおかまいなしに、魔女の座った反対側の壁際に陣取ると、また居眠りをはじめた。

ジェノは竜を弁護した。

「彼は珍しいものが好きなんだ。この世界に来たばかりだから、いろいろ知りたいんだよ」

「フン」

魔女が眉をしかめて、竜を睨んだ。

「そんなに退屈なら……、ホラ」

女が何かを投げた。それは竜の頭に当たって、コンと音を立てて跳ね返った。竜が、喉の奥でうなった。

ジェノはそれを拾った。

（あ！）

見覚えのある物体だった。

めったに、あるものではない。ジェノは驚きで目を丸くした。

「これは！」

女が面倒くさそうに、ペンの手を止めて顔を上げた。

「それで、遊んでやれよ」

「これ、どこで……」

ケラドが持っていたのと、同じ形のパズルだった。

直方体をしていて、それぞれの面が三色に塗り分けられている。

八つの角には、細かい模様があしらってあった。

パズルの面はきれいに揃っていた。そのことにも、ジェノは目を丸くした。

「あんたが、解いたのか？」

「さして難しいものじゃない。でもいい細工だ」

ジェノはパズルを適当にくるくると回して、女に手渡してみた。特にじっくり見ることもなく、魔女は難なくそれを元に戻した。

「よく、作ってあるだろ。そういうことなんだよ。旧世紀エンジンがいくら掘り出されたからって、この腕がなけりゃ、何の意味もないんだものな」

魔女はかすかに首を振りながら、ひとりごちている。

「帝国も、シーカーも。連中の強みは、そいつをよく知ってるってことなんだ」

ジェノはまた、パズルを受け取った。竜が、横から覗きこむ。

「これを、どこで？」

「ボケ爺さんがくれた」

「ボケ？」

「シーカーの爺さんがね、市場で、泣きながら抱きついてきたんだ。それと一緒に、酒をくれた。何も喋らないで、ひいひい泣いているだけなんだから」

「……」

「いい酒だったよ。こないだ、知り合いと全部空けた。毒は入っていなかったみたいだ」

あんたその知り合いを毒見役にしたんだろう、とジェノは言いたかったが、やめた。

「孫か娘と間違えたんだろうね。あのときは、かつらをつけていたし」

ジェノはぶつと吹きだした。

「……その人は、たぶんボケていたわけじゃ、ないと思うよ」

「なんで？」

魔女がげんな顔をした。

「僕が、その理由を知っているからさ」

「？」

彼らがしたことは、確かに、取り返しのつかないことだったのかもしれない。けれど、竜と乗り手たちを愛した人だって、ちゃんといたのだ。

（ボンボン育ちで、ヒラの万年調整士だけど……）

世界は、本当はとても狭い。ジェノは一人で笑った。

女は子供のように口を尖らせて、不審そうにジェノを見ている。

「なにが、おかしいんだよ」

「だからね、あんまり人をバカにするもんじゃない。あんたの知らないことを、僕が知っていることだって……、あるんだから」

（十）

魔女は闇の中に座って、薄目を開けていた。

その視線の先には、三日前に収獲した、トビクマイシ鳶霊石の結晶が光っている。

ぼんやりと、手の中でそれをもてあそびながら、魔女は自分の心の中を覗いていた。さつきは、だいぶ飲んだ。全身にアルコールが回っている。

ひさかたぶりに、気分が波立っていた。

あの村で艦隊と戦ったのを最後にして、この少年たちと、もう二度と関わり合うつもりはなかった。彼女には今の生活が大事だったし、竜については、いろいろと思い出したくないことがたくさんあったから。

《光の道》に散らばった遺伝基をかき集めてきて、同じ肉体を再構成させたとしても……。

それは、全く別の魂を持つ《だれか》にしかない。

かつて存在した別の誰かであったとしても、いったい何の意味がある？

アルボはアルボだし、私は、私だ。失われた魂と時間は、二度と甦らない。

わかるまい、魂のない連中には。あの女にも、あいつにも……。

「石人形どもめ」

魔女は不機嫌そうに、小さくつぶやいた。

心には、あの言葉が、ずっと引っかかっていた。

「……記憶の消滅も計算のうち、か。さすが二十年間、地を這い回っただけのことはある」

魔女の脳裏に、あの日の亜人の姿が浮かんた。

仮面のように白い顔。無機質な冷たい唇。

眼窩は深く窪み、まるで表情というものを読み取ることができない。

遺跡の白い壁が、亞人のひび割れた声を、さらに冷たく反響させていた。薄青い光が、周囲の大気を満たしていた。

「大した悪知恵だな、『反逆者』。……いや、今は『もう一人の者』か？」

その異形の怪物と相對するたび、少女の脚は震えた。

この人もどきと自分が、確かに同類なのだということを。

声を聞くと、感じずにはいられなかったから……。

震える息を押し殺して、幼い魔女は、亞人を睨みながら問いかけた。

「どうということ？」

だいじょうぶだ。

まだ、怯えを気づかれてはいないはず。

手のひらに、あのひとの呼吸が伝わってくる。

怖くない、きつと……。 竜デュラコーンが、ついていてくれるんだから。

「おまえは、やがて地上の魂を得る定めにありながら、回路への鍵をも預けられている。二つの世界を、媒介なかだちするもの……。石女うますめの娘。おまえが、必要だ。我らが真の魂を取り戻し、彼方へと還るためには……」

竜には、亞人の言うことがわかっているのだろうか。

首を振って、大きなあくびをした。どうやら、さっきまでのように暴れられないのが退屈らしい。魔女はきつと顔を上げた。子供っぽく甲高い自分の声に、もつと威厳があればいいと思う。

なるべく落ち着いて聞こえるように、腹から息を出して、尋ねる。

「アバド、わかりやすく教えて。お前は何がしたいの？」

それを聞くと、亜人は耳障りな声を立てて、笑った。

「遊戯だ」

「遊戯……？」

少女は奥歯を噛んだ。怒りが喉まで押し寄せてきた。

「お前は……、あの殺し合いが、遊びだったっていうの」

亜人は、いくさのために作られた人形。旧世紀の神々の、心なき僕……。

数日前、確かにモボはそう言った。その後で「おまえは別だ」と付け足しはしたけれど。

別なのか、別でないのか、本当は彼女自身にもよくわからなかった。

「おまえも知っているはずだ、生まれ落ちてより、我らの眷属なれば」

「ふざけるな。私はお前とは違う。殺す必要のないヒナまで、撃つたりはしない！」

「嘘を、つくな」

「なんだと」

「あの戦艦も、守護者たちも。貴様さえいなければ、多くの者が死なずにすんだ」

「あいつらが悪いんだ。誰だって、撃たれたら撃ち返すわ」

「違うな」

亜人は自分の竜から降りて、遺跡の床を歩いた。

石の上を、石が歩く音がする。

そして、彼はこちらを指さして、叫んだ。

「貴様が勝負^{ゲーム}を降りさえすれば、よかった」

「勝負？」

「生き残りたい、ただそれだけのためならば。何故、わたしを追ってきた？」

竜が、遺跡の床に着地した。少女はその首を撫でると、すばやく跳び下りた。

足の裏が、ぺたりと音を立てた。

亜人の後姿に、魔女は怒鳴った。

「知リたかつたからだ！ みんな、好き勝手なことを言う。どれが本当でどれがウソなのか、どうしても、確かめたかつたから……!!」

亜人が振り向いた。目の奥の闇は、どこまでも見えない。

「つまり、お前はこの鬼^{ゲム}ごっこに乗った」

「なにを……」

「知っていたはずだ、この世界にとどまる限りは、ただの紙切れに過ぎないことを」

「何のこと？ 私は何も知らない。わけがわからない」

「そうだ、わけがわからない。いくらでも書き直し、差し替えることができる……」

最後の声は、消え入るように小さくなった。

「消費することしか知らぬ愚か者どもの手垢にまみれ、劣化し、腐りゆくとしている」

「帝国のこと？　そこで、お前は働かされていたんだろう？　むりやりに」

「違う……。もろもろの、すべてだ」

魔女は黙って、亞人のうなだれた後姿を見つめていた。

わかっていた。自分はこの生き物を、今日中に殺すだろう。

彼は生きているのが苦痛なのだ。せめて同胞の手で、楽にしてやらなければならない。そうすれば、鬼^デごっ^ムこは終わりだ。少女には、とてもよくわかっていた。

（もろもろの、すべて、か……）

あの日から自分はいくつ、歳を取ったのだろう。

手の中では相変わらず、鳶^{トビ}霊^{レイ}石^{イシ}の結晶が、滑らかな優しい光を放っていた。

この大きさの結晶が一つあれば、十数人の子供を砂塵熱から救うことができるだろう。そうしたら、もちろん、彼女の儲けだって増える。

北の庵に風車があればいいと思っていたし、新しい蓄電器も欲しい。

結晶を鞆にしまい、魔女は自分の心を覗くのをやめた。

枕元に手を伸ばして、置いてある青い瓶から、少し水を飲んだ。冷たかった。

酒が入った後の夜中に飲む真水ほど、旨いものはない。

（トビタマの繁殖期が一段落して、暇になったら、久しぶりにあそこにも行ってみよう。アルボもハマ・ハマに会いたがっていたもの）

ハマ・ハマの乗り手である古い友人のことも思い出して、魔女はくすりと笑った。

あいつのガキどもは、また数が増えているんだらうな。

今度は、何人目だって言つてたっけ？ まあよくも、次から次へと。

敷布の上に横になり、目を閉じようとして、こちらを見つめている気配に気がついた。
(起こしてしまつたか？)

ジェノの竜が、彼女を見ていた。

闇の中で、琥珀色の瞳同士が見つめあつた。

「なぜ、戻つてきた。今更になつて」

魔女がささやいた。

竜は、わずかに首をかしげただけだつた。

その横では、少年が、ぐっすりと眠っている。

「おまえ、その子をどこに連れていく気だ？」

竜は目を細めた。

「私の言葉は、もう、おまえには聞こえないのね」

肘をついて頭を支え、魔女は竜をじつと見つめた。

懐かしげな、寂しげな目だつた。

「だって、おまえはもう、あのひとではないもの」

魔女はくると寝返りを打つと、竜に背中を向け、毛布を引き寄せて体を丸めた。

そして、彼女の隣で安らかな寝息を立てているアルボの首を撫で、目を閉じて竜に言った。

「おやすみ」

五分ほどして、竜の、小さなあくびの音が聞こえた。

(十一)

道の中には、あやしい光がざわめいていた。

一瞬、通り過ぎたかと思えば、また、懐かしい風景が見えたような気がする。風が、正面から吹き付けていた。

心を刺す悲鳴が、流れの底から響いて消えた。

「魅入られるな！」

魔女が叫んだ。

「自分の名前を呼ばれても、絶対に振り返るんじゃないぞ」

ジェノは彼女の言葉に従った。

黒く波打つ出口が見える。アルボと竜が、次々に飛び出した。

たどり着いた先は、洞窟の中だった。

出たとたん、めまいに襲われて、ジェノは深呼吸をした。

「まっすぐ出れば、〈中南の五〉だ。ユクスルの塩湖を左に見て、少し飛べ」

ジェノはうなずいた。

女はアルボに乗ったまま、洞窟の先を指さしている。

「最後に、一つ聞いてもいいかな」

「なんだ」

「どうして、彼らは僕や、あんたを選んだんだろう」

「……」

「あんたはそのとき子供だったんだろうし、僕だって、まだ半人前だ」

ジェノの言葉がよく聞こえないと思ったのか、魔女はマスクを外して、耳を帽子の中から出した。

「どう思う、お前は」

ジェノは竜の脇腹を撫でた。傷の跡が残ってはいいるが、もう、すっかり膿は取れている。

「もっと強くて、特別な、賢い戦士を選べば……。竜があんなに傷ついたり、苦しい思いをするのと違って、なかったのと思ったんだ。僕は今でも満足だけど、彼は……」

魔女は首を振った。

「この世に特別な存在なんて、どこにも居やしない。べつに、よかったんだろう。お前でも、私でもなくても……。だけど」

「だけど？」

「デュークに乘れるのは、子供か亜人だけだ」

亜人、というのは耳慣れない言葉だ。しかし、あえてその言葉の意味を尋ねるのも、ジェノは無

粹だと思った。

「子供が？ どうして？」

女は指を唇に当てて、一語一語、思い出すように言った。

「魂が、ないから」

「え……」

「その分だけ、お前たちは、天に近いのかもしれない」

「僕に、魂が……ない……」

「まあ……、人はいつか飛べなくなる。だから代わりに、それを得るのさ」

「どういう意味だ？」

質問には答えずに、彼女はゴーグルを額に当てた。

魔女が首を軽く撫でると、アルボが喉を鳴らした。

「おまえ、名前は？」

突然、そう切り出されて、ジェノは言葉に詰まった。

「私は、オルタ」

少年の中で、ふと、何かが腑に落ちた。そうだ、魔女にだって名前があるのだ。

結局のところ彼女が、たとえ何者であつたとしても……。

「夜明け……」

洞窟を出ると、見晴らしのいい高台だった。遠く、塩の湖が散らばっていた。

薄明の空はしだいに赤く染まって、冷たい風が頬を刺す。

空の端では、星たちが最後のきらめきを残しながら沈もうとしていた。

すぐに、朝日が昇る。

「僕はジェノ。ジェノⅡカミロ」

地平線から、一条の光線が伸びて、オルタの白磁のような顔を照らした。

最初に薄暗い部屋の中で見たときよりも、その頬は生気を帯びていて、皮膚の下で確かに波打っているであろう、彼女の血の温もりを感じさせた。

「末裔……、地を往く……」

オルタが白い歯を見せて、にっと笑った。

「……いい名前だ」

ジェノの竜が、天を向いて一声、高く吼えた。

アルボがそれに答えて、柔らかい声で鳴いた。別れを惜しむように、二頭は数度鳴き交わした。

「本当に、ここでもいいのか？ 連中はもつと、ずっと遠くだ。ハルサの南端に、もう一つ出口があるんだが……」

「いいよ、さっきも言っただろう？」

「寄り道か」

ジェノはゆっくりとうなずいた。

魔女はその顔を見て、口の端に笑いを浮かべた。

微笑みなのか、苦笑いなのか、それはわからない。

目の表情は、分厚いゴーグルで隠されていたからだ。

「行こう、^{デラコーン}竜！」

竜はジェノを乗せて、強く地面を蹴った。旋回しながら、高度を上げていく。

アルボの背の上から、オルタが少年に向かって叫んだ。

「その、名前は、誰に、もらったの？」

「母さん……、母さんだ！ ……僕の、母さんが、くれた！」

「そう……、そうか、私も、同じだ！」

翼が気流を捕らえた。

竜は羽ばたきを止め、紫色の空にどんどんと昇っていく。

オルタが続けて叫んだ。

「名前は大事にしよう、お互いにな！」

ジェノは地上に向かって、力いっぱい手を振った。

アルボの背で、オルタが軽く手を挙げるのが見えた。

「オルタ……、ありがとう！」

オルタとアルボはしばらくの間、豆粒のようになった竜の姿を見守っていた。

やがて、その影が曙の空に消えると、回れ右をして、洞窟の中に戻っていった。

十二章 翼ある死

(一)

「僕は、母さんが歳を取ってから産まれた息子なんだ」
いつか、彼がそう話してくれた。

「高齢出産は危険だから、やめろって言ったんだって。一番上の兄さんや、伯父さんは」
〈若枝〉……。

それが、彼の名前だ。

「でもね、僕は生きているし、母さんもまだ元気だ。悪いことばかりしているけど」
「悪い、こと？」

けれども、ジェノはそれ以上尋ねなかった。キュプロが連合の首脳陣から煙たがられているのは、有名な話だったからだ。帝国と通じているのだ、という噂もあった。

実際、司令たちも、キュプロへ情報を回すのを嫌がっていた。それは帝国関連のことだけでなく、彼らの思うように金を出さないということも、不満の一つにあったようだ。

ジェノは砂嵐に曇った空を覗きながら、洞窟の奥でごろごろと転がった。

体の調子は、すっかり元に戻っていた。急いで飛んで行きたいのに、思うように進めないのかも

どかしい。砂嵐が終わるまで、ずっとここに隠れていなければならないなんて。

竜はすやすやと眠っていた。この生き物は、本当によく眠る。

ジェノ自身も、睡眠時間が、彼につられて長くなっているような気がしていた。眠るのはいい。

他の全ては、やがて苦痛に変わる。

楽しい会話も、度を過ぎれば陳腐に思えてくる。

食はずぎれば腹が疲れる。そこまでの大食をしたことは、めったにないけれど。

胸躍る競技^{デム}だつて、日が暮れるころには飽きてしまつて、家に帰りたくなるものだ。

小さく上下する竜の背中を見て、ジェノはかすかに微笑んだ。

眠るのはいい。起きているときと違って、余計なことも考えなくてすむし。

銃を膝に置いて砂埃を取り、ナイフを抜いて、革で刃の曇りをよく磨いた。

「……本当に、ごめんね」

振り返ったジェノに、クロンはそう言つた。

気にするなよ、とジェノは笑つた。……クロンも、笑つた。

あいつは、どんなに生きたかつただろう。

あいつの母さんはどんな思いで、彼の名前をつけたのだろう。

いつか、彼女に会える日が来るだろうか。

(来るわけが、ないよな)

ジェノは南に行かなくてはならない。そして、キュプロはるか北西にある。

彼女は、ジェノを許してくれるだろうか？

(すまない、クロン)

ジェノは上を向いた。

二、三回まばたきをして、また仕事に戻った。

このとき……。

ジェノはちつとも、気づいていなかった。

言葉には、いつでも一つ以上の意味があるということに。

彼らは野犬のようなものだ。

大人しいものもいるが、放っておくと勝手に増えてはびこり、人を襲うようになる。

だから社会を保つためには、人間は言葉を飼いなさなくてはならない。一つ以上の意味を持たないように、首輪と鎖をつけておくのだ。

それはとても大切なことだ、けれども言葉たちの自然は、その中に入らない。

しばらくして、外の風音が弱まった。

竜があくびをして、のろのろと立ち上がった。

「起きたかい？」

ジェノは荷物を片付けた。

乾パンを腹に入れて、竜と一緒に外に出る頃には、もう夕暮れの気配になっていた。

嵐は、すっかりおさまっている。

竜が首を高くあげた。

「どうした？」

ジェノはあたりを見回した。

（……）

砂の音がする。

エンジン音と、人の悲鳴が聞こえたような気がした。

「！」

助けを呼ぶ声だ。別の声が、必死に悪態をついている。

銃声が響いた。

攻性生物の悲鳴が聞こえた。クーリアのものではない。

「ドラグーン
竜！」

ジェノは竜の背中に駆けのぼった。

誰かが、襲われている。

このあたりの砂地は、みんな鮫どもの巣だ。昨日の昼間、ジェノも何匹か殺した。

「急ぐぞ！」

(二)

走地艇が一台、砂に嵌まって傾いていた。

その外装は派手なオレンジ色をしていて、落書きのような絵が全面に、ペンキでべたべたと描かれていた。後部の荷台には、布に包まれた大きな行李が、何個も縛り付けられている。端にくくりつけられているのは、わらでまとめられた青ガラシの束だ。

こんな車両は、明らかに軍のものではない。ジェノはほつとして、急いで銃を構えた。

「ザード！」

ハッチが開いて、誰かが叫んだ。

「戻れ！ エンジンがかからん！」

緩い砂地に嵌りこんだ走地艇の脚に、何匹もの影鯨たちが体当たりをしていた。

「くらえ！」

ジェノが叫んだ。

声を出したのは、自分が人間だということを知らせるためだ。

影鯨を狙っていることがわかるように、離れた砂の上を撃つ。岩狼イワオイノのときのような目には、もう二度と遭いたくなかった。

「戻れ、ザード！」

様子がおかしい。

機体の脇腹に、青年が一人ひつついていた。

必死に、何かの作業をしているようだ。注油用のブリキ缶のようなものを小脇に抱えて、装甲を外し、内部に手をつっこんでいる。

エンジンをかけられないわけだ。

(故障か！)

砂の中から、影鯨のヒレが飛び出した。鞭のようになつて、青年を叩き殺そうとする。

青年は特大のスパナで、ヒレを殴りつけた。

ぎゃつと悲鳴が上がって、血しぶきが飛んだ。

夕日を浴びて、砂地には機体の長い影が落ちていた。

ジェノはその影の中を撃った。ちぎれたヒレが砂と一緒に吹き飛ぶ。

影鯨は、獲物の影に集まってくる。どんな不思議な力を使うのか知らないが、そうやって餌を探すのだ。砂の上にいる限り、彼らの追跡を逃れることはできない。

「機体を捨てろ！ 岩の上まで走れ！」

ジェノは叫んで、また鯨どもを撃った。

声が聞こえないのか、青年はまだ、ブリキ缶のノズルを機体の脇腹に突っこんでいた。

旧世紀エンジンを改造して作った舟だろう。個人がおいそれと持てる物ではないが、命のほう、ずつと大事なはずだ。

「ザード！」

ハッチを開けて怒鳴っていた男が、拳銃で砂を撃った。

そして竜の姿を認めると、驚きの叫びを上げた。

ジェノはぎりぎりまで近づいて、ハッチの男を指さして叫んだ。

「逃げる！ 出るんだ！」

男はジェノを見つめた。信じられないという顔をして、ぽかんと口を開けた。

しかし、それも一瞬のことだ。

「ザード！ 乗れ！」

脱出する気はないらしい。

ハッチを全開にして身を乗り出し、脇腹にしがみついている青年に手を伸ばした。

ブリキ缶のノズルから、何かの液体がエンジン内部に噴射された。

缶を拳銃の男に渡すと、青年はエンジンの穴を閉め、覆いを戻しはじめた。

その背中を、鯨が狙う。

（バカ！）

ジェノは心の中で、彼らを罵った。

鯨どもが飛び跳ねてくるので、ジェノたちもあまり低くは飛べない。

もっと近づかなければ、狙いも甘くなる。間違えて青年をかすってしまうかもしれない。

鯨が跳ねた。

長いヒレを躍らせて、竜に飛びつこうとする。

走地艇の周囲を飛び回る竜の影を追って、ヒレたちが砂の上でうろうろとしていた。近づいて、そのヒレをジェノは片端から撃った。

「アー！」

青年が叫んだ。

ハッチの上を飛び越えて、鯨が彼らに跳びかかる場所だった。

（くそっ！）

自分の周りに精一杯で、ジェノの反応が一瞬遅れた。

（しまった！）

ハッチの中年男が振り向いて、悲鳴を上げた。

血が飛び散った。

「ハッ！」

砂に落ちたのは、影鯨の方だった。

青年の投げたスパナが、鯨の柔らかい喉元に命中したのだ。

男は青年を引き上げた。

彼らに飛びかかる鯨どもを、ジェノは撃ち続けた。

男たちは何があっても、機体を捨てる気はないらしい。

拳銃の男は、ジェノにすばやく敬礼をすると、潜りこんでハッチを閉じた。

突然、エンジンが起動した。

六本の脚が、がりがりとして砂を巻き上げて、機体の脇腹から眩しい光が漏れた。

（無茶だ、そんなに出力を上げたら……）

オーバーヒートを覚悟で、砂から体を起こすつもりなのだ。

動き出した前脚に、一匹の鯨が踏み潰された。ぎぎつ、という断末魔が上がる。

そして、全ての脚が浮きあがった。つんのめるようにして、一本ずつ岩の上に引き上げていく。

鯨たちがさつと機体を離れ、砂地の影の中へと隠れた。

「ざまあみやがれ！」

ハッチが再び開いた。さっきの拳銃の男は、今度は二連発式のボウガンを構えていた。

影の中を狙って、彼は撃った。鯨たちが、あわてて逃げていった。

走地艇の脚が、完全に逃れ出た。出力をやや落として、砂を振り払う。

後ろに積んだ青ガラスの束が、ぶるつと震えた。

「ザード！ 何を怖がってるんだ、はは、竜だ、竜だぞ！ 神さんのお使いが、俺たちを助けてく

れた！」

（もう、いいかな）

ジェノは竜の首を軽く叩いて、小さく礼を言った。長居は無用だ。

銃をおさめ、遠くの塩湖を見やって、その場から飛び去ろうとした。

「待てよ、降りていってくれ！」

男が叫ぶ。

いっぽう青年は、引つ張り上げられてから初めて、竜の存在に気がついたらしい。取り乱し、言葉にならない声で悲鳴を上げている。

「ああ！ う、うう……」

男が手を振って、竜を招いている。

「待ってくれ、せめて話だけでも、していつてくれよ！」

ジェノは無視することにした。

彼らが持っているはずの食料と水は魅力的だったが、面倒に関わってはたまらない。

「ゲノ！ ゲノ！！カミロ！」

ジェノはぎくりとして、振り返った。

「ゲノ！ お前、ゲノだろ！ 生きてたんだな！」

Gをそのまま発音するのは、東の言葉の特徴だ。

「どうして……」

男の歳は、見たところ四十歳くらいか。

ジェノにはまるで、見覚えがなかった。

(三)

青空から、白い点が近づいてくる。

見上げる青年が腕を大きく振ると、点はやがて白い翼の姿に変わって、ゆつくりと旋回しながら、三人のいる高台へと舞い降りてきた。

「オルター！」

でつぷりと肥った女が、大きな声で叫んだ。

顎の下や手足に、ガラスの玉飾りを何重にも巻きつけている。顔と手首の刺青が、彼女が虫追いの呪術師だということを示していた。

「おばさん！」

アルボから跳び下りて、オルタは中年女に抱きついた。

肥った女の巨大な腕が、銀色の髪をくしゃくしゃと撫でる。

くるりと振り向いて、オルタが笑った。

「ハ、ハ、ハ。なんだお前、その顔」

青年が、無然とした顔で突っ立っている。

顔中に、攻性生物の緑色の体液が塗りとくられていた。

服から出ている腕や首も、すべて真緑に染まっている。

「あたしが塗ってやったんだ」
女が言った。

「久々に、若い男の肌に触れるのはいいもんだね」

「勘弁してくれ。おい、オルタ」

オルタが、けらけらと笑った。

「似合ってるぞ、エレム」

「ふざけるな」

ワームに餌をやっていた、虫追いの少年が、それを聞いて言った。

「アハハハ、我慢しな、兄ちゃん。こいつはハマ・ハマとは違って、若いから気性が荒い。そのままじゃ食いつかれちゃう」

オルタが、きよろきよろと見回して言った。

「エレム、先生とあいつは？」

「……ああ」

エレムと呼ばれた青年は、ポケットに手を突っこむと、何やらごそごそと探りはじめた。
彼に代わって、虫追いの少年が言った。

「うちのおやじが先に、里に連れてったんだ。男の子の方が風邪気味だね」
「そうか」

「ほら、オルタ。預かりもんだ。返すぞ」

エラムが、オルタの手に首飾りを渡した。

細い銀の鎖の先に、白く尖った石が揺れている。

「ありがとう」

オルタはそれを受け取って首にかけ、上着との間に落としこんだ。

女が言った。

「竜の牙があつたからね。すぐに、あんた本人からの頼みだとわかつた」

「うん、ありがとう。おばさん」

舞い降りたはずのアルボは、そのまま人々の中に入らずに、座りこんで横を向いている。

女がそれを見て、言った。

「どうしたのさ、あの子は。拗ねてるみたいじゃないか」

オルタが首を振った。

「さっき叱つたんだ」

「なんで？」

「戻って、助けに行こうだの何だの。できるわけがない」

肥った女が、急に真面目な顔つきになった。

「オルタ、おいで」

オルタはアルボの背中から荷物を地面に下ろすと、女の胸に抱きついて顔を埋めた。玉飾りを巻きつけた太い腕で、彼女はオルタの肩を抱きとめた。

「帝国の連中が騒いでいたよ」

オルタがうなずいた。

アルボはちらちらと横目で二人を見やっていたが、また、ぷいと横を向いてしまった。

「あの子、わかってないんだ。本物の竜の怖さを」

眉を寄せ、オルタは口を尖らせた。

「あの扉はもう二度と開かないし、私は、フネを送ってやれない」

「送る？」

「光の道の、一番奥の扉へさ。私だけでは、無理だ」

オルタは女の胸から顔を離し、小さく首を振った。

「奴らは、さいはてに向かつてる。いなくなった友達みんなを、甦らせる気でいるんだ。たぶん、

シエルクーフや、塔たちも……」

中年女が、オルタの頬を撫でながら言った。

「それで……、オルタ、あんたはどうするの？」

「放っておくさ。奴らだって、扉を開くには力不足だから。でも、ラドーと帝国の馬鹿どもの頭を冷やす程度には、ちょうどいいんじゃないのかな？」

エレムが口を挟んだ。

「馬鹿ども？」

「起こしたのは奴らだ。些細な代償だね。それで戦が終わると思えば安いもんだろ」

「俺の前で言つていいことと、悪いことがあるぞ」

オルタは鼻に皺を寄せ、ニヤニヤと、横目で彼を見つめた。

「ふふん。裸足で追い出されても、故郷^{ラドー}は美しいってわけだ、エレムⅡエⅡラドー」

エレムが鋭く舌打ちをした。

「ラドー？ あんた、ラドーの出か」

少年が声を上げた。

「どうりで、菓屋のクセに、用心棒まがいの銃を提げてると思つた」

オルタは腰を曲げて荷物を拾い、中身を広げはじめた。

「私だつて、できるだけのことはしたよ」

エレムが不機嫌な声で返した。

「何をだ」

「戦いの準備をね、させた。うちに来たときは、どうしようもなくボロボロだったから」

「……別荘に？ 湖の？」

「南の訛りがあつたな。十五か、十六ぐらいで」

中年女が眉を寄せて、腕を組んだ。

「やっぱり、若いねえ」

「うん……、でも、戦つてもらう。フネを帰してやれない限りは」

オルタは手を動かしながら表情を変えず、抑揚のない声で言つた。

「潰し合ってもらうしか、ないんだ」

アルボは低くうなつて、とうとう背を向けてしまった。

「おこるな、おこるな」

少年が寄っていつて、柔らかい草で喉を撫でてやる。

オルタは鞆の中から、粗末な麻袋を取り出した。

「エレム、中部の分だ」

「見せてくれ」

青年が、急に商売用の顔に変わった。

袋を開けると、^{トビクマイシ}鳶霊石の青い光が、いくつもこぼれた。

「でかいな」

「卸先が急かしてる。次に落ち合うときまでに、できるか？」

「手持ちの装置だけじゃ、間に合わないかもな。ま、揃えられれば、できる」

「モボつていう男がいる。そいつに頼めば、ひととおりの道具は何とかなるはずだ」

「わかった」

「あんまり、あてにしないのがいいよ」

虫追いの少年が、のんびりとアルボに寄りかかって、あくびをしながら言った。

「モボは力カラにつきつきり。今は何を言っても上の空だもの」

オルタが振り返った。

「え、そろそろ？」

「モボはさ、今度こそ女の子だって」

「じゃ、逆だな。あいつの予想が当たったためしはないんだ」

「まあね」

「それで？ その、メッカニア熱の特効薬とやらを作っている間、薬屋さんたちを守ってあげればいいんだろ？」

「お願い、お礼はするから。ゴタゴタで憲兵の押さえが効かなくなってるんだ」
「確かに、このごろは物騒だからね」

「おとし以来、砂塵熱が増えててな。需要が供給を上回りすぎなのさ」

「エレムが、包帯を巻いた左腿を軽く叩いて、言った。

「おかげで、ケガにも金にも事欠かない」

「……うん、それならちょうどいい時期だよな、オルタ」

空を見上げながら、虫追いの少年がごろりと寝返りを打った。

「いまは〈大きい母さん〉が卵を持つてるしさ」

青年が聞き返す。

「〈大きい〉……なんだって？」

「停まる季節なんだ、しばらくは。工作中、揺れなくなつてすむ」
「揺れる？」

不審そうに、エレムはオルタの顔を見た。

オルタと中年女が、顔を見合わせてニヤリと笑った。

「行けば、わかる」

「はあ……」

「そうだ、エレム」

「何だ」

「おまえの双子から。先週、郵便屋から預かったんだ」

オルタは鞆を開けると、茶色の封筒を青年に渡した。

「あ……」

封筒を開いて、薬屋のいかつい顔が、みるみるうちにほころんでいく。

「トビタマの季節が終わったら、会えるよ」

「ああ」

「そのついでに、ブリーダーから馬を引き取ろう。それで、例の件はチャラだ」

「仕方ないな」

「薬の出来が良けりゃ、土産代くらいは上乘せしてやるさ……、さて、先生たちにもよろしく」

オルタは鞆を腰に巻くと、足元の荷物を指さして、中年女に手招きをした。

「これ、みんなに」

「寄っていかないのかい？」

女が尋ねた。

「飛んでいけば、すぐそこだよ」

オルタは首を振った。

「急がないと、リ・ヴィスでの巢立ちに間に合わなくなるから」

「そうかい……」

アルボはむつつきりとしていたが、立ち上がって、翼を広げた。

少年はアルボのそばから離れ、オルタを責めるような口ぶりで言った。

「なんで、みんなと一緒に暮らさないのさ？ 俺たちは家族だって言ってただろ」

オルタはゴーグルをつけた。

「村や街は、どうも性に合わない。それだけなんだ、嫌いなわけじゃなくって」

少年が口を尖らせた。

「忘れるな、モボも力カラたちも、あんたを待っているんだから」

オルタはアルボの翼を撫でた。

「忘れないよ、忘れるもんか……。みんな、大好きだ。また、すぐに会える」

そう言うのと、白い翼は助走をつけて飛び去り、振り返らずに消えてしまった。

額に手をかざし、その姿を見送りながら、エレムがつぶやいた。

「ワイカホリック仕事中毒め」

そのかたわらに立って、女が言った。

「……やっぱりあの子は、『人蜂』^{ドロイン}なんだよ」

「おい」

エレムは肥った女を睨みつけた。

「そういう言い方は、よくない」

女は寂しげに、首を振った。

「お前さんが、考えてるような意味じゃないさ……」

「じゃあ、何だって言うんだ」

「あの子は運^こぶんだ。世界の種や花粉を。それは言葉どおりの意味じゃなくても……、運^かぶんだよ。此方^{こなた}から、彼方^{かなた}へ」

「？」

「その生き方を、選んだんだね。光の道を通って、たまには別の世界へと出て」

「わけがわからん」

エレムは首をかしげ、胸のポケットから噛みタバコを取り出すと、それを口に含んだ。

「虫乗りは、いつもそんなことばかり考えているのか？」

「たとえあたしたちの世界が減びちまった後でも、あの子が運んだかけらは必ず、どこか別の世界で芽を吹くはずだ。そうやって……。少しずつ、何かを変えていくんだろう」

呪術師は玉飾りのついた太い腕を、ぐいと胸に組んだ。

空を見上げる。

雲が湧いてきていた。

「生きてる限り、使命に終わりは無い。何がいいことで、何が悪いことなのか、あたしにもあの子にも、わかりやしないんだけどさ」

(四)

焚き火が明るくはぜている。

あたりの大気はしんと冷えて、月の光が強かった。

「〈中南〉の連中なら、心配しなくてもだいじょうぶだ。早くに避難が終わったらしい」

「そうですか」

少年は表情を変えなかった。

が、その言葉を聞いた瞬間に、彼の全身を包むこわばりが取れたことには、隣に座った男も気がついたようだった。

「神さまも、むごいばかりじゃないんだな。こうやって、とうの昔にいなかった奴の息子が、ひょっこり生きてくれたりしてな。しかも、竜と一緒に出てくるなんて」

「……」

「本人だと、思っちゃったよ。馬鹿だよなあ、あれから何年経ったか知れないのに」

走地艇の風下に天幕を張って、ジェノたちはその下に座りこんでいた。

青年は天幕の端で、荷物に隠れるようにして、恐る恐るこちらを見ている。

年齢は、よくわからない。二十代の後半だとは思う。顔つきに、どこか幼いところがあった。

「食いなよ、ゲノ」

鮫肉と干し果物を鉄串に刺して、刻んだ青ガラシを細かくかけてある。いい匂いがした。

「あの」

ジェノは串を受け取ると、立ち上がって青年の方に歩いた。肉から白い湯気が立つ。

「一緒に、火に当たったほうが……」

「ウー！」

青年が後ずさり、尻餅をついた。

「ザード、怯えるなよ。俺の友達の息子だったんだ。竜だつて、気のいい奴みたいだぜ」

男が立ち上がって、竜の鼻先をぺしぺしと軽く叩いた。

竜が頭を振って、軽くなつた。

青年が悲鳴を上げる。

「ウア！」

そうして、走地艇の裏に走っていつてしまった。

「じきに戻ってくる。変な奴だと、思わないでくれ」

男がジェノに声をかけた。

「口が利けないんだ、ザードは。まあいろいろあつたらしいんだが」

「砂漠……？」

「ザード・アラド
アラド砂漠で、エンジンと一緒に拾った。本名は教えてくれなくてね」

「アラド砂漠？」

本でしか、その地名は知らない。ジェノは焚き火に戻って、肉の串にかぶりついた。

男はジェノのその姿を、しみじみと見つめていた。

「立ち居振る舞いまで、見事にそっくりだ。よく生きてたもんだなあ……」

ジェノは何となく、気恥ずかしかった。

「父の……、僕は、父の名前も知らなかったんです」

「彼女が、そう付けたんだ」

「末裔……、地を往く……。僕に、父と同じ名前を？」

「所帯を持ったばかりで気負ってたんだろう。よせばいいのに、遺跡の盗掘に手を出して、帝国軍にひっぱられちまって」

男が目をこすった。

青ガラシを扱った指で、それは少々困ったことになったのだろう。

あわてて、彼は水袋を取り、顔と指を拭きはじめた。

「あのころ、国境から、女たちがたくさん南へ行った」

「……」

ジェノは肉の串から顔を上げた。心臓が、どきりと波打った。

「帝国の発掘隊が入ってな、本国から金が流れてくるってことになって、いろいろあった」

「ただの、ド田舎なのに」

ジェノは吐き出すようにつぶやいた。

「そいつは君の考えようだ」

男が、漬物瓶の蓋を開けた。

「南部の中では、ハルサほど我関せずじゃあないし、ラドーほどおっかなくはない。都市連合から外れているから、気も楽だし……。俺の妹も行った。相手がいい奴だったんで、今は幸せにしてる」

ジェノは何も言わずに、熱い干し果物を口の中に放りこんで、種ごとがりがりと噛んだ。

(……だけど、全員が全員、そうだったわけじゃあないでしょう)

胸の中は、もやもやとしていた。

何か、言い足りないことがある。考え足りないところがある。

(……お前たちは必要とされていなかったんだよ、誰からも……)

魔女オルタの言葉が、あの嘲笑うような口調とともに、ジェノの脳裏に甦ってきた。

「きれいな人だったなあ、彼女は……。元気にしているのか？」

ジェノは無表情で、種を飲み下した。

「死にました。何年も前に」

「そうか」

男が目を伏せた。顔の皺が、黒く深い影を作った。

「なら、君を立派に育ててくれた人に、感謝しなくてはいけないな」

「……」

夜風は冷たい。ジェノは膝を抱えた。

「漬物は？ 野菜を食わなくては駄目だ。力がつかない」

「父は」

「え？」

「帝国軍に捕らえられた後、どうなったんですか？ それは僕が生まれる……」

「君が生まれる、前のことだ。彼は戻ってこなかった」

男は火箸を取って、焚き火の灰を掻いた。

重苦しい沈黙が、少年と男のまわりを包んだ。

「ウアッ！」

ジェノは振り向いて、顔を上げた。

青年が立っていた。

その顔は恐怖で青ざめていたが、灰色の目には、強い意志の光が宿っていた。口を引き結んで、手には黒い石版をつかんでいる。

青年が、ポケットから白墨を出した。

焚き火のそばにどっかりと座りこみ、ジェノと竜とを、かわるがわるにじろじろと見る。カツカツと音を立てて、石版に文字が書かれていった。

(あなたは文字が読めますか)

ジェノは目を丸くして、青年を見た。青年はジェノを見てうなずくと、また、書いた。

(あなたが文字を読めるのなら、少し、お話ししてもいいですか)

男はそれを見ながら、漬物をかじっている。

「字、読めるか？ なんなら、俺が通訳しようか？」

「……いいえ、だいじょうぶです。帝国綴りも読めます」

ジェノは言った。

青年の顔から、青白さが消えた。そうして、満面の笑みを浮かべた。

(私の故郷である帝国では、竜は破滅の主、〈翼ある死〉だと言われています。しかし、辺境では違いました。そこにいる私の師匠は、竜は神様だなどといいます。それで私は……)

青年がものすごい速さで文字を書いていくので、ジェノは焦った。小さな、けして丁寧とは言えない筆記体だ。しかも、ジェノが読むそばから、指で消していつてしまふ。

「待って、もつとゆっくり書いてください」

青年がうなずいた。うなずきはしたが、その速さをいつこうに緩ませようとはしない。

「ああ、止まらんぞこれは」

男が呆れたようにつぶやいた。

「そいつ……、すさまじいお喋りなんだ」

青年は続けていろいろと書いたようだったが、ジェノの目は追いきれなかった。かろうじて、次のところで、ジェノの目が止まった。

（アラド砂漠で、私は竜を見ました。十数年前のことです）

「待って！」

青年が、手を止めた。

「それは、もしかして……、竜の魔女の？」

中年男が、ちらりとザードを見た。

「撃ち落されたんだってな」

ザードは首を振った。

（竜に撃ち落されたのだとしたら、今頃生きてはいません）

「え？」

青年はニヤリと笑った。

（私は賭けに勝ちました）

ジェノはげげんな顔をして、青年を見た。

「……それ、どういうことなんです？」

青年はただ、満足そうにうなずいているだけだ。ジェノの言葉が聞こえていることは間違いないが、どうも自分が話すことの方にしか、気持ちが向いていないらしい。

(純粹に知的好奇心からお尋ねします。竜に乗るのは、どんな気分ですか。彼はどこから来たのですか。性質は狂暴ですか。何を食べるのですか。あなたの言うことを、聞いてくれますか……)

「ま、待つて、待つて！」

それからしばらく、ジェノは細かな説明に追われた。

一つ答えれば、それを受けた次の質問は、三つに増えている。

ジェノの話を聞くたびに、青年は大きく首を振ってうなずき、胸から出した小さな手帳に書き付けていくのだった。ページが細かいペン文字で、びっしりと埋め尽くされていく。ジェノは気圧されたようになって、それを見ていた。

小さい声で、男に聞いてみる。

「この人、いつもこうなんですか」

中年男が、黙ってうなずいた。その顔はすでに、何かを諦め果てたという風情だ。

「飛行機が落ちたときに、頭まで打ったらしい」

「ウウ！」

聞こえているぞ、と青年がうなった。

一時間ほど喋りつくしたろうか。青年からの質問が一段落したところを見計らって、ジェノは尋ねてみた。

「今度は、僕から聞いてもいいですね」

青年がうなずいた。

突然、竜があくびをしたので、青年はびっくりと震えた。やはり、怖いらしい。

「あなたは……、竜と戦った部隊の、生き残りなんですか」

青年は額の前で手を組んで、祈るようなしぐさをした。

組んだ手をほどくと、打って変わってゆつくりと、石版に書きつけはじめた。

（みな、死ぬことを定められていました。諦めていました）

ジェノははつと顔を上げた。青年の眉と目尻には、悲しげな皺が寄っていた。

（むしろ、私は^{バージ}粛清の生き残りなのです）

「^{バージ}粛清……？」

（アカデミーにいた父は、それにやられました。私が君ぐらいの年齢だった頃です）

ジェノは石版の文字を追う指を、ふと止めた。

（エンジンの勉強を始めたばかりの私も、突然前線に回されました）

ジェノは拳を握った。

なぜか、あの廃村で自分を狙った、戦闘機乗りの少年の顔が浮かんた。

（けれど、私は諦めたくなかった）

「……」

ジェノは黙って、石版だけを見つめていた。

（過去に竜と戦って、無事だった艦隊はありません。君もそうしたように）

「だって、僕は……」

正当防衛だ。お門違いだ。

ジェノは荒々しい声でそう言いかけたが、途中で口をつぐんでしまった。

青年は手を広げて、まあまあという動作をした。

(仕方のないことです。追いこまれれば、人はおのおの、すべきことをするようになる)

ジェノは両足を組み直して、むつつりと、その場にあぐらをかいた。

「……」

(私は賭けをしたのです。残念ながら、最初の実験は中途半端に失敗しましたけれども)

「？」

ジェノはうさんくさそうな目で、青年を見つめた。

なんだって、この帝国人は口の端に笑いを浮かべているのか。

青年が、首のマフラーを取った。喉仏のあるべきところがえぐられて、大きな傷跡になっていた。

何かの破片が刺さったのだろう。氣道が無事だったのは、奇跡に近い。

(いずれ、もっと安定化させてから、商品にしたい)

「はあ？」

青年が立ち上がって、軽やかなステップを踏みながら、荷物のそばへと行った。

そこから、何個ものブリキ缶を抱えて戻ってきた。

(問題は、ある種の電解質の配合と毒素なのです)

わけがわからない。

ジェノが中年男を見やると、ボウガンの矢を揃えながら、彼は苦い顔をしていた。

「一台しかないのに、やたらと実験をしやがる。その度、砂に嵌ったり、エンストしたり、暴走したり」

（けれども、一番骨が折れたのは、相棒の説得です）

ますます、わけがわからない。

青年が、青いペンキで印をされたブリキ缶を、からからと振った。

「さつき、それをエンジンに注してましたね」

ジェノが言うと、青年はまた、石版にカリカリと書いた。

（これは出力上昇、起始回生。しかし、使いすぎるとエンジンが死にます）

「じゃあ、ほかのも？」

青年は嬉しそうにうなずいた。

白い印の缶を指さす。

（これは滋養強壮です）

赤い印の缶を指さす。

（これは眠らせるやつです）

ジェノはただ、呆れて物も言えなかった。

（旧世紀エンジンが、生体的要素を持っているのはご存知でしょう）

「ええ」

ジェノは生返事をした。

(普段は自律して、内部のバランスを保っています。そこへ、ある種の異物を加えてやる)
(……)

ジェノはブリキの缶を取り上げ、何かに思い当たって、凍りついた。

(異物は生体エンジンジンの代謝に取りこまれます。これを逆手にとって……)

「詳しく教えてください」

ジェノの声は、低く、かすれていた。

(ある時間が経過した時点で、軽いエンジントラブルを発生させることもできます)

「なんで……」

(家族に迷惑をかけたくなかった。私は自分が、死んだことにしたかった)

「そんな原始的な方法、うまくいく保証があるんですか」

(経験と、勘と、最後は天運です。天は私を愛してくれた)

青年は得意そうに、えぐれた喉をぽんと叩いてみせた。

「でたらめだ」

ジェノの声には、力がなかった。

(当時は工具の錆を、相棒の胃薬のオブラートにくるんで使いました)

ジェノはしばらく、ぴくりとも動かなかった。

「どうした、ゲノ。いいかげん、相手するのも疲れたか？」

「僕が……」

青年が、心配そうな顔でジェノの肩を支えた。石版を見せる。

（気分が、よくないのですか？）

ジェノはうわごとのようにつぶやいた。

「僕が、殺したっていうのか……」

「なんだって？」

「何でもない、何も……」

竜が、寝息を立てている。

ジェノは頭を押さえ、背中からゆっくりと地面に転がった。

クロン……！

「ああ、そろそろ寝たほうがいい。いくら字を知ってる奴だって、お前のお喋りを延々と読まされれば、頭痛がするさ」

「アア……」

ザードが毛織のマントを持ってきて、ジェノの上にかけてくれた。暖かった。

ジェノは必死に目をつぶった。

眠るんだ。

眠ってしまえ。

眠るのはいい。

他の全ては、やがて苦痛に変わる。

(五)

オルタは回廊にいた。

《光の道》という者もいる。《世界回路》という者もいる。

世界の全ての謎が詰まっているのだと、かつてシーカーの長老は言っていた。

だが、オルタは知っていた。人間の中でただ一人、この門番である彼女は。

ここは入り口に過ぎない。そして、ここを支配するのは虚無だ。

行き交う情報の中身はといえば、まるでがらくただ。三文詩人の手箱の中身のように、放りこまれて忘れ去られるだけの。

あの六枚羽の竜も、ここを移動に使うことができるのかもしれない。

けれど今まで、回廊の中で彼らとすれ違うことはなかった。

きっと、互いに使えない道が、いくつも存在しているのだろう。

(仕方がないんだよ、アルボ)

まっすぐ行けば、そのままり・ヴィス地方の門へと抜ける。世界には、虚無への穴が無数に開いているのだ。

（捕らわれちゃいけない。私たちは、もう使命から解放されているんだから……）

眩しい光が、彼女たちのすぐそばを通り過ぎていった。

ふと、イエリコの街の灯りが見えたような気がする。

誰かが、自分を呼んでいるような気がする。

何もかもが、ただのまやかしだということを、彼女はよく知っていた。

幻想は人の心を甘く捕らえる。箱の中におびき寄せ、閉じこめて食らう気なのだ。さも、胸躍る謎のあるようなふりをしながら、実際はまったくの空っぽで。

心を許せば、世界の餌食にされるだろう。

一瞬、巨大な船へと乗りこむ、長い列が見えた。

一瞬、大きな会議場の中心に立つて、拳を振るって叫ぶ男の姿が見えた。

自分がその聴衆の中に、混じっているような錯覚さえ起こる。

聴衆の三分の二は熱い目をして、残りは醒めた目をしていた。

オルタは知っていた。醒めた目の人々は、これから肅清に遭う。

どちらが愚かで、どちらが賢いか……。そういう問題ではない。

壇上で叫ぶ男も、いずれは幻想に食われ、己の世界の餌にされるのだろう。

彼らはそれを楽しんでいる。彼らには、それが現実なのだ。

泣き、喜び、己の信念を語ることのできる、夢うつつの日々を愛している……。

(行こう、アルボ)

オルタの意識はアルボとともに、その会議場を離れた。

自分が見たものの意味をいちいち気に病んで、カカラたちに相談したこともある。

今は、もう何も気にしない。オルタたちは光の中を飛び続ける。

アルボはまた、少し機嫌を損ねたようだった。

(何が出来るって言うの?)

オルタはその首を、優しく撫でた。

(数え切れない世界の全てに乗りこんでいって、『おまえたちはまちがっている』と?)

アルボはぶすりと黙って、ただ、翼を動かしていた。

(行つて、殺して。それで済むなら、どんなに楽だか知れやしない)

そろそろ、出口が近い。

オルタは体を低くして、到着のショックに備えた。

(……?)

行く手に、翼の影がよぎった。

オルタは体を硬くした。

「デュラコーン……」

竜が一頭、誰かを乗せて、こちらへと飛んでくる。

オルタはふつと力を抜いた。いつものことだ。

彼らには、オルタたちが見えない。

衝突しかけたこともあるが、影はこちらの中を、霞のように突き抜けてしまう。

いろいろな竜を見てきた。

石の体を持つ戦士を、乗せていた竜もいた。

帽子をかぶった、幼い少年の姿を見たこともあった。

最初のうちは、好奇心と懐かしさで、彼らの後を尾けてみたこともある。

その結果は大抵、ろくでもないことになるのが常だった。わけのわからない世界に間違っ
て出てしまったり、回廊の中で迷子になって、飢え死にしかけたり。

呪術師は彼らを〈死者〉たちだろうと言った。輪廻からはじき出されて、行き場もなく、ぐるぐ
ると回っているのだ、と。

（手を触れてはいけない。声に答えてもいけないよ、オルタ。連れて行かれるからね……）

竜と乗り手の影は、ぐんぐんとこちらに近づいてくる。

見たことのない少年だった。

アルボはその影を少し避けて、竜たちは互いの体を通り抜けた。

いつもと違ったのは、ここからだ。

風もないのに、オルタのコートがひるがえった。

すれ違った瞬間、少年が振り向いて、叫んだ。

「……アゼル!？」

彼女も、振り向いた。

振り向いて、腕を伸ばした。

少年が、手を差し出した。

彼女は大きく目を見開いた。そこから、涙がこぼれた。

指先が触れた。

「エッジ……」

(六)

いったい何年の間、あなたを探し続けただろう。

地すべりや旱魃で死に絶えた村を、いくつも通り過ぎたわ。

遺跡の白い子供たちは、もう守るものがない場所で、ひっそりと暮らし続けていた。

うきうきしているキャラバンにも会った。攻性生物が去った湖のほとりに、これから街を作るん

だつて。

滅びた村、生まれた村。

あの出来事の後、どちらが多かったのか、わたしにはわからない。

あの人たちも、遺跡に取り残された、かわいそうな子供たちも……。

わたしたちが変えてしまったこの星の運命を、何も知らないまま引き受けて、生きていかなければならないの。その道を選ぶことさえできず、あの日から、世界が永遠に変わってしまったことにも気づかずに。

こわかった。

こわくて、たまらなかった。

あのひとや、アトルムなら、どう考えたかしら。

会いたかった。ずっと……。

あなたを連れ戻せたとしても、きつと、わたしとあなたは……。

同じ道を、一緒に歩むことは、できなかつたでしょう。

ねえ？

わたしを、罪深いと思う？

この星と彼方との接続に、止めを刺さなかつたこと。

わたしは知っていた。この世界を必要としているのは、あなたたちだけではないことを。

何千年も昔に枯渇してしまったはずの、惑星の力。

ゆるやかに滅びゆく大地を、永らえさせていたのは、彼方の光……。きつと、あの白い子供たちにとつても、アトルムにとつても……。

暗闇から目覚め、生を得たことは……、幸福と、呼んでもよかったはず。それが、つかのまの、血塗られた日々であつたとしても。

何がいいことで、何が悪いことなのか、わたしにはよくわからない。

わたしの選んだことが正しかつたのかどうか、今でも、それはわからないまま。本当のことは、世界と生命の数だけ、無数にあるのだと思うわ。

けれど、わたしにしかわからないことは、わたしが、しなければならなかった。天と大地の契約を、新しく結び直すこと。

わたしは人蜂^{ドローン}。

竜の来た世界と、この世界とを、媒介^{なかだち}するもの。

独りにはなりたくない、でも……。

それが……。

わたしがこの世に呼ばれた、本当の、使命だと思つたから……。

わたしが殺した。

竜とあなたを。

作り直せると思った。

失っても、呼び戻せると思った。わたしの力を使えば。

なんて、傲慢な生き物だったのだろう、わたしは。

ごめんなさい、エッジ。

それで、わたしの罪が許されるわけは、ないのだけれど。

ごめんね、オルタ。

わたしは嘘をついていた。

ただ一度だけ、魂のないわたしが、自分自身を欺くために。

夜明けの子。もう一つの卵の中のわたし。

お願い、あの子を助けてあげて……。

あなた……力……、この世界を……ることができはるはず……。

輪……魂……を結……。

いつか……。

(……言っただろう？ 必ず帰ってくるって)

(七)

握った死者の手は、温かった。

オルタは死者の顔を見た。

その少年を、どこかで見たことがあるような気がした。しかし、思い出せなかった。死者が口を開いて、何かささやいた。すまない、と言ったのかもしれない。

「連れて行ってやってくれ」

オルタは言った。

死者の竜が、ひととき高く吼えた。

オルタの声が歪み、震えた。

「頼む。お前たちが彼女の、〈翼ある死〉なら……」

あとはもう、嗚咽にしかない。

死者は屈託のない笑顔で笑った。

少なくとも、オルタにはそう見えた。

少年は赤毛だった。とりたてて、何の変哲もない顔だった。

(お前は、誰だ……)

私には、わからない。

回路を包む光の束が、旋回して膨れ上がった。
眩しすぎる。そしてオルタの目には、何も見えなくなってしまった。

(八)

ジェノは瓦礫の中を全力で走った。

その村に、名前はなかった。

かつては、それぞれの名前があったのだという。しかし、あまりに土着信仰の影響を受けていて反帝國的だというので、ある日突然変えられたのだ。

古き名が子供たちに知らされることは、なかった。

聖堂に彫り付けられたものは、憲兵が削り取って行った。老いくたびれた神官は、拷問を恐れておかしくなってしまった。

部族の連帯意識があれば、抵抗もできたのかもしれない。

団結して、最低限の要求を、帝国側に呑ませることも。

けれども、彼らはそうしなかった。

ハルサとラドーに挟まれて、塩の富にも、戦士の勇氣にも恵まれない不毛の地……。

かつての住民たちは、メッカニア大飢饉で大半が死んだ。

あるものは、砂漠と遺跡だけ。帝国の発掘団が落とす金を目当てに集まってきた人々の村。
 〈中南ノ十五―二〉それが、ジェノの故郷だ。

「アルダさん！」

ぼんやりと天幕の隅に座りこんでいた彼女に、ジェノは声をかけた。

避難民のキャンプで、誰もが忙しく立ち働いていた。

「坊ちゃん！」

彼女は泣きだした。

「ジェノ、無事だったんだな！」

幼なじみたちが、ジェノを取り囲んで、抱擁をはじめた。

「みんな生きてる。だいぶ親類を頼って、ばらばらになっちゃったけど」

「どこに行ってたんだよ、ああ……、心配したんだぜ」

「アルダさん、妹さんが呼んでくれてるんだろ？ 行ったほうがいいよ。よかつたら、ジェノも一緒にさ」

アルダ小母さんの妹は、ラドーに近い農場で働いている。話を聞くと、そこは幸いにして戦火を逃れたそうだ。

ジェノは手短かに伝えた。

「僕のことは気にしないで。今は連れがいて、商売してる」

「……」

アルダが目を伏せた。

彼女のその様子に気がつく、幼なじみたちは顔を見合わせて、天幕から出て行つた。

「じゃ、また後でな、ジェノ。いい商売があつたら、俺たちにも紹介してくれ」

天幕の隅に、アルダとジェノは腰を下ろした。

「無事でよかった……。もう、間に合わないと思つていたから」

アルダは何かを抱えていた。それは継父の鞆だ。

「継父^とさんは、いま何してる」

ジェノは聞いた。彼に会うつもりはなかった。

用事が済んだら、すぐに竜のところに戻るつもりだった。

突然、アルダが顔を覆つた。

「ばか、ばかですよ、坊ちゃんは……。遅すぎる、遅すぎるんだ、何もかも……。！」

ジェノの胸にすがりついて、拳で何度も叩いた。

「旦那さまも、大馬鹿だ……。！」

「どうしたの、何があつたんですか！」

ジェノはアルダの肩をつかんで、揺り動かした。

アルダは泣き崩れた。

「戻つてこないのよ！ 行くなつて、何度も止めたのに！」

帝国軍に言われるまま急いで逃げたので、継父はいくつかの書類を、耐火金庫の中に置き忘れて

きた。現金と、徴税の委任状だけは抱えていて、それで何とかなると思ったらしい。だが、帝国軍には、本国への帰還命令が出た。

後ろ盾を失えば、収入は望めない。

彼は、古い債権書の存在を思い出した。

ハルサカラドーへ取り入るだけの金と、とある遺跡周辺の土地の権利書と。

その何枚かさえあれば、帝国軍がいなくなっても、喰っていけるだろうから……。

「アルダさん」

ジェノは言った。

「僕が戻ってこなかったら……、鞆のお金は、あなたにあげます」

「坊ちゃん、ダメです！」

「好きに使ってください！」

ジェノは走り出した。

アルダはその後ろを追いかけて、皆に取り押さえてくれるように叫んだ。

忙しい人々には、その声も耳に入らない。

ジェノは走った。

何かが、胸につかえていた。

確かめて、どうするっていうんだ？

あんな守銭奴は、自業自得だ。どうせ高利のカタに、奪い取った権利書だろう。

「バカ！」

ジェノは罵った。

足が悪いくせに……！ 砂漠をうろうろするから！

駐屯地の下働きを一人雇って、クーリアで行ったのだという。

フネが〈中南〉を通り過ぎたのは、その直後だった。

村の方角から、白い稲妻が光ったという話だった。

（馬鹿野郎……、とんま、くそ爺い！）

（九）

〈門〉から、ふたりはどさりと落ちた。

アルボが、荒い息をしている。

「怪我はないか」

オルタはすばやく立ち上がって、アルボの翼を確かめた。

アルボはオルタの顔を舐めた。

「いいよ。私は平気だから」

オルタはゴーグルを取って、顔を両手で覆った。石の床の上に、膝をついて座りこんだ。

涙が止まらない。

アルボが、心配そうに覗きこんだ。

「私が、死んでしまった……」

オルタはつぶやいた。声が震えていた。

今、彼女は知っていた。

なぜ、自分は死者の名を知っていたのか。

なぜ、自分は辺境の市場で、あの古びた上着に目を留めたのか。半世紀前の値打ち物だ、と店の主人が言った。

すっかりした手織りだから、仕立て直せばまだ着られるよ。

アカデミーの印は取っちゃいな。

オルタは主人の言い値で、それを買った。仕立て直さなかった。

(なぜ……)

あのひとは死に、アトルムも死んだ。

そして、少年と竜は《魂の座》セストレンへと消えた。

《わたし》が、彼らをそこへ送ったのだから。

《わたし》が、彼らを消してしまったのだから……。

そうだ。

《わたし》はもう一度、あの少年に会うことを望んだ。

他の何を犠牲にしても、何千という人々を傷つけてまでも。

世界を飛び回るために、姿と記憶を、大きく変質させることもいとわなかった。

〈わたし〉は、〈私〉を欺いた。

自分の分身を道具として駆り立てるために、いつわりの母子の絆を持ち出して。娘ではない。母ではない。他の誰でもありはしない。

アゼル。わたしの名はアゼル。

オルタ。私の名はオルタ。

わたしは私。

私はあなた。

ペールを取れば、その中には誰もいないのだ。

《魂の座》と〈竜^{デュラゴン}〉が、向かい合う鏡像であるように。

私たちは、一つだった……。

オルタは声を上げて泣いた。

泣くのは、アルボが初めて空を飛んだとき以来だ。

数日経てば、自分はきつと忘れてしまうだろう。

もはや覚えている必要のない、もろもろの記憶を……。それでいいのだ。

私はそれを望んだ。

自分はいかに、彼女を殺したのだから。

「ざまあみろ」

しゃくりあげながら、オルタは小さな声で言った。

言ってみたものの、心の半分穴が開いてしまったようだった。

オルタは泣いた。

ひとしきり泣いてから、オルタは鼻をすすり、アルボの頭を撫でた。

「死んでも、人使いの荒い女だ。どうしろって言うのよ、私だって忙しいのに」

アルボが喉を鳴らし、鼻の先で軽く彼女をつついた。

オルタは少し微笑むと、静かにその首を撫でた。立ち上がって、歩き出す。

「うん。もう、だいじょうぶ」

そして足を止め、今しがた出てきたばかりの〈門〉を振り返った。

オルタと、アルボ。彼らの瞳が、まっすぐに〈門〉を見つめた。

「やあ」

オルタが、誰かに話しかける。

「この間からずっと、感じていたよ」

〈門〉の表面は、相変わらず、青黒いさざなみが立っているばかりだ。

「久しぶりだね、今回は、あのガキにくつついてきたってわけだ」

……今も、見ているんだろう、私たちを。

「ようこそ、……お客さん」

声を落とし、自分自身に言い聞かせるように、オルタは言葉を繋ぐ。

「私たちは確かに、あなたの世界の影かもしれない。退屈しのぎのために造られて、いつでも気ままに描きかえられる、ただの紙屑に過ぎないのかもしれない……」

オルタは顔に手をやった。鼻と目のまわりが、涙で腫れて痛い。

「物語はいつか劣化し、世界は闇へと還る……」

銀色の髪を、飛行帽の中へと押しこむ。

「この世界が、あなたたち自身の世界を映す鏡なのだとしたら……、そっちの世界でも、戦いがあるのか？ 飢える人、苦しむ人がいるのか？」

オルタは静かに笑った。もう、声は震えていない。

「あなたたちの世界も、どこかの影でないなど？」

アルボが、困ったように首を振った。オルタは軽くつま先立って、アルボに何かささやいた。そして、彼女は再び、こちらを見つめる。

「なぜ言える？ あなた自身が、紙屑でないなんて」

魔女は一呼吸置いて、寂しげな笑みを浮かべた。

「自分の意思で選んだはずの道だって、本当は……、誰かの娯楽に、付き合っているだけなのかもしれない」

マスクをつけて、オルタはアルボの背中に駆け上がった。

「誰にもわかりやしない、あなたたちにも、私たちにも！」

アルボが助走し、強く羽ばたく。

振り返って、明るい声でオルタが叫んだ。

「いい旅を！」

(十)

真実など知って、どうするのだという人々がいる。

人間には、それぞれの真実がある。

ある者には美しく見える花が、他の者にとってもそうであるとは限らない。

ならば自分の心にある花を、愛でればいいではないか。

誰が何と言おうと、自分の感じたことこそが、世界の全てなのだから。

竜は力強く羽ばたいて、ジェノを運んだ。

眼下には、白い道が続いていた。

死骸は乾燥が進み、耐えがたい腐臭は、あらかた収まっていた。

(いまさら……)

行つてどうするのだ、と思う。

業つくばりの老人が一人、砂漠に行つて帰らなかった。それだけだ。
ジェノは男を憎んでいた。

他に適切な言葉が見つからないのなら、たぶん、間違つてはいまい。
砂の向こうを見つめて、ジェノの歯が震えだした。

村の中心部には、あの、巨大な掘り鉢ができていた。

記憶にある広場も、若者小屋も、聖堂も。

帝国軍の駐屯地の塀は全て崩れて、瓦礫と廃墟が、その姿を晒していた。
竜が高度を下げた。

降り立ったのは、懐かしい、村へと続く砂利道だ。

ほこりっぽく、石ころだらけの道。

竜の背中から跳び下りて、ジェノはおそるおそる、その道に立った。
引き返したかった。

見なかったことにして、竜に飛び乗れたかった。

真実など知つてどうする？

突きつけられるのは、残酷な結末だけかもしれない。

(本当に……、ごめんね……、か)

なんで、あのとき彼は、「本当に」などと付け足したのだろう。泣いたことを詫びるだけなら、もう前の晩で用事は済んでいた。

隊長と何があったのか、クロンが何を考えていたのか、キュプロはどう動いたのか。今ではもう、何もわからない。

(死んでいたのは、僕だったのかもしれない)

ジェノが、もう少しいいかげんな性格で、金や食べ物で釣ることができたなら……。無理をして飛ばうとせずに、すぐに不時着体勢に入っていたのなら……。

二人とも、生き残れたのだろうか？

(僕が殺したのか……、君を)

クロンは博打にゲーム負けた。ジェノは生き残った。

引かされたくじに、たまたま印がついていただけだ。

(……クロン！)

本当に、彼がエンジンに何かをしたのだろうか？

それは隊長に言われて？

それとも、彼が見つけて？

ジェノは拳を握ったまま、目を固くつぶって、砂利道に立ち尽くしていた。

竜が、不思議そうに首をかしげている。

（確証はない！）

彼だって、勇気を振り絞って、飛ぼうとしたのかもしれないじゃないか。

真実のあら捜しなんかして、何の得になるんだ？

目の前には、無残な揃り鉢が口を開けていた。

村の入り口に植えられていた石香樹の幹は、途中からぼきりと折れて、吹き飛んでいた。

ジェノはそこに、炭のようになった何かがかくくりつけられているのを見た。

胃袋に、冷たい針を刺されたような気がした。

クーリアの引き綱だった。

竜が琥珀色の瞳で、ジェノの目を覗きこんだ。

心まで、貫かれるような視線だった。

「……ごめん」

ジェノは竜から目をそらした。

竜の首筋に手を当てて、ジェノはまだ、歩き出すことができなかった。

「デュラコーン
竜」

ジェノは言った。

「本当のことって、どういうことなんだろう」

人はそれぞれの幻想に生きる。昔、そんな本を読んだ。

あの夢の中で、ぶどう棚の下に並べられた木箱の中に暮らしていた人々は……。

みんな、それぞれの幻想に生きているのだろうか。他の世界や他の暮らしがあるなんて、全く思
いもせず、気がつくことさえなしに。

「本当のことを知る、それにはどんな意味があるんだろう」

ニセモノの世界に帰りたくない。シエロはそう言って、飛んだ。

「僕は選ばなかった。この世界のほかには」

竜はジェノの頬に、鼻先をすり寄せた。

「君が、いてくれたからだ。僕は君を信じた」

ジェノは竜の目の下を、軽く搔いた。竜は気持ちよさそうに目を細めた。

「目をつぶれば、それでよかったのかもしれない。母さんがいて、みんながいて。戦争もまだ、始
まっていなくて……」

ジェノは両手で自分の頬を叩いた。

「でも、僕は知りたい」

夢の小箱の奥は、他の世界に繋がっているのだ。自分では完全な世界だと思っても、誰かにとつ
てはそうではない。

何も知らないで、他の世界を侵し、傷つけることさえも……。

それでも、己の心にある美しい花を、ただ愛しさえすればいいと言うのか？

自分の感じたことだけが、本当に世界の全てなのだろうか……？

ジェノは踏み出した。

「僕が、クロンを殺したのかもしれない」

ジェノははつきりと言った。

竜はきよとした顔で、ジェノを見ていた。

「それでなくても、僕は人殺しだ」

火を噴いて落ちていった艦隊、煙。「狙え」と叫んだ瞬間。ジェノは顔を上げた。

二歩、三歩、大股で進んでいく。

ブーツの下で、砂利がざくざくと音を立てた。

「僕はずっと、自分が正しいと思ったことをしてきた。今でも……、たぶん、信じていたいんだろ
う。その半分は、ただの夢かもしれないなかったのに」

竜が、トコトコとジェノの後を追ってきた。

「僕は本当のことが知りたいんだ」

ほこりっぽく、石ころだらけの道。誰かの背の上で揺られていつた記憶。

左へがくりと揺れ、また右に揺れ、温かい背中と、まどろみがジェノを包んでいた。

今、ジェノの頭は揺れもしないし、足はしっかりと、まっすぐに進んでいる。

あれは本当に、僕の、本当の父さんだったのだろうか……。

(……君が生まれる、前のことだ。彼は戻ってこなかった……)

ゲノは死んでいた。僕が生まれる前に。

じゃあ、あの背中は……？

ジェノは村の入りに立った。

全てが失われていた。

ジェノの家も、跡形もなかった。

ただ石の基礎と、庭の井戸の跡だけが残されていた。

ジェノは廃墟を歩いた。

竜も、その横と一緒に歩いてくれた。

あの雷撃に、老人が一人吹き飛ばされたとしても、跡形も残らなかっただろう。

帝国軍の居住地の前に立った。

村はずれにあつた帝国軍の居住地は、雷の直撃を免れていた。

今はもう、もののしい銃を構えた門番も立ってはいない。

ジェノは曲がつた鉄の柵を踏み越えて、中に入った。

足は吸い寄せられるように、中庭に進んだ。

村にいたときは、こんなところまで入ることなんて、夢にも考えられなかった。

中庭には噴水があつた。

噴水の化粧石は砕かれ、ぼろぼろになって、水は完全に干上がっていた。

緑色だったはずの木の枝は、見る陰もなく吹き飛ばされて、ただの木片に変わっていた。

花々は引きちぎれ、かさかさになって地面に倒れていた。

花壇の奥に、ジェノはきらりと光るものを見つけた。

爆風で吹き飛ばされてきたのだろう、それは柔らかい土の中に、半分めりこんでいた。

ジェノは指で土を搔いて、拾い上げた。変形した金属片だった。

「杖の石突きだ」

ジェノは言った。

竜が首を伸ばしてきたので、ジェノは彼にそれを見せた。

ひょいと、竜はジェノの手から石突きを奪った。

ジェノは止めなかった。

浮き彫りがきらきらと光るのが、興味を引いたのだろうか。

竜はそれを太陽の光にかざしては、しきりに首をかき上げて、角度を変えて見ている。

「きれいだろ。帝国の工房まで手紙を送って、特注で作らせていたんだよ」

ジェノは壊れた花壇に座りこんだ。

「バカだよな。金があるなら、もっといい事に使えばよかったんだ」

ジェノは少しだけ、目をつぶった。

体を揺らしながら、足を引きずって歩く継父の姿が浮かんだ。

竜が突然、羽をばたつかせた。

「なんだい？」

ジェノのしている前で、崩れた渡り廊下のほうへ駆けていく。

立ち上がって、ジェノは竜を追いかけた。

渡り廊下のそばには、大理石の花壇が据えられていた。

柱と庭木の陰になって、吹き飛ばされずに済んだのだろう。花壇の中には、枯れ草がそのままの形でしおれていた。竜はその花壇の中に、杖の石突きをぽとりと落とした。

ジェノは花壇を覗きこみ、そして凍りついた。

震える手で、花殻を拾い上げた。

干からびて色褪せてはいたが、その花びらは赤い。

みずみずしかったときには、きつと目も覚めるような色をしていて……。

ジェノの喉から、言葉にならない悲鳴が漏れた。

ぶどう棚の陰にある小さな家で

ここにはもういない貴方と

同じ歌口ずさみ生きていこう、夜が明けたら……

畑に麦を播こう、風が、土を……

凍らせる……前に……

ジェノは何かを叫んだらしかった。

次の瞬間、大理石の花壇を蹴倒した。

花壇は亀裂のところから大きく割れて、地面にどさりと中身を撒いた。

ジェノは中の土を踏みつけ続けた。

竜は一步下がって、悲しそうな目で、じっとその様子を見ていた。

「何だって、僕に同じ名前をつけたんだ！」

怒りの言葉だった。

記憶の中の赤い花は、いつでもみずみずしく、露を置いていた。

帝国人の居住区に呼ばれ、あの男はこの花を見つけた。

（まず、誰に見せようと思った……？）

もう、けして若いとはいえないその男が、軍人の家族に頭を下げて、切花を手に入れた。

そうだ、数日ごとに……。

砂漠にはない、水がなければ生きてはいけない。

弱々しいけれども、鮮やかで美しい花。

母が、静かに歌っていた。

うつむいて、白磁の花瓶を胸に抱き、露を置いた赤い花びらにそつと唇を触れる。

母は……。

……泣いていた。

継父のいるところでは、母は決して、その歌を歌わなかった。

「なら、どこだって歌わなければよかったじゃないか、あんな歌！」
ジェノは花壇を蹴り転がした。

渡り廊下の壁にぶち当たって、花壇はたやすく砕けた。
砕けた白磁の花瓶。拾い集めていた、母の横顔。

「どういつもこいつも！」

土くれの中から、ジェノは杖の石突きを拾い出した。

地面に膝をつき、空に向かって吼えた。

両腕で、土を叩いた。

どうして、気づかなかったんだ、僕は……！

ジェノが彼女に愛されるためには、何の努力もしないでいられた。

ジェノは息子だったから。同じ名前だったから。

彼女は、とても優しかった。

「その分だけ、お前たちは、天に近いのかもしれない」

オルタの言う通りだった。

杖の石突きを握りしめて、ジェノはその場にうずくまった。

(ああ、そうだ……)

僕には、魂が……、
なかった。

十三章 封じられた海

(一)

レーテは砂漠を貫いている。

ジェノは竜に乗ったまま、腕を大きく振って、杖の石突きを河へと投げた。

一瞬、月光にきらりと輝き、それは波間に消えてしまった。

「ありがとう」

流れる水を見下ろして、ジェノは竜に言った。

「寄り道を、させたね」

すでに〈中南〉を過ぎ、ここはもうハルサの内側だ。

途中で何度か、帝国の艦隊や、連合の生き残りに会った。

彼らはしばらく尾けてくるものの、威嚇射撃をすれば、さっさと逃げていってしまう。

岩山と砂漠が、どこまでも続いている。

白い道はまだ、時折気まぐれに迂回しながら、はるかに南を指していた。

〈翼ある死〉……。

ザードの言ったことは、本当なのかもしれない。

行くところすべて、骨と砂ばかりだ。

フネたちも、僕たちも。

しかし、ジェノは竜をいとおしく思うことなど、なかった。

死は嘘をつかない。

死者たちも、嘘をつかない。

生きている人間たちはテーブルの上に彼らを並べて、あれやこれやと議論するだろう。

その数を数えたり、苦しみの程度をはかったりするのだろう。

彼らの存在を言い訳にして、誰かに嘘をつくのだろう。

彼らがいたことにしたり、いなかったことにしたり。

その時々風の向きで、好きなような名で、勝手に彼らと呼ぶのだろう。

死者たちが、二度と喋らないのをいいことに……。

「ねえ、デニラコーン
竜」

彼の首に頬を乗せて、ジェノは言った。

「僕たちは、どこまでも飛べると思うよ」

竜が喉を鳴らした。

白い外殻はさらさらとして、心地よかった。

ジェノは幼い頃に祖母から習った、骨笛のことを思い出していた。

クーリアの脚の骨で作るのだ。普通の土笛や木の笛よりも、少しコツが要る。

うまく鳴らすと、温かみのある、やや乾いた音が出せる。

「飢饉のすぐ後には、人の腿の骨で作ったんだよ。その方が手に入りやすかったから」

祖母はそう言いながら、たてつづけに、明るく滑稽な節の曲を吹いてくれた。

「今の若い人たちは、残酷だって言うのかもしれないね。帝国の人も、そういうのを嫌がるし……。
ずいぶん前に、そうやって作るのは禁じられてしまったけれども」

祖母は懐かしそうに言った。

「禁止令が出たときは、みんな自分の家から骨笛を持って、レーテまで行ったんだ」

「どうして？」

焼き菓子を食べながら、ジェノは尋ねたものだった。

祖母は何度も、その話をする。

それが、ジェノのお気に入りだったからだ。

笛の吹き方を習うたびに、祖母に同じお話をせがむのだ。

「行ってみると、別の村の連中もみんな来ているんだね」

「ふうん？」

「『あんたたち、どうして来たのさ？』『いや、ご法度だって言うから』……」

「それで？ それから？」

「いけすかないラドーの連中も、ぼつぼついるじゃないか。みんな笛を持っているんだ」

「……」

ジェノは次の言葉が待ち遠しくて、祖母の膝の上に乗った。

彼女は笛を構えて、それからひと吹きして、言った。

「みんなで、覚えているかぎりの歌を吹いたのさ。三日かった」

「それから、笛たちはどうなったの？」

「気が済むまで吹いて、喉が枯れたから、みんなでレーテの水を飲んだ……」

「ねえ、笛たちは？」

「河に、流してやった。沈みながらひとりでに鳴っている笛があったって言う奴もいたけど、それは嘘だね。あたしには聞こえなかったし、笛はそんなことはしない」

「笛は、そんなことはしない」

ジェノは最後の言葉が大好きだった。

気が済むまで、何度も楽しそうに繰り返すのだった。

「……笛は、そんなことはしない。笛は……」

祖母は苦笑していた。

「なんなんだろうね、この子は。そんなにいい言葉だとは思わないけれど」

ジェノは頭を起こして、夜の空を見渡した。

大気には、砂埃が混じっていた。

風が強い。

空中の塵のせいで、赤みを帯びた月たちが空にかかっていた。

まるで、血の色のようだ。でも不気味だとは思わなかった。

「……笛は、そんなことはしない」

月たちを見ながら、ジェノはつぶやいた。

砂漠を、黒い小さな列がゆく。塩の隊商だろうか。

どんな戦火が地を焼こうとも、彼らの道までを消すことはできない。

ジェノは知っていた。

だから、万事は彼らに任せておけば、よいのだ。

(二)

ジェノは眠っていた。

河原の光る色石を拾いながら、ジェノは竜と一緒に歩いていた。

水は黒く、深い。

それなのに、底まで見えるほど透き通っている。

手の中に拾い上げた石は、赤や黄色にチカチカとまたたき、まるで空の星のようだ。

「きれいだ……」

誰に見せよう？

見せたら、彼は（彼女は）喜んでくれるだろうか？

ジェノは竜に、光る石たちを見せた。

竜は興味なさそうに首を振って、ジェノに顔をすり寄せた。

再び手の中に目を落とすと、石たちはみんな、白い骨に変わってしまった。

ジェノにはそれが誰の骨なのか、よくわかっていた。

河岸で、骨を洗った。

洗うそばから、骨はきらきらと輝く白い紙片へと変わり、水に乗って流れていった。

ジェノは立ち上がった。手の中には、もう何もない。

黒い河面を見つめて、竜が首をかしげた。

鼻先で、ジェノをつつく。

ジェノも河面を見つめた。

（？）

上流から、細かく千切られた、白い布切れが流されてくるところだった。

「行ってみよう」

ジェノと竜は、黒い流れを遡っていった。

河幅はしだいに細くなり、いつの間にか、小川へと変わった。

たどり着いた場所は、家の庭だった。

黒い水は、あの井戸から流れ出していた。

屋敷は跡形もなく崩れて、わずかに土壁の基礎が残っているだけだった。

木箱の上に、少女が座っていた。

銀色の髪をした子だ。髪はきれいに切りそろえられていて、シーカーの服を着ていた。声を上げて泣きながら、白いベールを千切って、流れに撒き散らしている。

(オルタ……)

どう棚はなぎ倒されて、二本のつるは枯れ、黒い水の中に漂っていた。

「そこを、どいてくれないか」

ジェノは少女に話しかけた。

「僕たちは、その箱を開けなくてはいけないんだ」

少女が顔を上げた。

目の周りは赤く腫れ、涙と鼻水で、顔中がぐしゃぐしゃになっている。

「イヤだ」

少女が叫んだ。

「空っぽに決まってる。デレクの言うとおりで、私には家族なんかいなかったんだから」

ジェノはオルタに近づいていった。

「開けてみなくちゃ、わからないだろう？」

「絶望するだけだ」

少女がぼそりと言った。しわがれた、老婆の声だった。

「お前たち自身が、破滅を選んだのだから。……あの船で」

「どいてくれ」

ジェノは言った。

「そう思うなら、どうして君は、僕に木箱を見せたりしたんだ？」

ジェノは流れに膝をかがめて、水底の骨を彼女に渡した。

「君が、教えてくれたんじゃないか。何にでも本物とニセモノがあるって」
少女は激しく首を振った。

「私には、わからない」

「どいてくれ。破滅だろうと希望だろうと、そんなことはどうだっていい」

ジェノはかたわらに立っている、竜の首を撫でた。

「僕はただ、本当のことが知りたいだけなんだから……」

「ならば選ぶといいわ」

少女は立ち上がった。

「好きに、すればいい」

そして大声で泣きながら、どこかへと去っていった。

ジェノは木箱の蓋に手をかけた。とても重かった。

一人では、開けられそうにない。

竜が、木箱に角を押し当てて、ジェノに力を貸してくれた。

「ありがとう、デユラコーン 竜」

蓋がぱくりと開いた。勢い余って、木箱は流れの中に倒れてしまった。箱の口から、大量の砂があふれだした。

「これは……」

砂の中には、白いものがたくさん混じっていた。

人の骨もある。攻性生物の外殻もある。

スチンデムシ 砂葬虫に食われ、風で碎けて、小さな欠片にまですりへったものだ。

ジェノは言葉を失った。

（そんな……）

砂と骨は、さらさらと黒い水の流れに沈んでいく。とめどなく、いつまでも。

（これが、人間の望んだ世界？）

ジェノは竜にすがつた。

竜は何も言わず、じつと砂を見つめていた。

（僕たちが選んだって言うのか、砂と骨、それだけを……）

やりきれなかった。

涙も、何も出なかった。

長い間、ジェノはそこに立っていたようだ。そのうちに、砂の流れが止まった。

「？」

ジェノは箱の奥を覗き、その場にしゃがみこんだ。竜も、脚をかがめた。箱の奥には、何か黒いものが残されていた。

ジェノは鞆からライトを出して、それを照らした。人の、左手だった。

「あんたは……」

その手は風の動きを感じたのか、ぴくりと動いた。ゆっくりと、ジェノを指さす。

「じゃばるな」

ジェノは言った。

「あなたの銀貨は使ってしまった、もう何もない」

左手には、ジェノの言葉が聞こえているのだろうか。

聞こえるわけがない。だって彼にはもう、耳がないのだ。

それでも、ジェノは言葉を続けた。

「あんたは、とつくに死んだんだ」

左手がひっくり返って、ゆっくりと拳を開いた。

「僕に、何をしてほしいんだ……？」

ジェノはその手のひらに目を凝らした。

緑色に光る、何かの種が握られていた。

(三)

白い道は大塩湖に入っても、まだ、南へと伸びていた。

好塩性の藻類で桃色に染まった水面に、ぼつりぼつりと死骸が浮いている。やがて、ジェノは異変に気づいた。

「羽虫たちだ」

飛行型の攻性生物たちの屍体が、道の中に混じりはじめたのだ。

虹色に輝いていた翅は、砂と埃にさらされて、見る影もなくなっていた。

塩のせいでまだ腐りきらない部分に、たくさんの爪跡がつけられていた。竜の影を見ると、群がる屍肉漁りたちはみんな、焦って水の中へと逃げた。

「力を、使い果たしてしまったんだ……」

忘れていた怒りが、静かに肺の奥を満たす。

竜が、悲しそうに鼻を鳴らした。

(連レテ、行ッテ……)

メデユラで聞いた声が、まだ耳の底にこびりついていそうな気がする。

人は攻性生物を恐れる。帝国やシーカーは、そこにつけこんで武器を売る。

実際のところ、獣たちはツケを負わされているだけなのに。

彼らは、フネと竜とを求めていただけだ。はるか遠くへと、彼らを導いてくれるはずの希望を。

(きつと昔、僕たちの中の誰かが、勝手に決めてしまったんだ)

彼らは帰りたいだけなのに。

彼ら自身の、〈ほんとうの世界〉に……。

(……引き受けて、生きていかなくちやいけない。自分がしたことでないこと、自分が望んだことでないこと。そういうの、全てを……)

ケラドの言葉だ。

ジェノは怒りを抑えることにした。

「……僕を利用しただけじゃ、ないと思うんだ。ケラドだつて」

坑道の中で、彼はジェノに謝った。

君のせいじゃない、とジェノは言った。

あのとき、彼が苦笑いをしていたのを覚えている。

続けて、ケラドは言ったのだ。ジェノと竜を必ず、地上に連れて行くと。

「言ってたね。シーカーの道は、狭くって、暗くって、曲がりくねっていても……。必ず、どこかの空の下に通じてるんだ、つて」

ジェノは湖面を見つめるのをやめた。

見渡せば、四方は大塩湖の水平線に囲まれている。

目の前に、巨大な雲が湧き出してきていた。

メッカニアの南の端には、世界の果てがあるのだという。

じゃあ、さいはての果てには、何があるのだろうか？

吹きつけてくる乾いた南風は、ハルサの巨大な湖に当たって、強い気流を作る。気流は壁となつて、何千年もの間、冒険者たちを阻みつつけてきた。

竜が、ちらりとジェノを振り返った。

「行こう！」

ジェノは叫んだ。

その言葉を待っていたのだろう。竜は嬉しげに、高く鳴いた。

(なんだろう、本当のことって)

ジェノにはわからない。

(……連中が、寄つてたかつて、お前たちを捨てた……)

オルタが言っていたことも、真実には違いない。ジェノにはわかっていた。

巨大な雲と、風の音が迫る。

舌を嚙まないように、ジェノは上下の歯をきっちり合わせた。

人はたやすく、人を捨てる。

遠くの国で誰かが苦しんでいても、隣の町で船が燃えていても。

大人たちが気にしていたのは、いつだって、自分とその家族のことだけだった。

だから、ジェノたちは志願兵になった。捨てられた人々を救うつもりで。

自分たちこそ、捨てられてしまったことには、目を背けつづけて。

風向きが変われば、何もかも、無かったことになるのだろう。

（だけど……）

雲の中で、稲妻が走っているのが見えた。

ジェノは身震いをした。

竜が一声吼えて、渦に突っこんだ。

「デュラコーン
竜！」

風が、竜の翼をもてあそぶ。

四方から吹きつけられて、竜は苦しそうに、くると空を舞った。

「こっちだ！」

竜の首にしがみつきながら、ジェノは南を指さした。

なぜか、どんなに揺り動かされても、その方角だけは見失わなかった。

「怖くなんか、ない！」

ジェノは叫んだ。

竜と、自分を励ます声だ。

突風に吹き消されてしまって、彼に聞こえているのかは怪しいところだったが……。

「進もう、僕たちはずっと……、一緒だ!!」

(四)

晴れ渡っていた。

大地は鏡のように白く輝いて、どこまでも広がっていた。

ジェノは体を起こした。

ジェノを脇腹に巻きこんで、竜は地面にうずくまっていた。

「デュラコーン
竜」

ジェノはささやいた。

竜が首を曲げて、こちらを見つめた。

「ついた、のか……？」

竜もジェノも、まったく無傷のままだった。

立ち上がって振り返ると、ハルサの湖と雲は、影も形も見えなくなっていた。

気を失ったジェノを、竜はどこまで運んでくれたのだろうか？

柔らかく彼の首を撫でて、ジェノはその労をねぎらった。

「ありがとう」

一面、真っ白だった。

ただ、ところどころ遺跡の模様のように、黒い筋が走っていた。

有機的なのか、幾何学的なのか、よくわからない謎のひび割れた。

「さいはての、果て……」

青空と大地の境を阻むものは、ほとんどなかった。

遠く南に、青くかすんだ山脈の影が浮かぶほかには。

（変なの……）

ジェノは首をかしげた。

南から、強い風が吹いてくる。

それなのに、ちつとも寒くはなかった。

現実味のない風景だった。まるで、一枚の白い紙の上に立っているようだ。

ジェノは軽やかに飛び跳ねて、くるくると回りだした。

「あははは！」

竜が、きょとんとジェノを見ている。

「だけど……、僕たちは、生きてる！」

ジェノは回りながら叫んだ。

頭がぐるぐるする。

知っている。回り続けると、どちらが上か下かわからなくなって、最後は地面に倒れてしまうの

だ。幼なじみたちと、何回できるか賭けてみたこともある。

そしていつでも、ジェノは賭けに勝ち続けた。

灰色の翼に乗っていたときでも、竜と一緒に旅した日々でも。

ジェノは白い地面に転がって、けらけらと笑った。

(僕は、生きてる)

何一つ、守れはしなかった。自分と竜の命以外には。

「僕は幸せだ」

ジェノは言った。

「だって、僕たちだけじゃ、ここまで来られなかったじゃないか！」

ジェノはごろごろと転がりながら、明るい声で笑いつづけた。

自分たちはメッカニアのお荷物だった。数ばかり多くて、社会に不満を持っていた。

しかも若いから、よく食べた。

大人たちが始末しようとしたのも、無理のないことじゃない……。

なんて、ばかばかしい話だろう。

「だけど、僕は生きてる」

ジェノは笑った。

竜が起き上がって、ジェノのところまでやってきた。

「どう思う？ デュラゴン 竜」

ジェノは彼を見上げて、言った。

それからバネのように体を曲げて、大きく宙返りをし、地面に立った。

「ケラドや、オルタが助けてくれなければ、僕らは死んでいた」

それだけじゃない。

フリーユーゲの銀貨がなかったら。

あの夢の中で、ベールの女に出会わなかったら。

遺跡の中で、触手虫どもに体をくつつけてもらわなかったら。

パンをくれた女の人たちや、添え木を当ててくれたハンターが、いなかったのならば。

「僕たちは、とても運がいい」

ジェノは高らかに叫ぶと、竜の首に抱きついた。

竜はとまどったように、羽をばたばたと動かした。

きつと、どちらも本当のことなのだろう。

ジェノが、人々の世界から追い出されたということも。

その同じ世界に生きるたくさんの人々が、ジェノと竜を助けてくれたということも。

それはとても、残酷なことだと思った。

そんなややこしくて、ひねくれた世界に戻ったところで、うまく生きられそうにない。

「だから、ここに來ることができた」

ジェノは言った。

「ここは、とてもわかりやすいからね」

鏡のように、平たい世界。

天と地の間は、ただ一本の線で区切られている。

ジェノと竜のほかに、どこにも生命の気配はなかった。

「僕たちは自由だ」

両足はいつしかリズムを叩きはじめ、ジェノは踊りだした。

竜はしばらく、ジェノが馬鹿みたいに明るくステップを踏むのを見つめていた。

そのうちに、自分もやってみたくなったのだろう。

ぎこちなく、竜が踊りだした。

ジェノが右足を前に出せば、竜は向かい合つて、つられて左脚を出す。

何度も続けているうちに、彼にも要領が呑みこめてきたのだろう。ジェノが次に出す足の動きを、

正確に当ててくるようになった。

「すごいぞ、デュラコーン 竜！」

ジェノが感嘆の声を上げた。

こちらの心を読まれているみたいだ。

白い地面に、ふたりの影が踊る。

向かい合う鏡像のように、ジェノと竜は踊りつづけた。

ぐるぐる回っているうちに、自分が竜なのか、竜が自分なのか、わからなくなってくる。

黒いクレバスのところまで、ジェノたちは踊りながら走った。

ようやくと息が切れて、ジェノは笑いながらその場にへたりこんだ。

腹這いになって、ひび割れの底を覗いた。

(……！)

ジェノは笑うのをやめた。

上からクレパスを覗き見て、竜も小さな声を上げた。

白骨化した、巨大な攻性生物の死骸が挟まっていた。

「竜デュラコミア擬……」

遺跡の底で戦った個体よりも、一回り大きい。長い首の骨の先には、頭骨がなかった。

ジェノは竜を見た。

竜もジェノを見た。

なぜ、この死骸がここにあるのか、それはよくわからなかった。

(五)

ジェノは白磁の扉を開けて、中に入った。

何もない、白い部屋だ。

部屋の真ん中に、誰かが座りこんでいた。

その男……、たぶん体格からするに、男なのだろう……は、汚れたマントを頭からかぶり、全身

を覆っていた。うなだれたその顔は、陰になって見えない。

男は、腕に何かを抱いていた。

ジェノは彼のところに歩いていった。

男の腕に抱えられて、マントに沈みこんだ白い塊は、攻性生物の髑髏どくろだった。

髑髏どくろに両目の穴はなく、あの巨体に比べると、ひどく小さなものに見えた。

(竜擬デュラコミアの、骨……)

うつむいて、男は髑髏どくろを撫でていた。

「造ったのは、あなた？」

ジェノは尋ねた。

男はうなずいた。

「わたしが造り、わたしが壊した。けれど、唯一の友だった」

そうしてまた、男は愛しように、髑髏どくろを撫でるのだ。

「造り直そうとしたが、叶あるじわなかった……」

「あなたが、〈世界の主〉？」

男は、静かに首を振った。

「ちがう。わたしには、魂がない」

「魂が？」

男がうなずく。

「なら、僕と同じだ」

ジェノは、男の隣に腰を下ろし、床に目を落とした。

マントの裾から覗いた男の爪先が、黒く焼け焦げているのが見えた。

「……彼女が、死んだ」

男の声はどこか拙く、金属音がまじっているように、かすれていた。

まるで何か別のものが、ヒトの言葉をまねているかのように。

ジェノは視線を落としたまま、言った。

「僕、その人を知っているかもしれない」

「そうか」

髑髏を抱えたまま、男が立ち上がった。

驚くほど、背が高かった。

二、三步、前に歩く。左足が不自由なのだろう。歩くたびに、男の体が揺れた。

「ずっと、思い違いをしていたのだ……。彼女が、世界を裏切ったのだと」

ジェノは男を見上げた。

「半分は、真実だ。だが真実の半分は、常に残される」

「そうだね」

ジェノは言った。

「母さんは、あの人を愛していたのだと思う。僕の父さんと同じぐらいに」

「そう思うか」

「うん。たぶんずっと長い間、僕は逃げていたんだろう」

「わたしも、逃げ出したかった」

「あなたは、なにから？」

「この世界から、物語の外へ」

「……ほんとうの世界に？」

「知っているのか」

「たぶんね」

「頁を閉じ、電源を切る。彼らはそれで終わりだと思っている……。違う」

「電源？」

「わたしには、許せなかった。劣化した物語は……、製造され、消費されるだけだ。何も、生み出しはしない。何も」

「僕には、よくわからない」

「逃げ出せると思った、物語を繋ぐ、彼女の力を使えば」

「ふうん……」

「しかし、どう足掻いても、幻想は幻想に過ぎないのだ」

男が、軽く腕を振った。

マントが落ち、全身が現れた。

「あなたは……」

男の全身は白い外殻に覆われ、ところどころが無残に焼け焦げていた。

左足の先がガラス状に溶解して、千切れるように無くなってしまっていた。

顔の皮の左半分は、強い力で剥ぎ取られ、ぼろぼろに破壊されていた。

そして、本来なら、内臓があるべき部分には……。

ぽっかりと、巨大な穴が開いていた。

男が、左腕をジェノに伸ばした。

ジェノは立ち上がって、その焼け焦げた腕の先に触れた。

それから彼の顔を見上げて、尋ねた。

「さいはての果てへ……、今でも、逃げ続けているんだろうか、僕は？」

「なぜ、そんなことをわたしに聞くのだ」

「逃げたいんじゃない、知りたいんだ。でも、その二つの違いは何なんだろう？」

男は少し考えこんだようだったが、しばらくして言った。

「誰に、責められよう？」

彼はゆっくりと首を振った。頭部に髪はなくて、後ろから鞭のような尾が下がっていた。

「罪なき囚人が、その牢獄から逃れるを」

沈黙が流れた。

やがて、喉の奥から、絞り出すように男が言った。

「……魂をくれ……」

男はジェノの方に腰をかがめ、左腕を、空っぽの胸腔に当ててうめいた。ジェノは首を振った。

「すまない」

この人は、たったそれだけのために、誰かを待っていたんだろうか。ずっと、この何もない部屋の中で……。

だけどジェノだって、何も持つてはいないのだ。

「あげたいけど、できないんだ。僕も、魂を持つていないから」

男は、静かに笑った。少なくとも、ジェノにはそう見えた。

「持たずとも、与えることはできる」

腕を伸ばして、ジェノの胸元を指さした。

ジェノは自分の心臓を見た。

その中心で、銀の指輪が、燃えるように輝いていた。

「まさか」

ジェノは心臓から指輪を取り出して、男に見せた。

男はうなずいた。

「まさしく、主あるじのものだ」

「教えてくれないか。〈世界あるじの主〉って、誰のことなのか」

ジェノの問いを聞いても、男はただ、静かに笑っているだけだった。

ジェノは、指輪を男に差し出した。男は首を振った。

「必要なのは〈環〉そのものではない。そこから生み出される炎……。ああ、これこそ？」

男が、腕の先で、かすかに指輪に触れた。

焼け焦げた腕を、炎が伝う。

男の体が燃えはじめた。

「わたしもやつと、開くことができる。〈魂の座〉、古き契約の場所……」

「あなたは、誰？」

「その問いに、意味はない。いずれ、〈門〉は開かれるだろう」

次の瞬間、白い部屋の天井が裂け、舞い踊る翼の影が現れた。

「彼だ！」

「え？」

男の腕の中で、竜デユラコミアの髑髏が弾け飛んだ。

「竜デユラコミア、わたしはここだ！」

彼の〈竜〉は、高くいなないた。長い尾と、魚のような羽を広げて。

全身は白い外殻に覆われていたが、ところどころには、まだ赤い皮膚が残されていた。

男が、ひらりと跳んだ。

「すまなかった」

男が、相棒にささやいた。かすれてひび割れた声に、歓喜の響きがあった。はためく巨大な竜^{デュラミラ}馬の背に立って、彼は言った。

「……感謝する」

彼らの体は、やがて一条の光へと変わった。

光は割れた天井を貫いて、はるかな空へと昇っていった。

空は青く、眩しい。

ジェノは額に手をかざし、そして瞼を開けた。

(六)

「静かだね……」

風は止んでいた。

大地の裂け目は、音という音を吸いこんでしまう。

あらゆる天体が、地の縁から昇り、地の縁へと沈むのを見た。

月は両方とも、すでに地平線へと消えた。

大気は澄みわたっていた。

夜明けが迫っているのだ。

東西に横たわる巨大な山脈は、もう目の前だ。

どの山にも一本の木さえなく、剥き出しの斜面が星明りに晒されていた。

地の岩の色とほとんど区別がつかなかったが、山々は白い雪をかぶっているようだ。

ひとときわ高いところに、フネが浮かんでいた。

山のかたわらで、その姿はまるで小魚のようだ。

「デュラコーン
竜」

ジェノはささやいた。

「あれを見て」

山の雪の上に、無数の引っかけ傷が見えた。キラキラと、散乱した翅が発光している。

ありとあらゆる尾根や谷間が、純血種たちの死骸で覆い尽くされていた。近くのクレバスから、新たに湧き出してきた連中も混じっているようだ。

古いものは、硬直の具合からみると、死んでから数日は経っているはずだった。

なぜか、腐臭は感じなかった。この地では細菌たちさえ、生きることができないのかもしれない。フネは泣いていた。

近づくごとに、低く、すすり泣くような呼吸音が強まる。到着してからずっと、この平原をうろくろとしていたのに違いない。どこにも行けないまま、天だけを見つめて。

（泣くぐらいなら）

ジェノは心の中でつぶやいた。

(初めから、殺さなければよかったんだよ)

旅の間じゅう、ジェノが疑問に思っていたことだ。

失われたきょうだいたちを甦らせるため、フネと白い竜は旅を続けた。

塞がるものは、すべて壊した。

(なのに、おまえたちは……)

なぜ、殺しつづけた？ 自分の仲間を。

虫けらのように、モノのように、気まぐれに呼び出しては潰しつづけて。

邪魔だったからか。

ただ、壊すのが面白かったからなのか。

彼らには、まるきりわかっていないのだろう……。

でも……。

(本当のところ、僕にだってわかつちやいないんだろうな)

竜の羽ばたきが、じわじわと力強さを増していく。

「死ぬ」ってことは……」

わからない。わかりはしない。

たぶん今現在、この世に生きる誰にとつても。

それは死者たちの領分だ。そして彼らは、もはや永遠に言葉を持たない。

シエロ……。

君は、行きたい世界に行けたのかな？

それとも、あの砂の上に散らばったまま、スナシデムシ砂葬虫になってしまったのかな？

ジェノはここに来た。

ここに来るしか、なかったからだ。

(継父とさんの仇、だとか……)

違う。そんなことはどうでもいい。

何も怖くない。生きることのほかには。

(……魂が、ないから)

ジェノには何もなくなつた。

竜だけは、今でもここにいてくれる。ジェノにはそれが心強くて、とても嬉しかった。

ジェノは背中の紐を回して、銃を持った。

握りをつかむと、銃はぴたりと手になじんで、自分の体の一部のようだ。

怒りの叫びが聞こえた。

六枚羽の竜だ。

フネの胎の中で眠っていたのだろうか、脇腹の黒い穴から転がるように飛び出してきて、くるくると山頂を巡った。

ジェノは深呼吸をし、唇を軽く舐めて、よく湿らせた。

おまえたちも、同じだ。何も変わりはない。

愛しいものを抱きながら、もう一方の手では、死に場所の用意をしてやっている。

母の肺に悪いとわかっていたのに、あの人は彼女を手放さなかった。

あの人を愛していたくせに、母は夜明けの歌を歌いつづけた。

僕たちは……。

骨笛を河に投げ捨てながら、別の心で、彼らの歌を聴く。

甦ってほしいもの、手に入れたいもの……、飽きもせず、夢の小箱を覗きつづける。

美しい、甘い幻影だけを探して。

だが、笛はそんなことはしない。

「ここで、終わりだよ」

ジェノは言った。

六枚羽の鳥が、鋭く吼えた。

「僕たちは、どこにも行けない」

ジェノは銃を構えた。

フネが泣くのをやめた。

漏れ出した憎悪の波動が、大気をびりびりと伝わってくる。

「そんなに怒るなって」

ジェノは白い歯を見せて笑った。

「いま、楽にしてやるからさ……」

閃光が走る。

竜たちの咆哮が、虚無の世界を震わせた。

(七)

——見よ、いと貴き翼の種子^{たね}は。地の子等^{こら}の、血肉^{にく}の内奥^{うち}にこそ在れば——

六枚羽の竜の攻撃をかわしながら、竜は螺旋を描いて飛んだ。

天と地が、めまぐるしく入れ替わった。

ジェノは歯を喰いしばって、左腕で竜の首を抱えた。

胸が焼けるように熱い。

銀の指輪が燃えているのだと思った。

腹側からの雷撃を受けないように、竜は高く昇る。

フネの胎から飛び出した小虫たちは一気に舞い上がって、ジェノの背中を取った。

ジェノたちを何とかして下方へ引き戻そうと、懸命になっている。

(その手は食わない)

竜が彼らの衝撃波を避けている間に、ジェノは群れを端から狙っていった。彼らの疲労を感じる。撃ち落とすのは、たやすかった。

(ジェノ……、ジェノ！)

六枚羽の竜の声が、ジェノの脳味噌の奥を、がんがんと叩いた。

(……ジェノ！)

翼の影が、ジェノたちの目の前に躍り出た。

「来い！」

ジェノは叫んだ。

怖くはない。ためらわず、竜は突進をした。

「喰らえ！」

長い尾をひねって、六枚羽の竜はそれを避けた。

傷ついた羽は、すっかり治っているようだ。

翼の一枚ずつを器用に動かして、自在な動きをする。誘うように、尾を打ち振った。

しなる尾の先が、ジェノの頭を狙った。

間一髪で、首をすくめた。

鬼ごっこが続いた。

ジェノも竜も、疲れを知らなかった。

気がつけば、星たちが最後の輝きを残して、薄明るい空に融けていくところだった。

白い大地に、フネと竜たちの影が映っていた。

もうすぐ、夜明けだ。

喉が渴いていた。

腹が熱い。

腕はきびきびと動いて、銃の熱線が、後方から迫る連中を引き裂いた。

ジェノは感じていた。

（僕らだけの力じゃ、ない）

六枚羽の竜はしぶとかった。

フネを守りながら、隙を狙って、鋭い光の矢を撃ってくる。

ジェノは冷静だった。

白い翼の動きが、少しずつ遅くなっているのがわかる。疲れてきたのだ。

すれ違い、飛び抜ける瞬間に、また目が合った。

（……ジェノ！）

怒りなのか、哀願なのか、それはわからない。

わかるのは、竜たちが確かに、初めからジェノの名前を知っていたということだけだ。

夕暮れの砂漠で、彼も確かに、ジェノの名を呼んでくれたのだ……。

体中の神経が、研ぎ澄まされていた。

誰かが、力をわけてくれている。

(誰だ……?)

ぶどう棚は枯れ、ペールの女は死んだ。

だから、彼女ではない。

オルタでもなく、夢の小部屋の中にいた、背の高い亞人でもない。

(夜明けの国で……)

(もうひとりのわたしと、〈世界の主〉に会えば、わかるわ……)

わかる?

わかるって、何が?

真東から、光が世界を照らした。

白い山脈の背骨が、ばら色に染まった。

六枚羽の竜が、高く鳴いた。

「デムラウリン
竜——」

ジェノはフネを指さした。竜は勇ましく吼えて急降下した。

ジェノと竜は、ひとつの意志のように動いた。

フネの脇腹には、ラドーでの戦いのときの傷口が、まだ癒えきらないまま口を開けていた。

竜の吐く光の束は、容赦なくそこを狙った。

(……ジェノ!)

六枚羽の竜が叫んだ。

その中には幾分、懐かしい声が混じっているような気がしたが、ジェノは無視した。

フネが腹を曲げて、竜を引き離そうともがいた。苦しまぎれに放つ雷撃が、山々の頂を吹き飛ばす。攻性生物たちの死骸が、雪と一緒に、曙の空に巻き上げられていった。

それは、とてもきれいだ。

ジェノは地上を見た。雪の剥がれた山脈は白い地肌を晒して、鏡のように輝いていた。六枚羽の竜に背を向けて、ジェノはフネの脇腹を狙い続けた。

竜がまた、光の矢を吐いた。

六枚の羽風が迫る。激突ぎりぎりまで、ジェノはフネを狙い続けた。

山肌に映った二つの影が、次の瞬間、一つに融けた。

「食らえ！」

ジェノは振り返らず、撃った。

六枚羽の竜の悲鳴が聞こえた。

その光の矢を、ジェノの竜は急反転して避けた。

「！」

翼を、かすられたかもしれない。

悲鳴の主を目に捉えると、ちぎれて落ちていく、細い尻尾が見えた。

(クロス……、コウス……!?)

尾羽をなくした白い鳥は、その六枚羽でバランスを取って、かろうじて空に浮いていた。

たつたいま起こったことが理解できないかのように、きよときよと首を動かしている。
ちぎれた尾の付け根からは、光る体液が噴きだしていた。

彼は怯えていた。

(……イヤダ！)

光の矢が放たれた。混乱して、狙いも定かではない。

竜が避けると、残りは後ろのフネに当たった。

フネが身をよじり、六枚羽の竜が泣き叫んだ。

(ジェノ、ジェノ……!!)

ジェノは突き刺すような悲しみを、ごく近くからも感じた。

デュラコーン

「竜……」

竜が吼えた。

細く、長く、声の最後はすすり泣くように途切れた。

ジェノは竜の首を撫でた。

なぜ、君たちは僕の名前を、知っていたんだろう……？

朝日がジェノの目を射った。

ジェノが眩んだ瞬間、六枚羽の竜は高く吼えて身を翻し、フネの脇腹へと突っこんでいった。
咆哮に、挑発の響きがあった。

翼は黒い穴へと消えた。

フネの腹の中へと誘っているのだ。

だからだと追いかけて続けるのは、もう終わりにしたいらしい。

「どうする？」

ジェノは竜に聞いた。

竜はただ一声、力強く吼えた。

「よし！」

ふたりは白い翼の後を追った。

ジェノは泣いてはいなかった。

（竜だけだ……、竜を、殺すことができるのは）

そう言っ、て、老い朽ちた神官は身を震わせた……。

「死神は、どっちだったんだろうね」

ジェノは竜の首を抱きながらささやいた。声が重かった。

「いまやっと、僕にもわかった。デューコーン 竜……」

フネの脇腹には、呼吸口のような穴が無数に開いている。

竜が光の矢を吐いて、一つの穴の周囲を砕いた。

たったいま、飛び出そうとしていた虫たちが墜落していった。

虫たちの影をすり抜けて、竜は穴へと飛びこんだ。

「すまない」

ジェノは言った。竜がその言葉を聞いたかどうかは、よくわからない。入るとすぐに、緑色の光線が迎え撃ってきた。

ジェノは内部の壁を撃った。いくつもの白い外殻が、割れて崩れた。竜の光の矢が飛んだ。

穴の奥から、白い獣たちが列を作って這い迫ってくる場所だった。

「どけ！」

白い腕を振り上げたまま、前列の虫たちが、碎けて飛び散った。

狙いをつけている暇はない。ジェノと竜は、手当たり次第に撃ちまくった。

「邪魔だっ！」

後列の脚が、千切れて宙を飛ぶ。

どんな欠片をも消し去るかのよう、ジェノはそれらを撃った。

ジェノの頭の中では、ある考えが形をとりつつあった。

——一つは、滅びという名の運命を導き、一つは、希望と言う名の運命を導く——

聖堂の板絵が告げていた、気高い翼の神話。善竜と悪竜との相克。

旧メッカニアのオアシス都市をいくつも壊滅させた、白い悪夢のフネ。

フネは、メッカニアの大地を焼き尽くした後、護衛の白い竜と共に東へと去った。

その後を追うように、もう一頭の竜が現れて……。

追い迫る帝国軍を撃破しながら、同じく東へと去ったと。

フネを護る、殺戮の翼。

彼らを追った、生命の翼。

（でも、ほんとうにメッカニアのためになったのは、どっちだ……？）

死骸と弾幕を切り裂きながら、ジェノたちはひたすらに進んだ。

立ちほだかる壁の、薄そうなところを狙って撃った。

光の矢を数度弾いたところで、壁は割れて、大量の液体が噴き出してきた。

突き破って、竜は壁の中へと入った。

ジェノは唇を舐めた。

（水？）

塩分を含んだ、甘い水だ。

フネや攻性生物の体液とは、明らかに違った。

塩湖の水とも違う。苦くはなく、そして少しだけ温かい。

味は、人の涙に似ていた。

……百年前。

祖母から、いつか聞いた話だ。

雷撃兵器を掘り出したラドーは、連合国家の勢力地図をおびやかしていた。

帝国と親交のあった村々を、艦隊の雷で幾度も焼いたのだという。隊商の道は絶たれた。

混血児たちや〈不穏分子〉は皆殺しにされ、土の中へと埋められた。

(ラドーの軍閥に支配されるぐらいなら、帝国の奴隷になったほうが、まだ……)

帝国の庇護に入れば、少なくとも、部族同士で憎みあわずにすむ。

多くの人が、そう願った。

軍閥に属せぬラドーの民も、また。

死神のフネは、豊かだった中メツカニアを焦土へと変えた。

ラドーが、およそ百年の間は立ち直れぬほどに。

竜たちは、同じ箱から生まれた。

破れた壁の向こうは、広い部屋になっていた。

天井から、ぐるりと未完成の純血種たちがぶら下がっていた。彼らはみな、硬い腱のようなもので縛られていた。幼い獣たちを、それが母胎と繋いでいるのだろう。

水が引くと、腱がばらりと溶けて、外殻に青白い光が通った。

攻性生物たちが、次々に震えはじめた。

動き出す前に、竜の矢が走った。

悲鳴が聞こえる。

ジェノは彼らの目を撃った。

この世界を、はつきりと瞳に映し出してしまう、その前に……。
その前に、闇に還してやるのだ。

（……ヤメテ！）

どこかから、悲鳴が聞こえる。

「どこだ！」

ジェノは叫んだ。

腐りきった連合司令部。にわかづくりの義勇軍。まるで先を見ようとしないう戦略。

艦隊に傷一つ与えられない機体を駆って、ジェノたちは奇跡を望んだ。

（だから、お前たちは来た）

襲いかかる攻性生物。ときおり、暴走する純血種たち。

重税にあえぎ、戦火に怯え、人々は……、望んだ。

帝国が去ってくれたなら。

遺跡の純血種たちが、もう少しだけ数を減らしてくれたなら。

「そうだ、それは僕たちが望んだ!!」

願いは、叶えられた。

取り返しのつかない代償を支払って。

「シエルクーフ！ お前のきょうだいも、そうだったんだろう！」

一部屋の殺戮が終わった。

竜は通路を抜けて、次の部屋を探した。

次も、次の次でも、ジェノは容赦なく、獣たちを殺した。

涙の水にまみれながら、ジェノは次の標的を捜し続けた。

「なあ、礼を言わなきゃ、ダメか！」

希望の翼。死の翼。

どちらがどちらで、どうなのだろう。

小箱の底に溜まった、身勝手な夢たちを翼に背負って。

同じだ。

僕たちは、彼らと同じだ。

彼らは、夢を叶えるために。

僕らは、夢を消し去るために。

竜の翼は、はるかな想いを運ぶのだから。

そうして、望みが叶った、その後は……？

ジェノは竜の首を、優しく撫でた。

わかつている。やるだけやったら、生きていられては困るのだ。

ふらふらとハルサに戻られたり、再びラドーを焼け砂に変えられては、たまらない。

フネたちの役目は終わった。闇に、還してやらなければならない。

《翼ある死》……。

自分という皮膚の一枚下に、抑えることのできない、凶暴な力が脈打っている。なぜ竜たちは、ジェノの名前を知っていたのか。

「僕の望みも、入っていたんだろうから……」

来る日も来る日も、ジェノは空を見上げて、願った。帝国が去ってくれることを。

誰もが戦わずに暮らせる、そんな夢のような日々を。少なくともフネたちは、その半分までを実現させた。

あとの解決は、人間の本性に頼るほか、ない。

望みは、確かに叶えられたのだ。

「母さん……」

ジェノに生命をくれた人たちの願いも、きつと入っているに違いなかった。壁の両側が膨れ上がった。

浮き出てくる攻性生物たちを、竜とジェノは無差別に潰していった。

（夢は、終わりだ）

望みには、いつでも続きがある。

この大地は強すぎる力を、あまり長くはとどめておけないのだから……。

《世界の主》たちは、箱の底からもう一頭の竜を造った。

滅びという名の運命を導く、聖なる竜を。

使命を終えた幻想が、この世を喰らってしまわぬように……。

喰いしばった歯が、ひとりでに震えた。

もう、幻は要らない。

もう、夢は要らない。

誰もが、二度と帰ってこないから。

通路は目の前で、貝殻のように渦を巻いていた。先は、はるかな闇だ。

相棒に声をかける必要はなかった。

ふたりは、そこに飛びこんだ。

「デュラコーン
竜！」

ジェノはきつと前を向いた。

通路は永遠に続くかと思われた。

知っているのだろうか？

お前たちにも、本当はわかっているのだろうか？

(イヤダ……！)

咆哮が聞こえた。響きには、死の影があった。

奴が、近い。

螺旋の先が急に狭まり、壁が発光をはじめた。

目の前に浮かんでゐる懐かしい人々は、ただの幻影だ。

竜は光の矢を放ち、無数の面影を粉々に砕いた。

最後の幻影が飛び散ったとき、ジェノは叫んだ。

「……継父さん!!」

壁は生き物のように波打って、ジェノの言葉を跳ね返した。

(……)

笑い声が聞こえた。

ジェノは左右を見回した。

「!」

勝ち誇った咆哮が、通路に響いた。

両壁が迫ってくるのに気づいたときには、もう遅かった。

螺旋の通路がよじれ、ジェノたちを袋のように包みこんだ。

「しまった!」

竜が鋭く鳴いた。

ジェノは壁を撃った。青白い光が、ただちらちらと踊っただけだった。

(潰される!)

光の束がうねり、嘲笑が耳元を渡っていった。

(……コウス？ コロス？)

ジェノは竜の首を抱いて、撃ち続けた。
怖くはない。

ここで、終わってもかまわない。

ジェノは気づいていた。

フネの内臓が、限界まで力を出し尽くしてしまったことを。

この幻の螺旋通路を作り出し、ジェノと竜とを閉じこめるために。

相打ちだ。それもいい。

決して、相容れることのない二つの力。

一つは、希望という名の運命を導き、一つは、滅びと言う名の運命を導く。

僕たちは……、同じ箱から生まれたのだから。

(アハハハハ！)

六枚羽の竜が、楽しげに笑っていた。

近くにいます。

「ずっと笑っている」

ジェノは言った。

これで、終わりだ。

僕らも……、お前たちも。

壁が、竜の体を押し曲げた。

けれど、彼は満足そうに、薄目を開けてジェノを見ていた。

ジェノはうなずいた。

「ありがとう。楽しかった」

そして彼の首を抱いて、頬を埋めた。

六枚羽の竜は、まだ嬉しそうに笑い続けていた。

(八)

……僕たちの旅は、終わった。

ジェノは固く目をつぶっていた。

互いの尾を噛む二頭の竜は、無事に使命を果たした……。

(それで、いいのか?)

隙の奥では、輪が燃えていた。ぐるぐると、ものすごい速さで回っている。

(与えられたものを、ただ……、何も考えずに受け取るだけで)

人間には必ず、与えられた使命がある。ジェノはそう思ってきた。

そして、竜に貰ったおまけの命を、ジェノは使命に捧げた。

(おい、ここに来たのは、つまらない命令に従うためか?)

輪の向こうから聞こえてくるのは、怒りを帯びた、若い男の声だ。

眩しすぎて、輪の輝きを見つめつづけることができない。

目をそらそうとしても、瞼を閉じているかぎり、その光から逃れることはできなかった。

(ただ取りは、よくない)

……何だ?

(嘘をつくなよ)

ジェノは鋭く叫んで、顔を上げた。

「誰だ!」

その瞬間、ジェノの中で何かが外れた。

強い怒りと憎しみが、洪水のように溢れだした。

運命が何だ。使命なんて糞食らえだ。僕は竜に乗りたかっただけだ。

泣くぐらいなら、他愛もない夢たちを、放っておいてくれればよかったんだ!

「……おい。おい、起きろ、ジェノツ!!」

その時、青白く光る周囲の壁に、大きな亀裂が走った。

光の裂け目の向こうから、女の高笑いが聞こえた。

「あはははは！」

六枚羽の竜の笑いでは、なかった。

何かが、割れて碎ける音がした。

自由になった翼を広げて、竜が咆哮をあげた。

「デュラッ
竜！」

通路が裂けて、ばらばらと壁が崩れていった。

朝焼けの空が、そこから覗いた。

空気の粒が引きちぎられるような、異様な臭気があたりに満ちた。

「ジェノッ！」

目の前を、白い機影がよぎった。

「……オルタ!？」

ジェノは大きく目を見開いて、何も見逃すまいとした。

オルタは狂暴な笑いを響かせながら、通路を破壊し、こちらへと近づいてきた。

彼女の背後の空間が歪み、また、亀裂が走った。

フネがのたうった。

（光の道）……!？」

オルタとアルボは、フネの体液でずぶ濡れだった。

彼女のゴーグルは剥がれ、右頬の皮は千切れて、血がにじんでいた。

無理矢理「開いて」飛んできたのだ。

「出る、やつは外だ！」

オルタが、赤く焼けた空を指さした。

「ありがとう！」

竜が勇ましく吼えた。

「せいぜい、止めを刺しに行くがいいさ！」

ジェノの背後から、嘲笑を含んで、オルタの声が飛んだ。

「みんなを守ってやれよ、あの悪趣味な夢からな！」

ジェノは皮肉を笑い飛ばした。

「知るもんか！」

呼び声とする。

扉を叩く音がする。

竜は燃え上がる空に飛び出した。

山脈の南側には、雲海が広がっていた。

まるで、光る橙色の綿を敷きつめたみたいだ。

雲のはるか遠くは、朝日に霞みながら、静かに揺らめいていた。

（さいはての、果て……）

そこには何があるのだろうか？

僕たちはまだ、本物の海を見たことがない。

山を越えれば、どんな世界が広がっているんだろう？

ジェノたちの前に、巨大な影が立ち塞がった。

耳をつんざく咆哮が、山脈を震わせる。

（行かせ、ナイ！）

六枚羽の竜は、新たな装甲に覆われていた。

フネの心臓部から、残りの破片を寄せ集めてきたのだろう。

それぞれの翼の長さは何倍にも伸びて、失った尻尾の代わりに、タマエビの尾のようなものがくっついていた。

そして全身から、青黒い水をしたたらせていた。

（ナイ、ドコニモ行ケナイ！）

ジェノと竜が山の南側へ越えようとするたび、六枚羽の竜が幅寄せをして、それを邪魔した。

二頭の竜は、互いの逆光を奪い合いながら、山脈の背骨に沿って東へと飛んだ。

フネもまた、腹から苦しまぎれの雷撃を放って、朝日の方角へと突き進んだ。

「どけっ！」

ジェノは叫んだ。

光の雨をかくぐる。

（イナクナッタモノ、イナクナッタ、ママ……）

ジェノは六枚羽の竜の顔面を撃った。
ひろい額の外殻が、攻撃を弾いた。

六枚羽の竜が、牙を剥いた。

首を振って、ジェノたちを捕らえようとする。

すり抜けるときに、ジェノは彼の瞳を覗いた。

(行かせナイ、ジェノッ！)

限らない憎悪と、嫉妬の炎が燃えていた。

「お前は行かないのか、山の向こうに！」

(ナニモ、ナイ……)

返答は投げやりだった。

ジェノは怒鳴った。

「……それで、壊し続けた。何もかも、運命や誰かのせいにして！」

(ミンナ、ユメ。ミンナ、クダラナイ)

歯を鳴らして、六枚羽の竜があざ笑った。

(イツデモ、誰カニ書き直サレル……)

「だから、どうした！」

ジェノはその口元を狙った。

六枚羽の竜の顎が割れ、牙が飛んだ。体液が流れた。

砕けた顎を動かして、まだ彼は笑っていた。

くると楕円を描いて、次はジグザグに飛んだ。

光の矢と銃撃を避けながら、楽しげに、茜色の空を舞う。

命の喜びが、六枚羽の竜の全身にあふれていた。

(アハハハ……)

外殻の隙間から、穴という穴から、光り輝く粉が噴きだしていた。

生きているということ、持て余しているのだ。

放っておけば、フネと一緒に地に落ちて、やがて死ぬだろう。

だが、ジェノは銃を撃ち続けた。

突き進む山脈の頭から、太陽が昇る。

山崩れの波が、飛んでいく彼らの後を追った。

大地は裂け、悲鳴を上げた。

……東へ。

昇る朝日が完全に空へと姿を現したとき、突然、海が開けた。

山の終わりは鋭利な刃物で切り取られたように、すっぱりと失われていた。

フネはその端で、ぴたりと止まった。

二頭の竜は、勢い余って海へと飛び出した。

「道を開ける！」

ジェノは怒鳴って、撃った。

(ダメ！)

六枚羽の竜は、信じられないほど大きく息を吸いこむと、全身から青い光を放った。
ジェノの竜が悲鳴を上げた。

「デュラゴン
竜！」

竜の翼から、血が流れていた。

体をひねって、敵の後ろに回りこんだ。

六枚羽の竜が、振り返った。

ジェノはその黒い瞳を見つめた。

あらゆる感情が、その中に隠されていた。

狂気の色はない。彼の瞳はかすかに潤んで、きらきらと輝いていた。

(デュラゴン
竜……)

光の矢が、彼を最後に貫いた。

一声、低く喉を鳴らすと、六枚羽の竜は飛ぶのをやめた。

海は青く、その果ては空と区別がつかなかった。

フネの泣き叫ぶ声が、後ろから聞こえた。

「！」

落ちていく六枚羽の竜とすれちがい、振り返って、ジェノは息を呑んだ。

雷撃に砕かれた山々の下から、何かがせりあがってきたところだった。

山々？

いや、違う……。

「まさか」

呼び声が聞こえる。

白い大地は二つに裂けて、内側から青い光がこぼれた。

フネが、最後の雷撃を放った。

雷撃は山の終わりを海へと崩した。

オルタの小さな白い翼の影が、フネの脇腹から無事、離脱するのが見えた。

「！」

轟音が響いた。

それが、何かの鳴き声であることをジェノは知った。

「デムラゴン……！！」

東から、西へ。

白い大地を分かち背骨が、うねり、空へと翼を広げた。

「あれは!？」

巨大な山脈を背骨に変えて、浮かび上がってきたのは、青く輝く巨大な竜だ。頭から尻尾まで、光の粉に包まれていた。

一つの国ほどもありそうな巨竜が、稲妻のようにその首を伸ばした。落ちていくフネと、六枚羽の竜とを捕まえ、優しく呑みこむ。

呑みこんで、巨竜は天へと羽ばたいた。

(九)

ジェノは呆然と、輝く巨竜を見つめていた。

腕の銃の紐がずりりと下がった。だが、ジェノは何もしなかった。

白い大地は、黒い裂け目から割れて溶かされ、次々に海へと沈んでいった。すさまじい大ききの波が、海面から逆立った。

ジェノの右手から銃が落ちた。

白い銃は大地のかげらとともに、泡立つ波間へと飲みこまれていった。

巨竜の翼が、空を覆う。

ただ、ジェノは見上げていた。

「何だ、あれ……」

南天に、奇怪な穴が開いていた。

ちようど、リボンを一回捻りにして、糊で止めたような形の穴だった。

穴の縁は空に溶けていて、どこにくつついているのか、目を細めてもよくわからない。中に星屑が光っていた。

見慣れた星座の姿はなかった。

「魂の座……」

声が聞こえたので、ジェノは後ろを見た。すぐ近くに、オルタとアルボが来ていた。

白い大地から目覚めた巨竜は、一声高く鳴いて、ねじれた穴へと昇っていった。

オルタが小さな悲鳴を上げた。

「扉、が」

「扉」の彼方には、ひとときわ明るい恒星がある。

ジェノの竜が、大きく翼を打ち振った。瞳には、青い星の光が映りこんでいた。

ジェノは大きくうなずいた。

「……僕は、どこまでも行くよ。 竜」

デュラコーン

ジェノと竜が、巨竜の後ろに続こうとしたそのとき、激しい声が飛んだ。
「乗り移れ、ジェノ！」

オルタが大きくアルボを寄せてきた。乗り出して、ジェノに手を伸ばす。

「魅入られるな。お前は戻れ！」

ジェノは首を振った。

「馬鹿！ 連れて行かれるぞ！」

オルタはさらに手を伸ばした。

「ありがとう。でも……、僕たちはいつまでも一緒だ」

ジェノは言った。竜が甘く喉を鳴らした。

少年と竜は疾風のように、オルタたちのそばを去った。

「デュラコーン
竜 !!」

オルタは叫んだ。

青い竜と少年の姿が、見る間に小さくなっていく。

デュラコーン
竜 ……。

（私を、思い出してはくれないの？）

どうしてあのか、私を連れて行ってくれなかったの。

何も要らなかったのに。

この十数年間で、私は全てを手に入れた。

力も、金も、友達も……。そして、守るべき者も。

（だけど、私は一日だって、おまえを忘れたことはない！）

行きたかったんだ。光の中へ……。

私だって、そこへ、行きたかったんだ！

「ジェノ！」

口の端から泡と血を飛ばして、追いかけてきたオルタが吼えた。

「ジェノッ!!」

地を這え！

償いをしろ！

「馬鹿野郎！ 止まれ、引きずり下ろしてやる!!」

オルタの銃口が光った。

一瞬、鋭い痛みと熱が、ジェノの左肩を切り裂いた。

見下ろすと、途方にくれたような顔で、彼女が銃を握っていた。

アルボが低くうなった。

竜は応戦しなかった。

彼女の腕が、震えているのが見えた。

自分のしたことが、まだよく呑みこめていないらしかった。

構えたまま翼の影を見上げて、オルタは首をかしげた。
 竜はオルタをじつと見つめた。

「私を、憐れむな」

オルタはつぶやいて、よろよろと腕を下ろした。

少年が、右手を挙げた。

もう、銃は握られていない。

そのまま、ジェノは額に手を当てて、彼女に敬礼をした。

向き直ると、彼らは矢のように空へと飛んだ。

オルタが顔を覆った。太陽が、じわじわと昇ってくる。

竜たちの姿は、はるかな天の高みだ。

(十)

星屑に満ちた扉は、ゆるやかに歪んで巨竜を迎えた。

ジェノは竜の首に手のひらを当てた。外殻はさらさらとして、ほんのりと温かった。

「デュラコーン
 竜」

昇るほど気流は強く、大気の味は清冽さを増す。

ジェノは世界の頂上にいた。

どんなに発達した航空機械でも、まだここまでは来たことがないだろう。少し寂しかったけれども、嬉しく、そして誇らしかった。

竜がジェノを振り向いた。

ジェノは微笑んだ。

「……
デュラコーン
竜」

彼の呼吸が伝わってくる。

翼のはためき。自分の心臓の鼓動。

「よかった」

ジェノは言った。

「地面を引き裂いていたのは、卵を探していたんだね」

竜は相変わず、何も言わなかった。

「約束だったんだ、君たちと僕らの。光を貰う代わりに、卵を預かった……」

竜が、喉を鳴らした。

そうだ、と言っているのかもしれない。

違う、と言っているのかもしれない。

ジェノは胸が詰まって、涙を拭いた。

呼び声が聞こえる。

扉はゆらめき、不思議な旋律を奏でながら、空にたゆたっていた。先を行く光の竜は、その中に融けて消えてしまった。

もうすぐ、ジェノたちもそこに辿りつく。

(……ノ)

ジェノはふと、自分の名前を呼ばれたような気がした。

(え……?)

振り返って、海を見つめた。白い大地は消えて、北側に大きな陸地が見えた。

この世界が球体をしている、とは本当のことだとわかった。

陸地の上が茶色く霞んでいるのは、砂煙のせいだろうか……。

太陽が走り、今まさに夜明けを迎える地帯を更新していく。

(ああ……)

ジェノはその光景を美しいと思った。

魂が震えるほど、美しいと思った。

「君がこの世界を選んだわけも、わかった」

ジェノは向き直って、言った。

竜は首を曲げて、ジェノを見つめた。

琥珀色の瞳の中に、悲しそうな光があった。

「どうしたの？」

竜が鳴いた。

深く、ため息のように寂しげだった。

「デュラコーン
竜？」

ジェノの体が、竜の背からふわりと浮き上がった。

「デュラコーン
竜……!？」

竜はしばらく、静かにジェノを見つめていた。

やがて首をまっすぐに戻して、扉に向かい、高らかに咆哮した。

ジェノは浮き上がったまま、宙に残された。

目の前で、扉が縮まっていく。翼の影が消えてゆく。

「待って、どうして……!」

青空を裂いて、ジェノは海へと落ちていった。

一瞬で、いや、無限の時間がそこに流れるかのように。

「デュラコーン
竜!!」

ジェノは叫んだ。

空に開いた世界の穴が、竜を飲み込んで、完全に閉ざされたのを見た。

同時に、水しぶきが上がった。

数千年の間、酸素に触れることのなかった海水が、落ちゆく者を迎えた。

還元物の臭いと苦味が、少年の喉を塞いだ。

ジェノは沈んでいった。

……
デユラコーン
竜 ……………。

暗い、潮の流れの底で、ジェノはレーテの匂いを嗅いだ気がした。

十四章 帰還

(一)

夕暮れの光が、一帯を薄赤く染め抜いていた。

そこに、塩の柱が立っている。

居並ぶ姿が夕日に影を引く様子は、まるで歩くことを忘れてしまった巨人たちのようだ。焼けつくような喉の渴きを覚え、少年は目を開けた。

半身を起こすと、コートが胸からずり落ちた。

少年は、巨大な塩のアーチの下に寝かされていた。

「……」

頬が痛んだ。手を当ててみると、誰かに殴られたような痣ができていた。殴った当の本人は、もうこの場所にはいないようだ。

左肩には、シャツを破って作った包帯が巻かれていた。

少年は枕元に水筒があるのに気づいて、その中身を口に含んだ。

飲み下すと、金属臭かった。

少年は眉をしかめた。

ふらふらと立ち上がってコートをつかみ、塩の岩の下を出た。
乾ききった大地が彼を迎えた。

風が出てきた。日が落ちれば、すぐに冷える。

少年は黙って、コートを羽織った。

フネの体液をかぶった布地は、すっかり硬くなってしまっていて、動かすとぱりぱりと音が鳴った。水筒をさげて、少年は歩きはじめた。

けして空を見ることはなく、うなだれて、時折、石に足を取られながら。

(二)

クーリアが騒いでいる。

男は椅子から立ち上がって、壁の銃を取った。

「どうしたの」

かまどの粥を掻き混ぜながら、妻が尋ねた。

男は軽く首を振ると、葉莢のついたベルトを締めて、かがんで靴紐を結んだ。

「ちよつと、見てくる」

「気をつけて」

外に出ると、息が白くなった。

年中暑いこのあたりでも、夜は寒い。

（それにしても、よく冷える日だ……）

クーリアの声はもう止んでいたが、男は用心深く、周囲に視線を這わせた。中庭を確認してから、地上への階段を目指す。

月明かりの下、あちこちの壁に残された弾痕を見て、男はあらためて顔をしかめた。気のせいなら、いい。

クーリアは時々、仲間どうしで相談して、人間をからかうから。

半地下の共同住居から、階段を途中まで上って、男は急に心細くなった。

誰かを呼んで、一緒についてきてもらおうか。

もし、連中の残党が生き残っていたのだとしたら、一人では心配だ。

（いや！）

物音が気になっただけで、様子を見に人を呼ぶなんて。

ただの風の音なら、いい恥さらしではないか。

老いたとはいえ、男にも意地があった。

弾を込めた猟銃をしっかりと握って、いつでも抜けるように、腰の鞘を傾けた。

男は階段を音もなく駆け上がり、屋上の甕の陰へと隠れた。

「！」

黒い人影があった。

若い男のようだ。ぼんやりと、二つの月を見上げていた。

影の形は、見慣れた誰かのそれに、よく似ていた。

「おい！」

男が陰から出て、震える声で叫んだ。

反応はなかった。

「何してるんだ、とにかく入ってくれ」

聞こえないのか、若者はまだ月を見ている。

男はいらいらした。

「どれだけ、待ったと思ってる。粥が煮えてる、それから……、いい、とにかく急げ」

こみあげるものがあつて、男はごま塩の髭についた鼻水をぬぐった。

「来いよ！ さっさと来んと、わしの銃で撃つぞ」

コートの人影が、やっとこちらを向いた。

おぼつかない足取りで、男のところにやってくる。

「早く、こつちだ。……間に合つてよかった」

初老の男はくると踵を返すと、さっさと階段を下りはじめた。

若者はうなだれて、黙ってその後に従った。

男は灯りの漏れる入り口に立って、ふと違和感に襲われた。

足音の感じが違う。

短刀の握りに、指がかかった。

振り向きざま、彼は刃を抜いて言葉を発した。

「貴様……、誰だ！」

光る刀身を突きつけられても、その少年はぼうっと立ち尽くしているだけだった。

「どうしたの！」

妻の声が飛んだ。

男の全身から、冷や汗が噴き出した。

そのコートを着るにしては、目の前の少年は、あまりにも若すぎた。

アカデミーを出て任務に出られるのは、最低でも十八歳以上だと聞いていたからだ。

「義勇兵崩れか」

少年が、ゆつくりとうなずいた。

腰の帯にはナイフが下がっているようだったが、手はぶらりと垂らしたままだ。

コートの下に着ている服は、攻性生物の乾いた体液で汚れていた。

（人間の血じゃ、ないな）

男は少し、ほっとした。

「お前たちのせいで、ハルサは滅茶苦茶だ」

声には憤りがこもっていた。

少年は、ずっとうなだれたままだ。

男の妻は怯えたように、後ろから声を投げた。

「何の用だい？ いま、うちには病人がいるから……」

少年が顔を上げた。きょとんとしているだけだ。言葉が通じていないのかもしれない。

男は少年の腰に手を回して、ナイフを奪った。

そして、短刀を鞘へと収めた。

「入れ」

家の中には、一枚板の大きな古い座机があつて、かまどでは粥の鍋が湯気を立てていた。

奥の部屋で、誰かが寝ているようだった。

「座れ」

男は家長の席に、どっかりと腰を下ろした。

客人のクッションを指さして、そこに少年を招いた。

「ネフ」

妻は黙ってうなずくと、少年の前に粥の鉢を置いた。

「食べたら、出てって」

少年は夢中で、それをすすりこんだ。熱い粥が舌を焼いた。

ふと、何か硬いものが太腿に当たった気がして、ポケットを探った。

指先に、ひんやりとした感触が伝わってきた。

取り出してみると、手のひらの上で、トビクマイシ 鳶霊石の小さなかけらが青く光っていた。男の目がすばやく動いた。信じられない物でも見るように、少年の顔を見つめた。「それは……」

少年は首をかしげて、ちよつと考えるように目を伏せると、男に石を差しだした。ネフが悲鳴をあげた。

少年は相変わらず無表情のまま、今度は空っぽになった粥の鉢を彼女に差しだした。「おい」

受け取ったトビクマイシ 鳶霊石を握って、男は妻に言った。手が震えている。

「こいつに、もう一杯やってくれ」

(三)

サラカⅡエクⅡハルステラ様

カルモはいい街です。

砂漠に囲まれています、オアシスは豊かで、水路が縦横に巡らされています。

ここの人たちは、たいへん花を好みます。

花なんて、甘ったれた金持ちの（僕の養父は金持ちでしたが）贅沢な娯楽だと、僕は思ってきました。そんなことよりも、貧しい人たちが欲しがっているのは職とパンだと。

僕がそう誤解していたのも、無理はありません。

学校では立派な古代品種がたくさん栽培されていましたけれども、帝国全体を見回してみると、貧しい人たちが自分のために花を買うような文化はありませんでした。

ところが、カルモのどんな最下層の、みすばらしい家でも、扉の脇には小さな鉢が置かれているのです。骨ばった顔の物売り女が、出かける前に水をやっていきます。

それを見たときの驚きと、あさはかな今までの自分への軽蔑といったら！

どの路地を回っても、何十年もの歴史のある、小さな花屋が営まれています。流通品種もたくさんあります。

そんなわけで、あなたに種を買って送ることにしました。

石香樹の色変わりで、白い花の中心に、紅色の模様が入るものです。

《曙光》^{オルタ}という品種だと、店の主人が教えてくれました。

夜明けとともに萎む花にそう名づけたのは、カルモ人特有の諧謔でしょうか。

《勝利の血》、《犠牲の栄光》などと呼ぶ人々もいますが、この可愛らしい花には、古い品種名の方がより似つかわしいと思われます。

改良の結果、水があればすぐに芽を出すそうですので、僕が帰るまで涼しい場所にしまっておい

てください。井戸のそばに、一緒に植えましょう。

前に、あなたは言われましたね、人が憎しみを忘れることはないのだと。確かに、そうかもしれません。

何千年、何万年もの間、人間は互いに争い続けてきたのですから。

でも僕には、互いに憎みあい、殺しあうことが、人間の本性だとは思えないのです。

でなければ……、どうして僕が、あなたを好きになったでしょう？

あなたに、嘘をついていたことがあります。

遠乗りですぐにへたりこむのは、本ばかり読んでいたせいではないのです。

僕の肺は、普通の人の半分の機能しかありません。

駅馬車の待合室で、僕は両親が来るのを待っていました。

着服れた、灰色のマントの男を、僕は今でも悪夢に見ます。

ウーブ出身の貧しい工員で、相当に自堕落な生活を送っていたようです。

彼が爆弾をどこで手に入れたのか、それはもう知ることができません。

病院で、自分が何を願ったか、僕はこの十年間、誰にも言わずにきました。

それはとても愚かしく、あさましい願いでした。

僕は、メッカニアのすべての子供たちが、同じ悲しみを味わえばいいと思ったのです。

愛する人を亡くさなければ、誰も僕の気持ちなど、わかってはくれないのだと。想像の中で、壁の地図に何度、空爆を行ったかしれません。

もしかしたら、僕はまだ、その気持ちを忘れることができていないのかもしれない。でも、今の僕には、わかつています。

それはあくまで、子供じみた幻想にすぎないのだと。

僕は今でも、あの灰色の男を許すことができません。

けれど、あなたの不幸せを願うこともまた、今の僕には絶対にできない。

世の中には、いろいろな人間がいます。

大切なものを失くした人の悲しみにつけこんで、何かを憎ませようとする人。

自信が持てない人の弱みにつけこんで、何かをさせようとする人。

彼らの甘い言葉に乗ることは、本当にたやすいことでした。

僕は知らなかったのです。

〈メッカニア〉の中に、ハルサや、ラドーや、キュプロや、カルモ……、他にも、いろいろな国があるのだなんていうことを。砂漠の果ての、塩の湖の美しささえも。

おとぎ話は、決して説明してはくれません。

なぜ、竜が人を殺し、人が竜を殺すのか。

竜の巣穴からは、世界や騎士たちが、どのように見えていたのか。

あのころ僕は、大人たちに問い続けたけれど、誰も答えてはくれなかった。

なぜ、あの男がそこにいたのか。

なぜ、僕の両親が死ななければならなかったのか。

世界が、おとぎ話のような幻想に、いともたやすく動かされるものならば……。

僕たちは、抗わなくてはなりません。

抗うことができる、その一点においてのみ、僕は人間を信じます。

本日、わが艦隊にカルモへの空爆命令があつたようです。

が、あいにく無電が壊れてしまいましたので、詳しいことはよくわかりません。

少佐も僕らも、それが、陛下への裏切りだとは思わないのです。

少佐はお祖母さまがメデュラの出で、帝国内では珍しい再誕教徒です。

その教えによれば、生きとし生けるものは、一生のうちほんの一瞬だけ、〈世界の主〉になるのだといいます。

ご存知の通り、僕は信仰と名のつくものは、一切認めないことにしていたのですけれども、今はなんとなく、そんなことがあってもいいなと考えるようになりました。

世界の行く末は、一握りの偉い人々や、全知全能の絶対者が決めるものではなくて、僕たちのようにちっぽけな生き物が分け合い、担っていくもののだとすれば。

この世の運命を変える、その一瞬だけ、人は最も聖なるものに近づくのだといいます。

ひょっとすると自分でも、それと気づかないうちに。

カルモはキュプロに使者を送るでしょう。キュプロは帝国と和平を進めるでしょう。

僕たちがどうなるのかは予断を許しませんが、本国への召還命令が出る前に、隊員を連れてカルモを抜け出すつもりでいます。僕のように文民あがり、名前だけの尉官でさえ、氣遣ってくれる人たちがいるのはありがたいことです。

少佐は全責任を引き受ける気でおられますが、僕たちがついている限り、そんなことはさせません。

脚の一本をいただいても、そちらに一緒に連れて行きますので、その節は頼みます。教養のある人ですから、きつと、ハルサの民のために役立ってくださることでしょう。

お父さま、お母さまにもよろしく。

勝つだの、負けるだの、そんなことはもうどうだっていい。

終わらせなければ、いけないのです。

サラカ、僕たちは、《世界の主》に、近づけたでしょうか？

また夢みたいなきと、あなたが苦笑するのが目に浮かびます。

夢は、誰でも見ることができますけれども。

下卑た幻想が幅を利かせる世の中で、正しい夢を語ることはたいへんに難しいことです。

腰抜けと言われてもいい。

一瞬の溜飲を下げて栄光に酔うよりも、僕は五十年後の友愛を選びたく思います。

養父^{ちち}も、いつかはわかつてくれるに違いありません。

僕たちが、真に陛下の忠臣であり、まことの愛国者であつたということを。

まとまらなくって、ずいぶん長くなりました。

ヤミ郵便屋に頼んだので、この手紙の内容が外に知られることはありません。

子供の頃の年上の友人で、文字どおり口の固い男ですから。

彼が生きていてくれたことを知ったときは、運命の数奇さに感激したものです。この話も長くなります。だから、またいづれ。

なお、彼が僕たちより先にそちらに着いても、字が読めることを教えないでくださいね。会えばわかりますが、奴は口説き魔です。

ご無事を祈って。わが妻へ。

(四)

夜のうちに男は出かけ、隣の家族たちが集まってきた。

朝には薬師が到着し、土の家々の一つ一つから、ざわめきが聞こえてきた。

少年はずっと、部屋の隅の絨毯に座って、何も喋らなかつた。

誰かが声をかけても、面倒くさそうに膝に顔をうずめて、目を閉じてしまうのだ。

夫婦は彼を放っておいた。

「あれは抜け殻だ」

中庭の、棘だらけの木のそばで、男は妻にそうささやいた。

「私たちの言葉が、わからないんじゃないやなくて？」

ネフは聞いてみた。

夫は白髪混じりの頭を搔いて、首を振った。

「どうしたもんだか、な」

そう言つて、物珍しげに我が家を覗きこんでいる、共同住居の子供連中を追い払った。

数日、少年は壁に寄りかかつて、じつと部屋の隅の闇を見つめているだけだった。

危険な感じはしなかつたけれども、〈メツカニア〉の義勇兵には違いがない。

みなは腫れ物に触るように、彼に接した。

粥を置くと、黙って食っている。

ネフは恐ろしかった。

自分たち家族の運命がいい方に向かっているのか、悪い方に向かっているのか、皆目、見当もつかなかったからだ。

おろおろと隣の部屋に行つては、また戻ってきて、ため息をついた。

（ああ……）

安らかな寝息が聞こえる。

女は机の木目を眺めて、少し涙を拭いた。

夫は集会所で、薬師の接待に追われている。

裁縫箱を出した。このごろ近くのものが霞んでしまつて、糸が針の目を通らない。

（……ほんとに、もう）

女は舌打ちをした。顔を上げると、目の前に少年がいた。

「キヤア！」

女は飛びのいた。

少年は針山に指を伸ばし、すつと一本抜いて、こともなげに糸を通してみせた。

「あ、あんた……」

そのとき、奥の部屋から物音がした。

「サラカ？」

ネフは繕い物を机の上に放りだして、垂れ布の奥に消えた。
しばらくして、号泣が響いた。

少年が、ゆっくりと振り向いた。

(五)

現れた人物は、白い寝巻きにショールをかけていた。
母親に支えられながら、よろよろと歩く。

「だいじょうぶ、母さん。もう平気」

「でも……」

ジェノは針を山に刺して、立ち上がった。

彼女が転びかけたので、助けようと腕を伸ばすと、びしりと声が飛んだ。

「触らないで」

棘のある声の、若い娘だった。歳は、ジェノよりも二つ三つほど上だろうか。

黒い瞳の下は深く窪んで、憔悴の色をとどめている。頬はこけ、唇の肉も薄くなっていた。
ジェノはその娘から目を離すことができなかった。

「よかった、本当によかった。もう……」

ネフが嗚咽を漏らす。

「よくないわ、ちつとも」

娘は不機嫌そうだった。

けだるげに首を振って、壁に掛けてあるコートをちらりと見やった。

「運がよかつたわね」

ジェノは何も言えなかった。

娘は言葉が続けた。

「ヘメツカニア」が、このハルサで何をしたか知っているの？」

ジェノは黙って、彼女の目を見ているしかなかった。

「あのコートを着ていなければ、あなたも父に蜂の巣にされて、砂に埋められていたはずよ」

「やめなさい！」

母親の止める声にもかかわらず、彼女は乾ききった声で笑った。

「とんだお節介だわ。そのまま殺してくれたほうがよっぽど、よかつた」

彼女は母親の手を離れて、ジェノの横を通り過ぎた。

「どこに行くの」

「井戸。冷たい水が飲みたい」

「座っていなさい。私が、くんでくるから」

「……もしかして」

ジェノは雷に撃たれたように、飛び上がって娘の肩をつかんだ。

「さわるな！」

平手が飛んだ。

「待って！」

ジェノは彼女の肩から手を離すと、首にかけた紐を、服の中から急いで引っぱり出した。どうして、そんなことを思いついたのかわからない。

だけど、そうしなければいけないような気がした。

娘は半ば怯えたような顔をして、ジェノを睨みすえていた。

「これは、あなたのもの？」

銀の指輪が、紐の先で静かに揺れている。

彼女の顔から、表情が消えた。

ジェノは紐を首から外して、指輪を娘の目の前に突き出した。

汗で汚れ、黒くなってしまっていたけれど、その光は相変わらず優しかった。

「あなたも、^{あるじ}（主）のひとりだったんだ……」

娘は指輪をひったくった。

「来て欲しかったのは、お前なんかじゃない！」

ジェノを指さして叫び、娘の体がよろけた。

「サラカ！」

ネフは娘を抱きしめた。

少年は突っ立ったままだった。

「わかつてる」

小さく、そうつぶやいた。

「……何て？ あの人、何て？」

指輪を胸に抱き、絞りだすように、サラカがうめいた。

ジェノは質問に答えた。

「『ただいま』……」

「ただいま？」

サラカが眉をひそめた。

そのとき、小窓からの日光がかげった。

「おい！」

父親が駆けこんできた。

「見ろ、空を！」

ジェノが頭を起こし、叫んだ。

「……来る……!!」

サラカはびくりと震えて、次の瞬間、外へと飛びだした。

ジェノたちもその後を追った。

人々は驚きの声を上げて、それぞれに天を指さしていた。
 空には、重く黒い雲がたれこめてきていた。

「どこから湧いた!？」

薬師が中庭で叫んでいた。

サラカは人々を掻き分け、突き飛ばして、階段を駆け上がった。

ジェノも続いた。

黒い水玉模様が地面に生まれたと思ったとたん、すさまじい雨が全てを叩いた。

サラカの泣き声が聞こえた。

乾ききった大地が、あつという間にぬかるみへと変わる。

穴の底の人々は排水溝の整備をしながら、声を合わせて歌いはじめた。

「……花を呼べ、蜂を呼べ。レーテを癒せ、われらとともに……」

集落を囲む逆茂木の前まで歩いて、サラカは膝をついた。

稲妻が空を渡った。

言葉にならない声でわめきながら、サラカは地面に身を投げた。

雷鳴が響く。

ネフが走って行って、娘の体を泥から起こした。

サラカは激しく首を振り、母親に抱きつくくと、子供のように声を張り上げて泣いた。

ジェノは二人から離れて、空を見上げていた。

（ただいま……？）

本当に、彼らは、行ってしまったのだろうか。二度と戻ってこないのだろうか。本当に……？

降りしきる雨は、ときに激しく、ときに穏やかに、ジェノの顔を洗った。

（竜、僕は……）

ふと、後ろに人の気配を感じた。

「おい、初めから説明してくれ。何が何だか、ちつともわからん」

ごま髭の男が、むつつりとそこに立っていた。

「どうやって砂漠を渡ってきた？ アカデミーのコートは？ なんで、あの石を持ってた？

の指輪を、どこで手に入れた？ この雨が降ることを、お前は知っていたんじゃないのか？

少尉
話し

てくれ。全部、初めから、もう一度だ」

「初めから？」

「話してくれ」

ジェノは首を横に振った。

「わからない」

しばらく、ずっと雨に打たれた。

やがて、晴れ間が覗いた。

雲の切れ間に、輝く半円の帯が現れた。子供たちが走ってきて、歓声をあげた。

「虹だ！」

この世のあらゆる色を含んで、虹はすらりと尾を伸ばしている。決して完全円では、ない。

その失われた半分は、大地の端へと消えていて……。

ジェノは目をつぶった。

とめどなく、涙があふれた。

サラカの鳴咽が、止むことなく聞こえていた。

ああ。泣けばいい。

泣けばいいんだ。

天は供物を受け取った。

だから僕たちはただ、気が済むまで泣けばいいのだ。

失われた、僕らのあらゆる半分のために。

終章 若枝

(キュプロ)

汗が滝のように流れる。

男はエンジンの下から這い出して、マットの上の水差しを取った。

注ぎ口から、そのまま水を喉に流しこむ。

首の手ぬぐいで軽く汗を拭き、ポケットから岩塩を取り出して、それを舐めた。通信艇の翼を磨いていた帽子の青年が、彼に声をかけた。

「どうだい、隊長。使い物になるか？」

男は苦笑いをした。

「〈隊長〉は、やめろよ」

「墓堀りが持つてくるにしちゃ、しけたエンジンだから。どうしたもんかな」

「井戸に使ったらどうだ？」

「ふむ。どっかの村に回してもいいね」

「まあ、とにかく昼飯にしようや」

二人の整備士がマットの上に座りこんだとき、足音が近づいてきた。

「おい」

青色の長衣をまとった青年だ。

「エルゴ！」

帽子の整備士は、青い服の青年に歩き寄って、互いに抱き合った。

二人の顔は、見分けがつかないほどそっくりだ。

「久しぶりだな」

「ああ、少し忙しかった。突然で悪いんだけど、明日の朝、船を出せるか？」

「へえ？ どうしてまた」

帽子の青年は、〈隊長〉を振り返った。

弁当箱を開けたまま、〈隊長〉は目だけでうなずいた。

「できるってさ」

「ありがとう」

エルゴは目を伏せて、礼を言った。その男の顔を、見ないようにしているかのようだった。

双子はしばらく、互いの近況についてお喋りをしていた。

整備士は黙々と昼飯を食い、汗を拭いて、水を飲んだ。間に、岩塩を舐める。

男は天窓の光に、塩の結晶をかざしてみた。

淡い桃色を帯びて、水晶のように輝いていた。

男の頬に、小さな虹が落ちた。

(きれいだ)

妻の顔が浮かんだ。

先月の休みに、市へ行つたときのことか思い出された。

子供のためのこまごまとしたものを揃えて、新しい服を買つた。

彼女の腹はまだそれほど目立たなかつたが、人ごみでは神経を使った。

「ねえ」

店の奥から、妻が手招きをした。

行つてみると、鍵のついたガラスの化粧箱に、たくさんの宝石が並べられていた。

もともと、さして光り物の好きな女ではない。

「どうした」

ムーリカはガラスの奥を指さした。

桃水晶の浮彫カメオをはめこんだ、平たい銀の胸飾りがあつた。

丁寧に打ち出された銀の板は、広げた両翼の形をしていた。

「水晶つて、岩塩みたいな色だな」

彼女に、脇腹を軽くつねられた。

「ほら、ちゃんと見て」

浮彫カメオには、人の横顔が刻まれていた。

男の顔だ。

「お前に、よく似てるわ」

彼は眉間を寄せた。

「どこが？」

彫られていたのは、貧相な男の顔だ。

失意を秘めた鼻先に、どことなく拗ねたような唇をしている。

妙に濃さの揃わない髭が、ぼそぼそと生えている描写まであった。

どこにでもいて、酒場でクダを巻いているのがお似合いで、美男子でも何でもない。
浮彫には普通、神話の英雄たちを刻むものだ。

宝石職人が、どうしてこんなつまらない顔を刻む気になったのか、よくわからなかった。

「ね、そっくりよ」

男は気を悪くした。

「俺が？　こんなものに？」

「そう？　けっこうハンサムだと思うけど」

「よしてくれ」

店の親父が、ぎろりとこちらを睨んだ。

「買わんのなら、出ていきな」

若い夫婦は、急いで外に逃げだした……。

ムーリカが手を握って言った。

「あたし、あれ欲しいな」

「バカ」

男は岩塩をポケットにしまい、マットの上にごろりと横になった。

双子たちは、まだ何か話に夢中だ。

（あんまり、物を欲しがる奴じゃないのに……）

男は寝返りを打った。

（幾らかな、あれは）

今月の給料が出たら？

いや、この先、家族が増えれば金がかかるに決まっている。

男は悩んだ。

それは幸福な悩みだ。

自分の手綱を誰にも引き渡さなかった者だけが、手に入れるのにふさわしい。

（……神は、俺を愛する）

微笑んで、男は目を閉じた。

足音が戻ってきた。

「あいつも、随分偉そうになっちまって……。あれ？寝ちゃったのか」

青年は、男の空の弁当箱を逆さに振って、ため息をついた。

羨ましそうに、独り言をつぶやく。

「いいなあ、別嬪の奥さんがいる奴は」

(ウーブ)

町外れには、野営用の空き地がいくつも用意されている。

金を払えば、井戸を使わせてもらうこともできた。

遠くに見える城壁は、少しずつ再建が進みつつあった。

「ザード」

男は水袋を抱えて、走地艇の日陰に入った。

「整理は進んだか？」

行李の中には、たくさんの手紙が並べられている。青年は師匠の姿を認めると、さっと何かを隠そうとした。

「こら！」

どうやら、仕分けの仕事はそちのけで、何やら書きつづっていたらしい。

男はザードに飛びかかると、腕をひねり上げてそれを奪った。

上等の紙に、ごちゃごちゃと何か書いてある。

できるだけ流麗な筆記体で、美しい帝国綴りを心がけようとした跡があった。

「ウー！」

奪い返そうとする青年の手を払って、男は文面を読んだ。

「……曙の頬。亜麻色の髪、琥珀色の瞳。白磁のようなその肌は……」

「グァ！」

「またか。……なんだ、この読むに堪えない文は」

男はザードをじろりと睨み、それから呆れたように笑って、手紙を返した。

「俺は、ああいう得体の知れない女は好かん」

ザードは手紙を懷に隠した。

「もっと、ふくよかでこう、ぽちちやりと愛想のいい……」

男は胸の前で片手を回し、地面に水袋を下ろした。

ザードが、砂の上に棒で何かを書いた。

「ん？ なんだ」

（それは、田舎者の好みだ）

「てめえ」

（僕はアカデミー育ちですから）

「よく言うぜ」

ザードはニヤリと笑うと、行李の中身に手をかけた。

また、誰かがこちらへやってきたからだ。

今日はもう、これで三人目だった。

「郵便屋さんかい？」

ウーブの訛りがきつい、小柄な老婆だ。

「代筆を頼めるって聞いたんじゃけど」

男二人はうなずいて、老婆を敷物の上へとうながした。

(カルモ)

水門の角の店で、薄いワインと塩つきパンを買った。

中年男はのんびりと、水辺の散策を楽しんだ。

男はすすけた灰色の帽子をかぶって、同じような色の上着を羽織っている。道行く人が彼の姿を見ても、どこかの工具が昼休みにぶらついているとしか思えないだろう。

水路に沿って、青い小さな花が咲きこぼれている。

レンガの橋の上を行くと、川面を花びらが流れていくのが見えた。

市場の喧騒が、風に乗って遠くなり、ふいに近くなる。

(相変わらずだな)

誰にも、言ったことはないけれど……。

デレク……〔影の目デレク〕は、この街が好きだった。スキアド・オブス

水源を失くして滅びてしまった、遠い昔の、自分の街の姿を思い出すせいかもしれない。かつて愛した女が、この街の生まれだったからかもしれない。

他の多くの仲間たちとは違って、彼は最初から、シーカーとして育ったわけではなかった。〔里〕よりも、〔虹の街〕よりも、メッカニアのこの都市に来ると、一番落ち着くのだ。

進まない会議の合間を抜けて、ひと休みを決めこんだ。もとより、彼の素顔を知るものはいない。礼拝所の大きな階段の前にたどり着いて、彼はそこに腰を下ろした。

ザアルの巨木の蔭の下、ここかしこに、弁当をつかう人々の姿が見える。ワインの小瓶の栓を開けて、中身を飲んだ。

顔をしかめる。

少々、酔がわいてきているようだった。

パンに脂を塗って、端からばりばりと食う。

後ろで、誰かが喋っている声が聞こえた。

同じように、ワインに愚痴をこぼしていた。

「ひでえな、あの親父。水を混ぜるにも程度つてもんがあるだろ」

「知らなかったか？ 有名なんだぜ、あの店は」

「まったく……、ああ、そうだ。例の返事、どうだ？」

「ええ？ 本気だったのかよ」

やや、声が大きいい。男は振り向いて、ちらりと彼らを見た。
服装から、カルモの市民兵たちのようだった。

「砂丘まで？ 冗談じゃないぜ」

「でも、あのままじゃ、あんまり気の毒だ……」

「帝国の連中にやらせりゃ、いいじゃないか」

「できるわけないだろ。一応遺族の顔を立ててはいるけど、反逆者扱いなんだからな」

「……」

片方が、考えこむように少し黙った。

「手当てが出るのか？」

「隊長はそう言ってる」

「ふうむ」

男たちの会話を後ろに聞きながら、デレクは瓶の中身を半分まで空けた。

オアシスの灯台は、今日も堂々たる姿のままで。

その上を、申し訳程度に、ひとときの雲が流れていった。

「もう一年が経つ。だいぶん、骨も拾いやすくなっているだろ」

「岩狼イワオウが来て、みんな食っちゃったんじゃないかな」

「連中は、火をかぶった肉は食わない」

ワインを嘔く音がした。

「……思い出させるな！」

「すまん」

「飯が、まづくなっちまった……」

「すまん。だが、おまえさんは神経が細すぎるぜ」

デレクはずっと、輝く昼の町並みを眺めていた。

どうして、と思う。

（どうして、連中はここを焼かなかったのだろうか……）

本来ならば、帝国の報復は避けようがなかった。

カルモの過激派は街を乗っ取ったものの、人々がどうなるかということに関しては、まるで考えもしなかったのだ。

空爆で灯台を崩すことは、帝国軍が連中の戦意をくじくに十分な材料だったはずだ。

しかし、空爆はなかった。

シーカーはカルモ議会の意向を受けて、過激派から街を奪い返した。

（今度は、調整士を何人か送ろう。灯台も老朽化が進んでいるから……）

光源となるレンズの発掘も、また儲かる商売だ。

ウーブやメデュラに、新しい灯台の建設を持ちかけた方がいい。

需要は作るものだ。今は亡き、尊敬する師たちから、デレクはそうに教わっていた。

（でも、どうして……？）

あのとき、いったいカルモの駐留軍に何が起こったのだろう。わからなかった。

彼らはみんな、今はもういない。

眼下で、網のように巡らされた水路がきらきらと輝いている。

階段に腰かけた人々は、思い思いにくつろいでいた。

デレクは階段に横になった。温まった石が、昼寝にちょうどいい。

そして、スキアド・オブス《影の目》は何者かに感謝した。

神か、悪魔か、あるいは運命という名のものに。

この街がまだ……、ここにあることを。

(メデュラ)

少年は絵を描いていた。

赤土を溶いて、白い岩壁に塗りつける。

思うように翼の形が描けなくて、何度もしくじった。壁は落書きで埋まった。

「兄ちゃん」

弟が来た。

「母さんが怒ってる。水汲みは？」

「おまえ、やっておけよ」

「やだよ。だいたい、坑道には入っちゃだめなのに」

「危なくなんかないさ、ほら、来な」

穴の奥に入ってきて、弟は目を丸くした。

「デュラコーン
竜」

少年は鼻の下を得意げにこすった。赤土がついた。

「ねえ、これ デュラコーン だよね、兄ちゃんが描いたのか？」

兄はうなずいた。

少しして、弟が言った。

「青土で描いて、角をもっと長くすれば、もっと似てると思う」

「よし」

あの朝、凍える朝日の下で、彼らは竜が飛んでいくのを見ていた。

青い竜だった。

メデュラの再建のおり、神官たちは絵師を呼んで、その姿を板絵に写させたのだけでも。

わくわくと見に行つて、二人の兄弟は納得のいかないまま、聖堂を後にした。

絵の中では、白い服を着た使徒が、輝く髪をなびかせて善竜に乗っていた。

横にはお説教書きが添えられていた。予言は成就し、悪は正されたのだと。

「俺たちが見たのは、あんなんじゃなかったよね」

弟が言い、兄もうなずいた。竜は、もつともつと、きれいだった。

乗っていたのは神様なんかではなく、ゴーグルをかけた若い男だった。

メデュラの通信艇乗りの服装に、ちよつと似ていた。

板絵を見てしまつてからは、大人も子供も、白い服の使徒の話ばかり繰り返すようになった。メデュラの再誕山から現れたところを、その目で見たと言ひ出す者まで現れた。竜は確かに、レーテの河上から飛んできたというのに。

だから、そのとき彼らは決めたのだ。

いつか自分たちの手で、ほんとうの竜の姿を描き残しておくのだと。

弟は青土を取りに走った。兄は壁をよく拭いて場所を空けた。

少年たちは水汲みを忘れた。

その晩、母親から大目玉を食らつたことは言うまでもない。

(ラドー)

灌木は互いに間隔を取つて、丘をまばらに覆っている。

頂上には、古い砦の跡があった。

老人は丘を登っていた。

彼には、どうしても許せないことがあったからだ。

重い鉄のシャベルを布に巻いて、急な坂道を行く。日よけ布の下の顔は、汗でびっしよりだ。

（ふざけるな……）

なぜ、自分ばかりがこんな目に遭うのか。

半月前、娘が死んだ。砂塵熱だった。同じ頃、二人の息子の訃報が届いた。妻を失ってから、男手ひとつで育ててきた子供たちだった。

若い村長の一言が、男の心をえぐった。

「神罰が当たったのです。帝国の真似をして、竜を獣のように扱ったから」

男は若者を斬ろうとして、周りに取り押さえられた。

（あいつらは、提督に従っただけだ。ラドーのために、それなのに……）

老人は決して涙を流さなかった。

どす黒い怒りだけが、ずっと腹の中に渦巻いていた。

誰かを斬っても、解決などしない。けれど、許せなかった。

老人は王を信じなかった。

老人は神を信じなかった。

彼らが何をしてくれるというのだ。

男はただ、銃と剣だけを信じた。

息子たちをそのように育て、藩政のもと、密かに共和の理念を叩きこんだ。
読み書きを教え、偉大なラドーの先人たちの話を伝えた。

間違ったことをしてきたとは思わない。

(俺が、殺したというのか?)

戦士には死すべき時がある。なら、それもよからう。

だが……。

提督が デュラゴン 竜 に手を出したことまでは、老人は知らなかった。

砦の瓦礫が見えてきた。百年前に建てられて、放棄された場所だ。

土地のものは、絶対に近づこうとはしない。

老人も、ここに来るのは初めてだった。

いつのことだったろうか。

彼の祖父が、ある日刀を砥ぎながら、丘を指さして言ったのは。

「誰も責められないけれど、皆殺しにしてやりたいと思うぐらい、どうしても、許せないことがあったら……」

「許せない、こと?」

祖父は白い髭を揺らして、うなずいた。

「あの丘の頂上を掘れ」

「どうして? 攻性生物が出るから、父上は絶対に近づいてはいけなと言われました」

祖父は刀の砥ぎを確かめて、光にかざした。

「なに、いるもんか。あそこには餌も遺跡もない」

「え？」

「もし、そのままでは誰かを傷つけるほど、怒りに喰われそうだと思ったときには」

祖父はそこで言葉を切って、孫を見つめた。

うつろな目だった。

少年は、厳しい祖父のこんな悲しげな顔を見たことがなかったので、言葉に困った。

「……悪かったと、思っています。僕は刀を抜くべきではなかった。でもあいつの侮辱は、伯母上をあんまり馬鹿にしています……」

祖父は首を振った。

「そういうことでは、ないんだよ。もう、充分親父に怒鳴られたはずだ」

「ええ」

少年は首をかしげた。

「丘に行けば、何がわかるのですか？」

「私たちがわかる」

祖父はそう言った。

「そのとき何を思うかで、お前自身のこともわかるだろう」

「……」

「でも、それを確かめるのは、お前がもうどうしようもないほど、後戻りのできないくらい、すっかり大人の男になってしまっただけにすぎないのだ」

「え……」

「わしはもう死ぬ。だから、教えておくのさ。別にお前が行かなくてもいい。ただ、次の奴らにも、きちんと教えてやっておくれ」

二月後、祖父は死んだ。

少年は青年になり、やがて父親になり、そして全てを失った。

半世紀の間、忘れていた祖父の言葉が甦ったのは、昨日の午後に入ってからだ。

老人は砦の入り口までやってきた。

崩れた土嚢と、石組みの跡が残っていた。

(百年間、このままか)

メッカニアに最初の竜が現れた時代だ。

男は奥に進んだ。

日干しレンガの塀があった。

隙間から、つる草と木が伸びている。

塀は黒く汚れていた。

男はレンガの表面に触れた。

ちょうど人の頭の高さに、くつきりと銃弾の跡が残されていた。

「……」

視線を少し下にずらすと、もう少し低い場所にも、同じような穴が開いていた。

男は黙って、乾いた地面を掘りはじめた。布を広げ、上に土を置いていく。

一リオンほど掘っただろうか。急に土が軟らかくなって、シャベルの先が何かに触れた。老人はそれを取り上げた。

「……」

思ったとおり、人骨だった。

土の中には、白いものが無数に埋まっている。

男は深く目を閉じた。

（……私たちが、わかる……）

怒りは消えなかった。

祖父はなぜ、この場所が放棄された理由を知っていたのだろうか。

「ひどすぎる」

老人はつぶやいた。

「この世は、俺たちは」

一本の骨を持ち、のろのろと穴の中から這い出した。

光の下で、もう一度よくそれを見てみた。

確かに、人間の大腿骨だった。

男のものにしては、やや華奢にすぎる。おそらくは十四、五歳の少女のものだろう。老人は穴を埋めると、骨を布にくるんで丘を下った。

(じいさん、俺はまだ、あなたほど大人にはなりきれないんだよ……)

少女の骨は、白くて小柄な笛に変わった。

羊の群れをレーテへ追いながら、老人は日がな、古い曲を吹きつづけた。骨の主は、彼らを許してくれるだろうか？

許すも、許さないもない。

彼女はもう、百年前からいないのだ。

老人は、神も靈魂も信じなかった。

笛の音を聞きつけたのか、河の下を行く隊商たちが立ち止まった。

老人を指さして、それから彼に手を振った。

小さく、叫ぶ声が聞こえた。

「もう一度！ もう一度！」

老人はアンコールに応えた。

〈中南〉

子供たちは家の前を掃き清め、石香樹の小枝を集めだす。

村の若者がクーリアに乗って現れて、客人たちが、もうすぐ到着することを告げた。男たちが若者に尋ねた。

「村の場所が変わったことを、きちんと伝えたか？」

「もちろん」

もう、あの大きな家はない。

村の一軒一軒は、まだ立て直したばかりで、あちこち不具合があった。

それでも人々は快く、隊商に宿の提供を申し出た。

女の子たちが、クーリア小屋の掃除をはじめた。

男たちは、今年の穀物の袋を確かめている。

上質の塩との交換に、恥ずかしい品物がないかどうか。

「今年は、デムラコーン 竜の話が聞けるかもしれないよ」

若者が得意げに言った。

「えっ？」

子供たちが集まってくる。

「見たんだってさ、ハルサの湖のそばで。さいはてに消えてしまったんだって」
「それで？ それから？」

「詳しいことは、向こうのおじさんたちが話してくれるよ。さあ、散った散った」
村を少しだけ離れると、高台からは巨大な摺り鉢が見える。

砂漠に穿たれた無数の穴を埋め戻すには、あと何百年の風が必要なのだろうか。
それは、誰にもわからない。

(ハルサ)

数か月ぶりに、男たちの半分が帰ってきた。

交代で、何度でも行くのだ。

ハルサの塩の大地は、穀物を生み出すには適さない。

しかし、その塩はこの最南の地に、豊かな富をもたらしていた。

「よう、お帰り」

「おう」

クーリアの背から穀物の袋を下ろす彼らを、留守居の男たちが迎えた。

ジェノはクーリアを降りて、水場に連れて行った。

男たちが、その背中の後ろで話をしている。

「いいなあ、あんたのところは。若いのがいて」

「なに、まだ半人前さ。これから仕込みにやいかん」

井戸から引かれた水の道は、住居の外へと伸びている。クーリアたちの喉を撫でてやってから、手綱をそこにつないだ。荷物をすっかり運び入れてしまうと、甕に水をくんだ。

階段を下りて、家へと向かった。

「おかえり」

トゲマメの種子をよりわけていたサラカが、こつちを振り向いて笑った。

「ただいま」

「どうだった？ アルダさんは元気だった？」

「うん。今年は豊作だったって」

「そう」

ジェノは奥の部屋へ行つて、水で体を拭いた。

団長がやってきた。

「疲れたか」

「いえ」

ジェノは窓辺へ寄つて、剃刀で顎を撫でた。

「いいかげん、観念して伸ばしちまえ。貫禄がつく」

「それも、いいとは思うけど」

まだ、きちんと伸ばすには、まばらな髭だ。

「中途半端は、格好悪いですから」

「まあな。でもいつまでも、半人前ってわけにはいかないだろう？」

ジェノはもう一度団長を見て、困ったように微笑むと、黙って道具を片付けた。

団長の目が笑っている。そして、ごま髭の男は旅装を解いて、ゆっくりと水を飲んだ。

ジェノが上着をつかんで部屋を出ると、サラカはまだ、一心不乱に種をよりわけていた。

「怪我するよ」

ジェノは後ろから声をかけた。

「棘を刺すからさ。古い革手袋があっただろ？」

サラカは振り向かずに答えた。

「もったいないわ。穴を開けたら」

「無理するなよ」

ジェノは壁の棚をかき分けて、手袋を取った。

「ほら」

サラカが不服そうに、口を尖らせた。

「わたしは、そんなにヤワじゃないんだから」

「知ってるよ」

ジェノが外へ出ようとすると、サラカが立ち上がった。

「そうだ、ジェノ。ちよつと付き合つて」

「何？」

赤茶けた岩場が、急な傾斜でそびえていた。

二人はそこを上った。

サラカの息が切れる。ジェノは下に手を伸ばした。

「つかまれよ」

「ううん」

サラカは首を振った。

「一人で、登れるから」

そう言いながら、彼女は汗でびつしよりだ。

何度か岩の途中でサラカを待つて、二人はやつと頂上へと着いた。

「戻ってきたばかりで、ごめんね。でも、どうしても見せたくつて」

サラカが崖下を指さした。

「おととい、いつせいに芽吹いたの」

ジェノは腹這いになって、谷底を覗いた。

崖の下には、細い川と道が見えた。

道の縁には石積みがあつて、そこから緑の枝が伸びていた。

トゲマメの木だ。

ジェノは出かける前に、植替えを手伝つたことを思い出した。

「あんなに？」

「うん。思つたより、ずっと成長が早いみたい」

二人はしばらく、緑に見とれた。

枝は小さく風に揺られて、弧を描くように踊っている。

彼女は種から木を育てている。

クーリアの水場の下流で、踏みつけられないように石垣を組んで。

若後家の道楽だ、と誰かに言われると、サラカはそのたびに声を立てて笑うのだった。

「トゲマメはじょうぶな木よ。葉を落としてくれれば、次には石香樹セッコウジュを植えられる」

太陽が西へ傾いた。

「そろそろ……」

「うん」

暗くなる前に、岩場を降りたほうがいいだろう。

サラカはショールを取つて、風に黒い髪を晒した。

「雨が多くなつた気がするの。それに、風の匂いも少し変わった」

「さあ……」

大地は、相変わらず赤茶けたままだ。ジェノには信じがたかった。

「川底を見たことがある？　ときどき、木の葉の化石が見つかるわ。ずっと昔には、このあたりだつて一面の森だったのよ」

「本当に？」

「いずれ、もう一度そうなるから」

サラカは遠くに光る塩の湖を見つめて、はつきりと言った。

「そりゃいいや。少なくとも砂塵熱は減るね」

「そう？」

サラカが悪戯つぽく笑った。

「砂塵熱が減ったって、今度は瘴熱が出るかもしれない」

「ヘスの沼地帯みたいにな？」

「ええ。必ずしも、いいことづくめじゃないわ。変わるってことはね」

崖の下の緑を満足げに見やりながら、サラカはうなずいた。

「そのとき何をしたらいいか、調べておかなくっちゃ」

変に、生真面目な声だ。

ジェノはぶつと吹き出した。

「いったい、何十年後の話さ？」

「どうかしら」

サラカが言った。

「何百年後……、もしかしたら、何千年後かもしれない」

振り返った彼女は、肩をすくめた。

ジェノは何となく、聞いてみることにした。

「その頃まで、人間は生きていられるのかな？」

サラカが首をかしげた。

「さあねえ」

吹き上げてくる風が、若葉の匂いを運んできた。

サラカは腕を伸ばして、気持ち良さそうに深く息を吸った。

「何がいいことで、何が悪いことなのか、私たちには知りようもないんだけど……」

それから崖の縁を離れて、彼女とジェノはもと来た道に戻った。

歩きながら、ジェノは続きをうながした。

「……けれど？」

「だからって、何もしないでいるわけには、いけないと思うのよ」

「よく、わからない……」

「ふふふ」

村に戻った頃には、すっかり日が傾いていた。

階段を下りると、甘い匂いが鼻をついた。

ジェノは歓声をあげて、井戸端の小さな木に駆け寄った。

「ねえ、サラカ！」

サラカはびっくりと立ち止まった。

「おいでよ、石香樹が咲いてる！」

ふらふらと、彼女はそこへやってきた。

「さつき君が言ったのは、本当なのかもしれないな」

ジェノは言った。

「こんなに、早く咲くなんて。今晚が初めて？」

彼女はゆつくりとうなずいた。

「咲くなら、明後日ぐらいだと思っていたから。まだ、蕾も小さかったし……」

あの雨の後、病み上がりの体で、彼女が井戸端にいたのを覚えていた。

サラカが土に膝をついた。

しゃがんで、その花を覗きこんだまま、彼女は小さくつぶやいた。

聞き取れるか、聞き取れないか、それくらいの声だ。

「ジェノ、ごめんね」

「……どうした？」

ジェノは何気なく、聞き返した。

「わたしたちが、あなたを引きずり下ろしてしまったのだと思う」

それを聞いて、ジェノは小さく息を止めた。

「やっぱり……」

ジェノを振り向かせた、世界の呼び声。

潮の底で嗅いだ、レーテの水の匂い……。

(どこまでが……)

どこまでが偶然？

どこまでが、仕組まれた物語？

ジェノは目を伏せた。

オルタは、フリーゲは？

彼らはどこまで、知っていたんだろう……。

ジェノにはわからない。

そして言った。

「やっぱり、あのとき君も、あそこにいたんだね」

「本当に、ごめんね」

ジェノは黙って首を振った。彼女には見えないうだろう。でも、きっとそれでいいのだ。

「あなたは……、今でも幸せ？」

サラカは石香樹の花に軽く指を這わせながら、今度はしつかりとした声で、そう尋ねた。花の中心に、血のように赤い色が差している。

「君は？」

彼女はしばらく黙っていた。泣いているのかもしれない、ジェノはそう思った。サラカが立ち上がり、振り返った。

しかし黒い瞳は、少しも潤んでなどいなかった。

夕暮れと、月の光を宿して、その両眼はあくまでも挑むようにジェノを見つめる。声に震えはなく、弱々しさのかけらもない。

「わたしは、とても幸せ」

「……」

ジェノは伏せた目を開いた。

いずれ、すべてが回りだす。

魔法の指輪は、主人のもとに還ったのだから。

初めから終わりまで、取り返しがつかないまま回り続ける、輪廻の光輪。すべてはここで始まり、ここで終わっていく……。

抜け出すことは、できないのだろうか？

ずっとこのまま、太陽が溶けるまで、その輪は回り続けるのだろうか？

たぶん、それも真実なのだろう。

けれど、いつでも、真実には半分の余地がある……。

ジェノはくすりと笑った。

誰にでも、わかつているはずだ。

差し出すと、彼女もジェノの手を取った。

握手に応じてくれたのは、今晚が初めてだ。

彼女の指にはあの日から変わらず、銀の指輪が光っていた。

君は一生、彼を忘れてはくれないのだろうね。

僕が、竜のことを絶対に忘れないのと、まったく同じように。

ただど決して、今の僕たちは孤独ではないし、不幸せなんかじゃあない。

「……僕も。今でも……」

そして、あのとき、彼は確かに僕を連れて行ってくれたのだ。

僕の魂の一部を。

僕は、ときどき夢を見る。

夢の中で、僕は、彼とともに空を飛んでいる。

黒い森の上、灰の舞う溪谷、白い骨のような柱が並ぶ古代の街。

あるいは青い、彼方の恒星に向かって、星屑の中を飛んでいることも。

ここにいる僕が、新しい家族たちと、地上を歩みつづけるとき……。

僕の失われた半身は今でも、彼と、彼の乗り手とともに、大空を旅し続けているはずだ。

僕らは飛び続ける。

いまや、翼を失った、すでに少年ではない一人の男を地上に置き去りにして。

どこへ？

どこでもいい。どこへでもかまわない。

彼は、今も僕とともに……。

Tolas ec me'via

*Εαν τι χοιρερ ελ εκει στο τυα τολασ εχ τυαδια,
ενεπετ ροτο ελ πιπιρε εκει ανυ ελ μνεμορε μυ.*

Ορτααε πενυ,

χορπυσ ααε φιοι σιμι πετρα, δαενα ιρε εκει.

Ινταρ χυβε εχ ονειροσ, αλλα δαενα ιμνεμορε του...

*Εαν τι χοιρερ ελ εκει στο τυα τολασ εχ τυαδια,
ενεπετ διρε ελ πιπιρε εκει κεεσσε βεατα νυν, ιγο.*

旅の終わりに

もしも旅の終わりに

その国であのひとに出会ったとしたら

僕のことを覚えているかと

聞いておいてはくれないだろうか

夜は明けて身体は重く

僕は今そこへ行くことができない

けれども夢の小箱の奥で

僕はいつでも君を思うと

もしも旅の終わりに

その国であのひとに出会ったとしたら

僕は今でも幸せだからと

伝えておいてはくれないだろうか